闇の剣士 麝香猫（じゃこうねこ）

南原幹雄

角川文庫

な
10-28

闇の剣士 麝香猫

南原幹雄

角川文庫
560

ISBN4-04-163328-1
C0193 P560E 定価560円
（本体544円）

開国か、攘夷か——。風雲急を告げる安政五年。彗星が出現し、コロリが東漸しつつある京都を襲った第三の脅威こそ、大老・井伊直弼による尊攘派の大弾圧、安政の大獄に他ならない。

だが、京都七口が封鎖され、大老の懐刀・長野主膳が粛清の鉄槌をふるう異常事態の中で現われたのが、麝香猫を頭領とする闇の一団である。

奇策を用い、神出鬼没の行動で尊攘志士を救出する謎の英雄の活躍を描く、時代小説ファン必読の一冊！

●南原幹雄（なんばら みきお）
一九三八年、東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。『女絵地獄』で小説現代新人賞、『闇と影の百年戦争』で吉川英治文学新人賞を受賞。代表作に『北の黙示録』『暗殺剣』『謀将 直江兼続』『徳川御三卿』などがある。

カバー 百鬼丸

角川文庫
南原幹雄作品集

御庭番十七家
天保悪の華(上)(下)
大奥十八景(上)(下)
おんな忠臣蔵
御三家の犬たち(上)(下)
疾風来り去る(上)(下)
天地燃える(上)(中)(下)
にっぽん好色英雄伝
吉原大尽舞
新選組情婦伝
情炎くノ一系図
情炎くノ一殺法
御三家の黄金(上)(下)
暗殺剣(上)(下)
吉原繁昌記
黄菊白菊
御三家の反逆(上)(下)
吉原おんな市場
闇の剣士麝香猫

カバー 晩印刷

闇の剣士 麝香猫

南原幹雄

角川文庫 10042

闇の剣士 麝香猫

南原幹雄

角川文庫
10042

闇の剣士麝香猫（じゃこうねこ）

南原幹雄

角川文庫 10042

闇の剣士 麝香猫（じゃこうねこ） 目次

安政の大獄　七
蹴鞠大納言　一四
麝香猫　二三
麝香の匂い　三五
尊皇和尚　四二
御所歌会　五三
白梅図子　六五
薩摩屋敷　八五
相国寺　一〇〇
居酒屋米半　一一六
竹の道　一二五
一七六

淀川下り　一九三
屋根裏部屋　二〇八
蹴鞠の日　二二七
燗酒の屋台　二四二
東殿町　二六一
清水寺参道　二七六
禁裡の賊　二九六
作戦会議　三一五
長坂口　三三三
解説　縄田一男　三五二

安政の大獄

風雲が京都をおおっている。

しずかな京都が、はげしく揺れうごきだした。

第十三代将軍家定の継嗣問題とアメリカの総領事ハリスが日本にもとめてきた通商条約が、京都の長いねむりをつきやぶった。幕府の〈開国派〉井伊直弼が条約締結にうごき、将軍継嗣に紀州家の当主慶福を推したのにたいし、〈尊皇〉〈攘夷〉のスローガンをかかげる水戸前藩主徳川斉昭、尾張藩主徳川慶勝、越前藩主松平慶永らを中心とする勢力がはげしくこれと対立した。彼等は一橋家当主慶喜を継嗣に推し、通商条約の締結に断固反対をとなえ、勢力を二分するかたちとなった。この争いがとくに安政五年（一八五八）に入っていらい、京都に波及したのである。

言うまでもなく、京都は千年にわたる皇城の地であり、天皇は日本の国体の中心である。その天皇と朝廷の権威をかりて、いわゆる〈尊攘派〉は大老に就任した井伊直弼に対抗しようとした。

幕府創設いらい、朝廷は政治を幕府に委任したかたちをとっているが、ここに朝廷は政治の表舞台に姿をあらわしてきた。尊攘派の運動がいやが上にも、朝廷を表舞台にひきずりだしたのである。

尊攘派の志士や学者たちが大勢京都にあつまってきて、自分たちの思想を公家に吹きこみ、尊攘派に加担させようと躍起になった。公家のなかでも政治にめざめる者がおおく、京都はいやが上にも沸騰してきた。

京都を風雲がおおいだした原因は、ほかにもある。この年は、春から風雨時ならず、天候不順であった。

「今年は凶年じゃ、不吉なことがおこるじゃろう」

「長崎にコロリという病いが上陸し、これにかかった者はみな死んでおるとか」

「コロリは猛威をふるって、九州から中国をへて上方にむかっておるそうじゃ。くわばら……」

「彗星があらわれたのも、不吉の兆であろう。今年はこのままではどうにもおさまるまい」

身分の上下を問わず、京都の住人たちはみな恐れをなしていた。

コロリは、この年五月上海をへて長崎に入港したアメリカ軍艦の乗組員にその患者がいたため、たちまち長崎中に蔓延し、西国を席捲して東にむかってきているのである。本来

の病名はコレラだが、一度かかったらたちまちコロリと死んでしまうことから、そういう名がついた。

当時の京都の人々が書いた日記などを見ると、

『黄昏頃より西方から彗星出。今夜芒気甚長、二間ばかりあり。恐るべし、恐るべし……』〈内大臣一条忠香の日記〉

『方今蛮夷事情、人心不和之時節、去月いらい彗星出現。しかのみならず異病流行……』〈同日記〉

といった次第である。政治上の対立、異病の流行、妖星の出現などで人々のこころはおののいていた。近々のうちに大きな波瀾がおこることも予想された。

安政五年九月初頭、秋の日が暮れなずむころ、近江国大津の旅籠屋に初老の旅人がそそくさと草鞋をぬいだ。姿は商人のなりだが、風貌骨柄には見る者が見れば、おかしがたい人品がうかがえた。

その男は旅籠の宿帖に、

信州松本住　商人源兵衛

としるした。文字は達筆である。

その男は飯盛の奉仕も酒もことわり、夕餉だけとって、初更のころには床に入った。

夜がだいぶ更けたころ、旅籠屋の戸をたたく者があった。手代がねむそうにでてゆき、

戸をあけると、町方役人ふうの男が三人ずいと入ってきた。
「主人はおるか。宿改めや」
いちばん年かさの男が旅籠屋の主人を呼びつけた。
主人が奥からでてゆくと、
「京都東町奉行所同心、大河原十蔵」
と年かさの男は名乗った。あとの二人は手下である。
「宿改めでござりますか」
主人がたずねると、
「そうや、商人にしては風采のよい初老の男が泊っとるやろ」
大河原十蔵と名乗った同心は主人をねめつけるように言った。
主人はすぐにおもいあたったようで、
「そない様子の客がいてます」
とこたえた。
「その客の部屋に案内せえ」
主人は大河原の眼光に射すくめられて、案内にたった。
手下の一人は大河原について行き、もう一人は旅籠の入口をかためた。
主人と大河原が階下のその部屋の前に立ったとき、ものすごい勢いで部屋の襖をあけはなち、猛然と初老の泊り客が飛びだしてきた。

その男は何も言わずに、旅姿のまま遮二無二廊下をはしった。宿の寝巻を着ずに、用心のために道中着で寝ていたようだ。
「逃がすなっ」
大河原がさけんだが、手下ははね飛ばされた。
大河原はさすがに捕り物の経験をつんでいた。手にしていた十手をはっしと投げた。それが逃げる泊り客の後ろ首に命中し、ぐらっとよろめいたところを背後から組みついた。
揉み合いがしばしつづいたが、やがて大河原と手下とで初老の泊り客をとりおさえ、すばやく両手をしばりあげてしまった。
「山本貞一郎の兄、近藤茂右衛門やな」
大河原がきめつけて言うと、初老の男は観念したものか、
「そうだ、近藤茂右衛門である。大津まで逃れてきてつかまったのは無念だ」
近藤があっさりと白状したのは、先日弟の山本貞一郎が尊皇運動とりわけ朝廷への運動を幕府方に探索され、捕縛される前に毒をのんで自殺した。このときの遺書や同志との連絡文が幕府方の手にわたっていたのである。
「証拠はみなそろうとるんや。観念せえ」
大河原は勝ちほこったように言った。

大老井伊がこの六月、日米通商条約を朝廷に無断で調印したことにたいして、徳川斉昭、徳川慶勝、水戸藩主徳川慶篤が不時登城して井伊をきびしく難詰した。井伊はこれに対抗して不時登城を責め、斉昭を急度慎に、慶勝を隠居、急度慎に、慶篤を登城停止という罰に処した。そして井伊は将軍継嗣を紀州慶福に決定する旨を公表した。井伊は大老就任をはたすことによって条約問題と継嗣問題に一気に決着をつけようとしたのである。

井伊の独断専行に反対派が怒り、猛然と反対運動を主として京都でまきおこした。近藤茂右衛門、山本貞一郎兄弟は、

『勅使を関東へ下し、大老井伊を罷免し、斉昭、慶勝、慶篤三公の罪を赦免するよう』

朝廷にたいして建言した。

朝廷は尊攘派志士たちの運動にこたえ、井伊の無断条約調印と、斉昭、慶勝、慶篤の処罰を責め、幕府は三家、三卿、列藩と群議し、国内の治平と公武合体につとめ、外国の侮りをうけぬよう、という勅諚を幕府と水戸藩へくだした。これがいわゆる密勅の降下である。

幕府方は、井伊の懐刀長野主膳が京都にのりこみ、京都所司代酒井忠義の手勢を動員して、志士の取り締りを徹底的におこなっていた。山本貞一郎が密偵の目明し文吉の探索をうけ、追いつめられて自殺したのはこのためである。

「ひっ立てえ」

大河原は手下に命じ、この場から近藤を京都へつれもどし、六角獄に投じた。

これが、後世〈安政の大獄〉と呼ばれるようになった大弾圧と未曾有の大獄のはじまりとなった。これ以後、尊攘派の志士、学者、商人、さらに公家までが苛烈な弾圧によってつぎつぎに召し捕らわれ、獄につながれていった。

大老井伊は京都に群集した志士たちを徹底的に弾圧することによって、尊攘派に鉄槌をくだし撲滅しようとはかったのである。

近藤捕縛の情報はその日のうちに、京都に巣食う志士たちの耳に入った。

近藤茂右衛門は、信州松本の豪商であり、家は旧家で代々名主をつとめていた。幼いころから弟とともに出雲の歌人中村守臣について国学や歌道をまなび、長じて尊皇思想をいだくようになり、条約、継嗣問題がおこるや弟と京都にでて運動に奔走していたのである。

烏丸通り、御池上ルにある志士の中心人物梅田雲浜の寓居にもその悲報は、すぐにもたらされた。

「なにっ、近藤さんが召し捕られた?」

雲浜は第一報に接して、天をあおいだ。近藤はその年輩と学識の上からしても志士たちのあいだに重きをなしていた人物である。

「山本さあにつづいて、近藤さあも危難にあいもした。幕府は志士を一網打尽にする覚悟ばさだめたようでごわす」

雲浜邸で歯ぎしりするように言ったのは西郷吉之助と行動をともにしている薩摩藩士有馬新七であった。西郷と有馬は薩摩藩を代表する尊攘派の志士である。

「そのようだな。長野主膳はその目的で京にのりこんできたのだ。長野が指揮をとり、京都所司代と町奉行をうごかすつもりだ。さらに長野は九条家の島田左近をつうじて関白をうごかそうとしておる。はなはだあやうい事態となった」

雲浜の見方には有馬も同感である。長野主膳は井伊の意をうけ、なみなみならぬ決意をもって入京したと言うべきであった。

しかも朝廷の内部も、すべての公家が反幕府の立場をとっているとはかぎらない。関白九条尚忠は無二の幕府方である。九条尚忠は従来から幕府方の立場をとって、尊攘派の公家たちと対立していた。

「梅田さあ、気をつけてくださっしゃい。志士を一網打尽にするならば、第一にねらわれるのは梅田さあでごわす。池内さあ、三樹三郎さあ、橋本さあ、月照和尚はとくにあぶなか」

血気の有馬は声をふるわすようにして言った。梅田雲浜、池内大学、頼三樹三郎に梁川星巌は幕府方から〈悪謀の四天王〉と呼ばれているのである。

「そうなればみなおなじだ。尊攘のためにはたらいておる者はことごとくねらわれるだろう。西郷さんや有馬さんも真っ先にねらわれる。密勅をうけた鵜飼さんや、それを江戸へはこんだ息子の幸吉もあぶない。公家たちも安全とはいえぬ。幕府はそこまでやるつもりだろう」

「京に大嵐が吹き荒れるでごわそ。一刻もはやく嵐から身をまもることが大事でごわす」

「同志たちにいそぎ連絡をとらねばならない」

雲浜の寓居には、今朝方まで頼三樹三郎、池内大学の二人がきていたが、昼ごろかえったばかりだった。

「このことを知らぬ者もごわしょう。京に用のない者は一時、避難するのが最善の策でござりもそ」

「わしも同志たちとの連絡がとれしだい、ここをたたんで、しばらく京をひきはらうことにする」

「それがようござりまっしょう。みすみす捕り縄を待っちょることもごわはん」

有馬は情熱の士で、薩摩藩における尊皇運動の魁ともいうべき人物である。若くして江戸にでて、山口菅山にまなび、同門の雲浜と親交をむすんできた。

有馬がそそくさと立ち去ってから、雲浜は身のまわりの始末をはじめた。幕府方の手にわたってはならない諸士とかわした書簡や日記などを焼き、秘密の文書なども同様に始末した。身のまわりの片づけをおえたら、雲浜は三本木丸太町に寓居をかまえる梁川星巌のもとへ危急をしらせにはしるつもりであった。

そのころ、

丸太町通りを三本木方面へむかっていそぐ所司代の役人と、京都町奉行所の捕り方たちの姿があった。一行の指揮をとるのは東町奉行所与力加納繁三郎であり、同心大河原十蔵と目明し文吉も一行にくわわっていた。

彼等のめざす先は〈鴨沂小隠〉と名づけた梁川星巌と妻紅蘭の住まう屋敷である。

星巌は尊攘派の学者、志士として最長老の人物であり、重鎮である。鴨沂小隠には佐久間象山をはじめ、吉田松陰、横井小楠、宮部鼎蔵、梅田雲浜、西郷吉之助ら当代一流の思想家や志士たちがおとずれており、幕府方にとってはそこを〈悪謀の問屋〉と呼びならわしていた。

幕府方としては、志士弾圧をおこなうにはどこよりもここをまずおさえておかなければならなかった。星巌を召し捕り、獄につなげば京都に跋扈する志士たちに大きな衝撃をあたえることになるのである。

やがて、鴨沂小隠のちいさな竹藪が見えてきた。この竹藪の奥に星巌の寓居がある。

捕り方たちは約二十人、竹藪の横の路地をすすんだ。

加納や大河原たちが寓居の玄関に立ったが、中はひっそりとしずまりかえっている様子だ。悪謀の問屋といわれるところにしては、文人的な趣味のただようしずかな住居である。

加納が大河原に目顔で合図をおくった。

大河原は玄関の戸をあけて、中へ入っていった。

住居の中はことさらにしずかだ。無人のような気配である。

「町奉行所の者や。梁川先生はご在宅か」

大河原は中へむかって声をかけ、すばやく住居の中の様子をうかがった。

応答はない。

(はやくも逃げられたか)

と大河原はおもったが、もう一度声をかけた。

すると間もなく、奥のほうで音がして、品のよい老女がでてきた。

「星巌の妻にございます」

老女が大河原の背後にいる捕り方たちを見ながらこたえた。

「梁川先生にお目にかかりたいんや」

大河原が言うと、紅蘭はしずかに顔をふった。

「星巌はおりまへん」

その返事に大河原や加納、文吉らの目がするどくなった。

「梁川先生はどこへおでましやね」

とがめだてる口調で大河原は言った。

「どこにも行ってはりまへん。星巌は死にました」
老夫人の返事に大河原は啞然となった。が、すぐに星巌を逃がすための嘘だとおもった。
「梁川先生が死んだ？　嘘言うたらあかへん」
「嘘やあらしまへん。星巌は一昨日、亡くなりました」
紅蘭は顔色も変えずにこたえた。
「何で死んだのや」
「コロリどす。三日前に腹痛をうったえはじめ、たった一夜で亡くなりました。近所の方々は知ってはります」
紅蘭の答えは衝撃的であった。
大河原ばかりでなく、加納や文吉、ほかの捕り方たちも呆然となった。
コロリはすでに大坂や京都に伝播しており、おおくの人々が死んでいた。
「よりによって、梁川先生がコロリにやられて死ぬとは」
加納がはじめて口をだした。
「位牌をまつってあります。お線香でもあげはってくれますか」
紅蘭の言葉に、大河原も加納も恐れ入って、それを辞退した。コロリは死の病いで、うつればかならず死ぬことはあきらかだった。彼等は紅蘭に近づくのも恐れて、後ずさっていった。

「嘘ではなさそうや。悪謀の問屋もコロリには勝てなかったようやな。死んだ者には用はない」
捕り方たちは一刻もはやく、ここを立ち去りたい一心で、玄関をはなれた。
コロリをなおす妙薬は今のところなく、治療の方法もわからず、なんとか勢いのおとろえるのを待つばかりであったのだ。
早々に一行は鴨沂小隠を立ち去って行った。不治の流行病にかかったとあっては、なすすべもなかった。
その夜の深更。
烏丸通り、御池上ル梅田雲浜の住居を所司代の役人たちが取りかこんだ。
二十数人にのぼる捕り方役人たちは、いずれも捕り物装束にきびしく身をかため、十手、捕り縄を懐中にしている。
近藤茂右衛門の召し捕りをきっかけにして、やはり京都を大獄の嵐がおそいはじめたのである。
「京を舞台にして天朝へ悪謀をしかける者はことごとくひっ捕え、縄をかけよ！　一人も目こぼしをするな」
京都所司代酒井忠義の命令が、所司代と東西の町奉行所役人一同にくだっていた。その

背後には、当然、井伊の懐刀長野主膳の暗躍があった。

長野は幕府と水戸藩への密勅降下をふせげなかったことをはなはだ悔いており、さらに関白九条尚忠の権力失墜をくいとめられなかったことにも無念のおもいをいだいていた。それだけに志士弾圧に躍起となって着手したのである。

雲浜の住居を取りかこんだのも、長野の命令であった。ばかりでなく、長野自身がこの捕り方たちを指揮していた。

長野は頭巾をかぶっており、みずから玄関の戸をたたいた。

取りつぎの若者がでていくと、

「大事がおこっておる。梅田先生に至急にお目にかかりたい」

と言って、長野は偽名を名乗った。

捕り方たちは闇の中に身をかくしていた。

取りつぎをうけて、雲浜がでてきた。この家にはよく諸国から未知の客が雲浜をたずねてくることがあったからだ。諸国の志士は京都にでてくると、まず雲浜に面会をもとめるのをつねとしていた。

「大事とは？」

雲浜はそう聞いたが、すでにおもいあたる節はある。近藤が召し捕られたことと、星巌の死である。自分の身にも危険がせまっていることを察していた。

「志士の召し捕りがはじまりました。所司代と町奉行所がうごきだしました。幕府は志士や学者、商人まで尊攘派の者はシラミつぶしにつかまえ、獄につなぐことのようです」

長野は雲浜にまじまじと見入って言った。

長野も雲浜もほぼ同年輩の四十代だ。

雲浜も頭巾のままの長野の顔を見まもった。おちつきはらったこの男の風貌には志士には不似合なやや傲慢な表情がうかがえた。

「召し捕られた志士は誰だ？」

雲浜がたずねると、しばし間をおいてから、

「梅田雲浜」

と長野がこたえた。

じつに大胆というべきか、相手を愚弄した答えだ。

「なにっ」

雲浜が聞きかえしたとき、長野は口元にうす笑いをうかべた。

雲浜が相手の意を察した。と同時に、

「梅田っ、神妙にせい！」

長野がきびしく言いはなった。

それと時をおなじくして、今まで長野の背後の闇の中にひそんでいた捕り方のうち数人

がどっと玄関の中に駆けこんできた。
「はかったな」
雲浜は太刀を取りに奥へもどる暇もなかった。
「おとなしくしろ。屋敷のまわりはかこまれておる。抵抗は無駄だ。所司代まできてもらう」
長野がおっかぶせて命じた。
「所司代役人か」
雲浜はすでに覚悟をさだめていた。明日にもこの屋敷をひきはらうつもりでいたのだが、よもや今夜のうちにくるとはおもっていなかった。
「おそかったな、梅田。今日のうちにひきはらうべきだった」
「名を申せ」
雲浜は念のために聞いた。
「長野主膳だ。おぼえておけ」
そう言うと同時に、長野は捕り方たちに、
「それっ」
と号令した。
「左様か、おぬしが悪名たかき長野主膳か。大老の懐刀がわざわざここまで拙者を召し捕

りにきたとは」
雲浜はあきれたように言った。
「縄を打て」
ふたたび長野が命じた。
「逃げはいたさぬ。ばたばたするな」
雲浜は一喝して、縛をうけた。
捕り方の何人かがどっと座敷へあがりこんでいき、家捜しをはじめた。
家の者は玄関脇の小部屋にまとめてすわらされた。
押入れや箪笥、戸棚の戸がつぎつぎにあけはなたれた。
しかし大切な書類や手紙などは、夕方のうちに雲浜が始末していた。
「本人をおさえたのだからかまわぬ。ひっ立てい」
長野は捕り方たちに命じた。
雲浜は縄尻をとられて、住みなれた屋敷をはなれた。
空は降るような秋の星だ。

蹴鞠大納言

大獄の嵐が、京都に吹き荒れている。

尊攘派の志士や学者たちが、毎日召し捕られて六角獄につながれていった。

京都を今までこれほどの大嵐がおそったことはなかった。従来のしずかな古都は、一変した。

毎日、市中のどこかを捕り方の集団がはしり、志士の住居や隠れ家をおそい、これ見よがしに大路をひったててくる光景が見られた。幕府方には見せしめの意図も十分にあるのだ。

殺伐な空気が日に日に市中に充満していった。

「恐ろしい世の中がやってきたもんどす」

「いやな世になったな。いつまでこれがつづくのやろか」

庶人たちは召し捕りの行列を見ては、顔を見合わせてささやき合った。

「京都におる志士たちはみな袋の鼠や。逃げるにも逃げられんようになっとる」

「それやったら一網打尽を待つばかりやないか」

幕府は京都の七口を完全にふさいで、厳重な見張りを立てて出入りをあらためており、京都から逃亡することはほとんど不可能な状態になっていた。

京都は盆地であり、南方をのぞく三方は山々にかこまれている。そこに京都七口があり、外との出入口になっている。したがってこの七口をすべてふさげば、ほぼ京都を封鎖することができるのである。間道や抜け道はいろいろあるが、七口の番所がそれぞれ周囲を見張っているので、大体目がとどく。封鎖をするには、京都はまことにもってこいの地形なのである。

粟田口、東寺口、丹波口、清蔵口、鞍馬口、大原口、荒神口の七ヶ所に番所がもうけられ、そこに所司代や町奉行所からよりすぐった番士たちが詰め、志士の逃亡をきびしく見張っていた。毎日、七口のどこかで、志士や尊攘派の学者、商人と見られる者が逃亡を発見され、捕縛されて、六角獄へ召したてられていった。

名ある志士、名のなき者の区別なく、番所の検問はきびしくおこなわれ、蟻の這いでる隙間もないほどの有様であった。

今日も、粟田口の番所において、一組の夫婦が検問の網にかかった。

粟田口は、京都の東の出入口である。三条大橋につうじ、三条口、大津口とも呼ばれる、京都のもっとも代表的な出入口だ。

大橋から東へとり、逢坂山をこせば大津の宿にいたる。さらに琵琶湖にそって勢多へむ

かえば、東南の道が東海道鈴鹿の関、北東へとれば中仙道の不破の関である。

この粟田口にもうけた番所には、番士約三十人がつめていた。番所は本格的なもので、頑丈な柵をつくり、長柄槍、鉄砲、弓をいかめしくならべたて、さらに刺股、袖搦、鋸などの捕り物具をものものしく置いている。

昼下り、中年の商人夫婦が柵をでた先で、番士の一人に声をかけられた。

「奈良屋」

その言葉に、おもわず旅姿の夫婦がふりむいた。

「なんぞ……？」

とこたえた夫婦の前には数人の番士が立ちふさがった。

夫婦の顔色がかわった。

「かたるに落ちた。小川屋と名乗ったのは嘘だな」

四十前後と見える番士がうす笑いを浮かべて言った。

その夫婦は今しがた、柵をとおるときに小川屋長兵衛と名乗ったのだ。無事に柵をでた安堵感から、不意に本名を呼ばれて、つい返事をしてしまった。いかにも狡猾な問いかけであった。

男は度をうしなっていた。

女房は今にも泣きだしそうな顔になった。恐怖が全身をおおっている。

「奈良屋藤兵衛やな。五条堀川の物産問屋やないか」

その番士が意地わるそうにきめつけた。

五条堀川の奈良屋は尊攘派の運動に資金を提供する商人として、かねて幕府方の探索にあがっていたのだ。

「わては小川屋どす。いきなり呼ばれて、おもわず返事したまでどす」

商人はそうこたえたが、説得力はなかった。

「この期におよんで、じたばたするな。奈良屋藤兵衛、見通しや」

番士は一喝し、

「つかまええ！」

ほかの番士たちへ声をかけた。

番士たちは十手、捕り縄をかざしている。

商人は逃げようとしたが、女房が居すくんでうごけなくなっているのを見て、逃走をあきらめた。

「おとなしくせえ」

もう一度一喝されて、奈良屋藤兵衛は唇をかみながら、縄をかけられていった。女房もほかの番士にしばりあげられた。

そして、粟田口の番所から市中へおくられた。

粟田口の蹴上からは、眼下に京都の市街が一望できる。京都の風景はすでに秋の色だ。

奈良屋夫婦はせっかく脱出してきた道を、あえなく縄目の屈辱をうけながら三条大橋への道をもどり、六角通りへ入って行った。行き先は、六角獄である。

六角通りには野次馬がでており、ひかれて行く奈良屋夫婦を見て、ひそひそ話をかわした。家の格子戸の中から見ている者もいる。このところ毎日のように見られる光景であるが、野次馬も飽かずにあつまってくるのだ。

六角獄には、もう大勢の志士たちがつながれていた。大獄の嵐はいつ吹きやむかわからぬ。当分しずまりそうにはない。これからどれほど志士たちが召し捕られて、獄につながれるかわからないのだ。

野次馬たちのささやきも止まない。

庶人は表だっては、幕府の政治の非難はやらない。とくに京都の庶民は本音をあまり表にはださぬ。

政治権力の嵐が吹きまくるのを見ても、眉をひそめ、ささやきを洩らすのが精いっぱいの抵抗である。皇城の地でそだった京都の人士、庶人はなんと言っても朝廷びいきである。御所の膝元で生まれてそだったという誇りを持っている。朝廷方を圧迫する幕府権力には親しみをおぼえないのは当然である。だから朝廷や公家を監視し、取りしまる立場の所司代や、町奉行所にはひとしく反感をいだいている。

かつてないはげしい勢いで吹き荒れている大獄の嵐には啞然とするばかりなのだ。かなしいかな、庶人には幕府に反抗する力も方法もない。こころのうちで幕府権力がいつか失墜し、地に落ちることをねがうしかないのである。

さらにある者たちは尊攘派に英雄、英傑が出現して、幕府権力をたたきつぶしてくれることをのぞんだりもするが、所詮夢物語にすぎないことを知っていた。

「尊攘派の人々がつぎつぎにつかまってはる。この先、一体どうなるんやろ」

「志士たちをつかまえつくしたら、今度は公家を取りしまるいう噂もある」

「幕府は血まようてはるんやないか。一体どこまでやれば気がすむんや」

陰ながら幕府への非難はしだいに高まってきた。

朝廷と幕府との確執は、江戸に幕府ができていらい連綿とつづいてきたことである。幕府は朝廷の権威を背景にして、天皇の名を借り、武家政治をすすめてきた。したがって朝廷は権威だけの存在となり、権力は身ぐるみ幕府にはがされ、無力なものとなった。

それを本来、朝廷のあるべき姿にもどそうというのが〈尊皇〉の精神であり、その運動が水戸の斉昭らの〈攘夷〉思想とむすびついて、尊攘運動にもりあがっていったのである。

京都人士の幕府権力にたいする反感、憎しみは根づよいのである。しかし朝廷には武力がないだけに、幕府への直接的な反対はできない。尊皇思想が澎湃とまきおこってくるのを待ち、諸藩、諸大名の反幕府勢力に期待するしかない状態である。

今がそのよい時機だとおもわれた。従来ではかんがえられぬはげしい勢いで、水戸藩、尾張藩、薩摩藩を中心にして、諸藩に反幕府運動はおこっていた。

それにたいする幕府方の弾圧が、このたびの大獄である。

京都にはぴいんと張りつめた緊張がつづいた。いまだかつてない異常事態に京都はつつまれている。

幕閣における強硬派の老中、間部詮勝がこのたび井伊大老の意をうけて、江戸から京都に乗りこんできて、大獄の嵐は今までにもまして勢いをつよめた。

この勢いには朝廷内の尊攘派公家たちもあわてふためいた。幕府がここまで暴虐な強硬手段をとるとはおもっていなかったのだ。

「これはどうしたことでおじゃる。大老はくるったか」

廟堂における尊攘派の巨頭ともいうべき、直衣姿の前関白鷹司政通は老顔にふかい縦ジワを寄せて言った。

場所は鷹司政通の屋敷の奥座敷である。

鷹司家は五摂家の一にして、屋敷は御所の堺町御門内の右手にある。

「まこと、くるったにおじゃりましょう。気違い沙汰と言うべきじゃ」

とこたえたのは正二位左大臣近衛忠熙である。

「左様、無茶苦茶じゃ。今後もっとひどくなってまいろう」

前内大臣三条実万も言葉をそえた。

「幕府はこれまでにない尊攘運動がたかまるのを見て、切羽つまったおもいで弾圧にでてまいったのでおじゃりましょう」

そう言ったのは鷹司政通の子の、従一位右大臣輔熙である。輔熙一人は直垂姿である。

この四人に内大臣一条忠香をくわえた五人が廟堂における尊攘派の中核である。この勢力がいちじるしく増大し、幕府方である関白九条尚忠が孤立して、関白の地位さえあやうくなっているのだ。

「関白を辞任からまもるためにも、幕府はこのような弾圧にでてまいった」

鷹司政通の顔には苦悩の色が濃い。

名ある志士では、九月十八日、水戸藩の京都留守居役鵜飼吉左衛門、幸吉父子が捕縛され、獄につながれた。幕吏の手がいよいよ公家方にものびてくるのは必至の情勢となって、尊攘派の有力公家たちは鷹司邸にあつまって協議しているのである。

京都を舞台にして尊攘思想がもりあがってきた情勢に便乗したかたちで、朝廷内に反幕府の空気は一気にたかまったのであるが、予想しなかった幕府の大弾圧に、尊攘派公家たちは戦慄したのである。朝幕の戦いとなると、公家はたちまち弱さをあらわしてしまった。力ずくの荒技には公家たちはまったく慣れていない。いざとなった場合の弱さは公家にとっては宿命的なものである。

尊攘派の中心的な公家五人があつまっても、幕府にたいする積極的な手立は何もでなかった。幕府の暴力的な弾圧を非難するばかりである。

「これで九条殿は関白の辞任をおもいとどまるじゃろう。一度死にかけた九条殿が息を吹きかえした」

九条尚忠が辞任をすれば、近衛忠熙がこれにかわると予想されていたが、情勢の一変によって、この更迭はなくなったと見られた。

「朝廷内においても、幕府方がおおいにもりかえしてくる。これを押しとめる手立はござるまい」

政通のたてた見通しは暗い。

「何とかなるまいかの」

三条実万は腕を組んで、虚空を見つめたままだ。

それに応ずる声はなかなかでてこぬ。黙然とかんがえこんで時をすごした。

朝廷は幕府に対抗する武力を持っていない。武力以外の強力な策略もない。しいて言うならば、天皇が不満の意を天下にあらわすために〈譲位〉をするくらいだ。が、これは廷臣たちから天皇にもとめるべきことではなかった。

「ここまできてしまっては、幕府はもう引っこみがつかない。やるところまでやるでおじゃろう」

一条忠香もくらい顔で言った。

「大老井伊がここまで腰をすえてつよい態度にでるとは……」

幕府をとことんやるところまでに追いつめたのは、尊攘派公家たちが天皇に建白した幕府と水戸藩への密勅の降下であると、政通は知っているのだ。政通自身はいくらかやり過ぎだったかと後悔している。

天皇の勅諚が幕府を経由せず直接水戸藩へくだったことは、幕藩体制の根幹をゆるがす大問題であった。大老井伊は赤鬼のように怒った。

赤鬼は井伊の渾名である。先祖いらい、井伊家は赤備で知られている。それで赤鬼の渾名がついた。

「赤鬼がなりふりかまわず、伝家の宝刀をぬいた。行くところまで行くしかなかろう」

政通は心痛のあまり、このところ食もよく喉をとおらなかった。

「赤鬼はその覚悟でおじゃろう」

「大獄は朝廷にまでおよぶかのう」

近衛忠熙は言った。

公家たちの今の最大の関心事はそれにつきるのだった。弾圧の手が朝廷におよぶか、自分たちは安全かどうかということだ。

「朝廷までくるとかんがえるべきでおじゃろう」

三条実万がはっきりとこたえた。

「何といっても、京都七口が幕府の兵でふさがれておるのは異常なことじゃ。天朝が恫喝されておるもおなじではないか。いまだかつて、このようなことはなかった」

尊攘派は鳩首会談をもうけたが、よい結論はでなかった。会談によって不安や心配が増したばかりであった。

最高首脳の五人は、自分の首に冷えびえとした晩秋の風を感じた。

もし幕府の弾圧が朝廷におよぶとすれば、まず尊攘派公家の諸大夫あたりがねらわれるだろう。そこからはじまって、ついには内大臣、左右大臣、親王にまで累はおよぶとかんがえられた。

やがて、近衛、三条、一条らの諸卿が牛車をつらねて鷹司邸を辞した。

客がかえってからも、政通は奥座敷にすわって、じっとかんがえこんでいた。

残念ながら、政通にはこの難局を打開する手がないのである。

このような事態をむかえてからというもの、鷹司家の屋敷はいつもひっそりとして、くらい雰囲気につつまれていた。政通の苦悩を案じて、家族も家来、召し使いたちも気をつかっているのだ。笑顔もこのところ見たことがない。

そのとき、

屋敷内の一角から、場ちがいなにぎやかな声が聞えてきた。騒々しい物音もつたわった。

政通はおもわず眉をひそめた。蹴鞠に何人もが興ずる声や音である。

輔熙が父のそばにやってきた。彼も蹴鞠の音をにがにがしくおもっているのだ。

「惟在がきておるのか」

政通が輔熙に聞いた。

「左様でおじゃりましょう。蹴鞠仲間をつれてまいったのです。さきほど、惟在の声を聞きました」

輔熙の言葉を聞いて、政通はいっそう眉をひそめ、

「この時機に、なんたる不謹慎……」

にがにがしげに言い捨てた。

惟在というのは、前大納言白河惟在で、政通の末子である。

「相変らずにござります」

輔熙もあきれたように言った。

「惟在にはこの時世、難局が見えておらぬのか。まことになげかわしい」

「廟堂でも、不肖の息子、蹴鞠大納言などと陰口をきかれているようでおじゃります」

輔熙も年のはなれた末弟をふだんから戸惑いの目で見ていた。

政通には男女四人の子がおり、上の三人は廟堂で立派な評価を得ていたが、末子の惟在だけは例外である。青春時代までは、詩歌、文学にくわえて公家にはめずらしく武道にま

で精進し、父母ともに息子の成人ぶりに満足していた。ところが、三十歳を前にしたころからとつぜん変化をきたした。

惟在は道をそれて、蹴鞠、投扇、音曲、舞い、囲碁、香道など公家のあそびに熱中しはじめたのだ。何がきっかけだったのかわからないが、今までの生真面目な青年公家がとつぜん、優雅、遊惰なあそびにうつつをぬかしだし、周囲をびっくりさせた。従来の惟在の暮しぶりからは想像もできない変身だった。

蹴鞠、投扇、香道などは、いずれも公家の世界のあそびというべきもので、一面からすれば公家の教養といってもよい。ところが、惟在の場合は度をすごしており、公家としておこなう義務や仕事をなげ捨ててまで、それに夢中になった。そのために大納言まですすんだ官職をも、自分から辞してしまった。

官職はうしなったが、そのかわりに、

〈蹴鞠大納言〉

という渾名だけがのこったのである。

これが鷹司政通の悩みのたねであった。

大納言を辞してから、惟在は父の屋敷をでて、白川の里にある鷹司家の別邸に住んでいる。それでときたま堺町御門内の屋敷に、父の見舞いと称しておとずれてくるのだが、そのときは大抵、蹴鞠仲間をつれてきて、鷹司家の庭にある〈かかり〉で盛大に蹴鞠をたのしむのである。

「こんな時世に、蹴鞠などにうつつをぬかしおって……」

政通の怒りはやまない。

「麿は何度となく弟に注意をいたしましたが、とんときき めがおじゃりませぬ」

輔熙は生まれついての公家優等生であり、政通の後を立派についでいる。今では末弟の行く末をいたく心配していた。

「人聞き、世間体もようない。輔熙の官位昇進にも水をさすものじゃ」

「左様におじゃります」

「輔熙、今日がよい機会じゃ。惟在に意見してやってくれ」

政通自身はもう何度となく意見して、すでにあきらめていたのである。

「承知いたしました」

こたえて、輔熙は奥座敷から庭へでて行った。

輔熙は庭の一画にしつらえた〈かかり〉のほうへ近づいて行った。

柳、桜、松、楓の四本の樹木が四間の間隔で植えてある。これを〈かかり〉と言う。このなかで烏帽子、水干、葛袴のいでたちの若き公家八人が蹴鞠に興じている。

その中にひときわ背丈がたかく、立派な体軀の公家が見えた。この男を中心にして蹴鞠がおこなわれている。

そのとき、一人の公家が蹴りそこなった鞠が輔熙のほうにころがってきた。
鞠はやや眉形をして、中央がくぼんでおり、うすい皮でつくられている。
みなが輔熙のほうをむいた。
輔熙は鞠を足でうけ、三度あげて、〈かかり〉の中へ打ちかえした。
わっと歓声があがった。
輔熙も若いころ、蹴鞠はよくやった。惟在ほどではないにしても、下手ではないのだ。
「兄上、何用でおじゃります」
惟在がにこにこと笑顔で近づいてきて、声をかけた。
惟在は優雅ないでたちで、容貌もあまく、いかにも公家らしい風雅な雰囲気をただよわせている。
「惟在こそ何用じゃ。わざわざ蹴鞠をいたしにまいったか。時節をかんがえるがよい。人聞きもようない」
輔熙はとがめるように言った。
「ちと、にぎやか過ぎましたか。父上のご機嫌はようありませぬか」
惟在はやや困った顔を見せて言った。が、彼は本心から困っているのではない。それだったら、父の居るときに屋敷に大勢仲間をつれてやってきて、蹴鞠に興じることもないのである。

「にぎやかというよりも騒々しい。機嫌がようないのは、父上ばかりではない」
輔熙は少々きびしく言った。
「それは申しわけおじゃりませぬ。みなつい興に乗りすぎてしまいました」
惟在は素直に詫びた。
輔熙は日ごろ、こまった弟だとおもっているが、年のはなれた末子であり、こころ憎く感じてはいない。惟在は性格も素直で、家族おもいなのである。おおらかで、周囲をつつみこむような寛いこころを持っていることは輔熙もよく知っている。
「朝廷は今きびしい立場にたたされておる。帝も困じはてておじゃる。蹴鞠に興じておる場合ではなかろう」
今度は輔熙はさとすように言った。
「都は異常な雰囲気につつまれておじゃるようです。父上と兄上のことが心配でまいりました」
心配できたと言いながら、蹴鞠仲間をつれてきて父の顰蹙を買ったりするところが、いかにも惟在らしい。
「父上も麿も、場合によってはあぶないかもしれぬ。大老井伊は狂気のようにつっぱしっておる」
「困ったことにおじゃります。切りひらく道はござりますか」

「それがなかなかないのだ。こんなことをしているうちに朝廷の足元にも火がつくであろう」

兄弟は庭で立ち話をはじめた。はなれて暮していると、弟のことが気がかりで、たまに顔を合わせると情もわく。父に言われて弟をたしなめにきたのをわすれそうになった。

「父上はもう老齢におじゃります。兄上さま、父上のことをよろしくおねがいいたします」

惟在のそんな言葉を聞くと、つい輔熙はきびしさをうしないがちになるのであった。

「蓮子どのは元気でおじゃるか」

輔熙は惟在の妻の様子についてたずねた。

蓮子は飛鳥井家の一人娘で、幼いころからその美貌は廟堂においても鳴りひびいていた。その上の才媛である。どんな公子が蓮子の胸を射とめて結婚するかにぎやかな話題をまいていた。それが四年前、惟在が蓮子のこころをうばって、あっさりと結婚した。

しかし結婚してからも、蓮子の噂は公家たちのなかで絶えなかった。つねにもてはやされていた。

「元気なようでござります」

惟在の返事はやや他人行儀である。

飛鳥井家では、いずれは惟在を養子にむかえて家を継いでもらいたい様子であるが、近年惟在が官職を辞し、諸芸に熱中していることが気にいらないようであった。

「すこしは蓮子どのの立場もかんがえてやらねば」

「わかっております」

兄弟の話はつづいた。

むこうで蹴鞠がつづいている。

世間の険悪な空気は、ここでは無縁な様子である。なごやかで陽気な雰囲気につつまれている。

麝香猫（じゃこうねこ）

京都盆地の南側の出入口は、五条橋口と東寺口（とうじぐち）である。

五条橋口は、伏見（ふしみ）街道の起点で、〈伏見口〉とも〈竹田口〉とも呼ばれる。

一方、東寺口は河内（かわち）路、鳥羽（とば）街道の起点であり、かつて羅城門（らじょうもん）のあったところの東に建立された東寺のすこし西に寄ったところである。

京都はこの二つの口によって南にひらけている。伏見、鳥羽にいたる街道の口であり、淀川（よどがわ）につながる。西国との交通路であるから、二つの街道はいつも旅の者でにぎわっている。

両口にも、出入りを見張る番所と柵（さく）がもうけられ、それぞれ約三十人の番士がつめている。京都に入る者よりも、でていく者がきびしく見張られているのは当然である。

五条橋口の番所の指揮者は所司代の役人大森左馬助と、町奉行与力渡辺金三郎である。

このところ京都からひそかに脱出をはかる志士や学者などがおおく、その者をつかまえた番士には報奨金があたえられることになっている。そのため番士たちは目をこらして見張っている。番士たちの尋問はきびしく、彼等の目をかすめることはほとんど不可能である。

大抵、日に一人や二人の志士やその連れが番士たちに見つかり、番所から六角獄へ引っ立てられて行った。見つかって、その場で自殺をはかる者もいた。

京都に七口ができたのは、太閤秀吉が天下を制覇し、天正十九年（一五九一）に洛中（らくちゅう）の周囲に御土居（おどい）をきずき、皇都のかまえとしてからである。当時は七口に堀をほったり、竹を植えたと言われている。悪徒が七口に出没したときは、早鐘をついて周囲に知らせたものだった。

洛中、洛外の呼称はこの御土居の内と外を区別したものである。今では洛中、洛外の呼称はあるが、御土居はほとんどなくなっている。七口以外の道は間道と呼ばれた。

五条通りは、平安遷都のときにつけられた六条坊門小路のことである。天正年中に五条坊門につけられていた橋を、この六条坊門につけかえたところから、これを五条大橋といい、五条通りと呼びならわされた。牛若丸と弁慶がたたかったところである。

五条大橋に立って、南の河原が、古来、戦場や処刑場になった六条河原である。この河原で藤原信頼（のぶより）や天台座主（てんだいざす）明雲大僧正が首を打ちおとされ、関ヶ原の合戦でやぶれた石田三成、小西行長もここで処刑された。

この大橋口をそのまま南下して行けば伏見である。この街道はほとんど町つづきである。大森左馬助は今まで幾人もの志士や学者を五条橋口の番所でとらえ、手柄をあげていた。

七口のうちでは、志士をとらえた人数は五条橋口がいちばんおおく、大森はもっと大物を自分の手でとらえたいと、手ぐすねひいていた。

渡辺金三郎も同様である。

両者は一人でもおおくとらえたいときそっていた。二人の競争でここの番所の見張り、検問はいちばんきびしいものになっている。

大森と渡辺は、時間で交代していた。

今は大森の勤番する時間である。

大森は番所にひかえず、柵の出入口にでて、見張りの陣頭指揮をしていた。

柵の出入りをする者はひっきりなしである。京都を通過する旅人、京都で商いをする行商人、洛中と洛外を出入りする地元の者……、いろいろな者たちが柵をとおる。商売の荷をつんだ車や、馬や牛がひく車もとおる。夫婦者もいれば、子づれもいる。

柵を出入りする者たちは世相をよくあらわしており、京都を舞台にした幕府方と尊攘派との葛藤も知っている。大獄の嵐のすごさについても、彼等はよく見聞きしている。

時刻は午後、申の刻をまわったころだ。柵の出入りは、明け六つから暮れ六つときまっている。

今しも、大根、人参、芋、茄子、南瓜などをつんだ車が大橋をわたって、柵に近づいてきた。

車をひいているのは中年の夫婦である。夫が車の前にたち、女房が車の後ろを押している。

柵の出口にかかったとき、

「その車は、青物の商いか」

番士の一人が車をひく夫のほうに大きな声をかけた。

「へえ、左様どす。伏見へまいるところどす」

夫はやや卑屈な表情を見せてこたえた。

庶民にとっては、役人は、いつでもこわい存在なのである。

「夫婦者だな」

番士はそう言いながら、車の荷を少々しらべた。

「夫婦どす。伏見の市場へまいります」

けっしてあやしい者ではないと言うように男はこたえた。

「いつかえってくる？」

「今夕、商いをして、明日の朝もどってくるつもりどす」

「毎日、伏見の市場へでるのか」

「鳥羽や淀の市場へもでますから、毎日ではありまへん」

問答がいくつかかわされた。

その番士は夫婦者に不審をいだかなかったようだ。

「行け」

番士は柵をでる許可をあたえた。

「お役目、ご苦労さまにござります」

夫婦者は車をひいて、柵をでていった。

そのすぐ後には、三人づれの行商人がつづいている。三人はそれぞれ、おおきな風呂敷包みを背にかついでいる。

番士たちはすぐに、その行商人の尋問にかかった。

「どちらへ行く」

「伏見でござります」

「風呂敷の中を見せてもらおう」

「へえ」

おなじような問答になって、行商人たちは三人とも包みをおろし、中をあらためられた。

番士たちは職務上の勘で、あやしい者とそうでない者との区別は大体つくのである。しかし職務によって一応、荷物をあらためたり、行き先をたずねたりする。

つぎつぎに柵をでて行く者がある。

反対側には、洛中に入ってくる者たちの行列ができている。それらの者にたいしても、

尋問はおこなわれる。

見張りや尋問には、油断や隙はゆるされない。あざむいて通り過ぎようとする者は、あらかじめ周到な用意や段取りをしてくる。ちょっとした油断で柵をくぐりぬけられてしまう。

だから、柵や番所にはいつも緊迫した空気がただよっている。いつ捕り物さわぎがおこるかもしれないのだ。

しばらくたったころ、五条通りから、時ならぬ一団の馬蹄のひびきが聞えてきた。

番士たちが見ると、土埃を舞いあげて、数頭の騎馬が駆けつけてきた。

騎馬一行は柵のところでとまった。

先頭の武士がひらりと馬の背から飛びおりた。

日に焼けた精悍な顔をした武士である。身のこなしもかるく、敏捷である。

「今日から粟田口の番所をあずかることになった石原四郎兵衛という者である。今しばらく前、野菜の荷をつんだ夫婦者の車がこなかったか」

石原と名乗った武士が番士に聞いた。

その武士は威厳もあり、堂々としているが、いくらかあわてた様子であった。

「野菜をつんだ車をひいた夫婦者なら、ここをとおりましたよ。伏見の市場へ行くと言っていました」

番士はやや不安そうな面持ちでこたえた。
「しまった！」
石原はいかにも悔しそうに声をあげた。
「あの夫婦者がいかがいたしました。何者ですか」
番士がたずねた。尊攘の志士が青物商人に変装して京都をぬけだしたのかと案じたのだ。だとしたら、番所をあずかる者としての大失態である。
「麝香猫だ。あの車の中には水戸藩の志士笠間新九郎がかくれていた。麝香猫が笠間を京都の外へつれだしたのだ。どの方角へ行った？」
石原は叱咤するように言った。
「えっ、あの夫婦者が麝香猫！」
番士はそう言って驚愕した。
麝香猫といえば、今京都中をさわがせている一味の頭領である。七口を封鎖されて、京都に閉じこめられた志士や学者を、神出鬼没の行動ですくいだし、京都を脱出させている大胆不敵な話題の人物である。
一味の人数は数人とも、十人以上とも言われている。京都の地理や事情にくわしく、幕府方の警備や追跡を翻弄し、あっと驚くような手段をもちいて、京都の封鎖網を突破してしまう。たぐい稀なる鬼謀、知略の痛快な集団である。

京都人士はこの麝香猫の活躍に拍手喝采をおくっている。
だが、その麝香猫の正体を見た者はいない。仕事柄、麝香猫は素顔を見せることがなく、ほとんど変装している。麝香猫が活動するのは、大抵夜間がおおく、闇にまぎれて行動するので、なかなか人の目にふれることがないのだ。
しかし麝香猫が出没したとき、その場所にかすかな麝香の芳香がにおう。闇の中にただようその匂いはまことに優雅なものである。それで一味の頭領にその渾名がついた。
今日のような昼間の行動は稀であった。
「これほどきびしい番所をもうけ、大勢番士がつめていながら、一人も気がつかぬとは」
石原とその部下たちはあきれたように番士たちを見まわした。
番士たちは麝香猫が昼間行動するとはおもわなかったのだ。
「面目ない。われらの失態だ。これから追跡する。まだ、そう遠くまで行ってはいないだろう」
大森左馬助がでてきて言った。
「いや、追跡はわれわれがいたす。おまかせありたい」
石原は大森の申し出を一言のもとにことわった。五条口の番士たちの力量をまったく信じていないような口ぶりである。
番士たちは言葉を封じられた。

「では、番所の守りをたのむ」
言うなり、石原は馬の腹を蹴った。
石原を乗せた馬と部下たちの馬は、土埃をもうもうとあげて、柵を通過し、伏見街道を追跡していった。
「してやられた。あの夫婦者が麝香猫だったとは。しかも車の中に笠間新九郎がひそんでいたとは残念だ」
大森は悔んでも悔みきれぬおもいで地団駄ふんだ。
番所の指揮者としては、麝香猫をとりにがし、しかも笠間新九郎という高名な志士の脱出をゆるしたのは、大失態であった。
番士たちも唖然とし、落胆した。番所をまもる役目がはたせなかったことになる。
「無念だ、麝香猫めっ」
一同はしきりに悔しがった。
それから又しばらくたったころ、ふたたび土埃をあげて、五条通りから一団の騎馬が疾駆してきた。
(今度は何事か?)
と大森は騎馬の一団をむかえた。
その隊の中には、大森も顔を知っている所司代の役人がいた。

「何事でござる」
大森は隊長とおぼしき者にたずねた。
「粟田口の番所をあずかる山口三郎右衛門である。今すこし前、騎馬一隊がここをとおらなかったか」
その隊長らしき者が粟田口の番所をあずかる者と聞いて、大森はとっさにいやな予感をいだいた。
「騎馬一隊ならばしばし前、麝香猫一味を追って、ここをとおった。もっと前にここをとおっていった青物の車をひいた夫婦者が麝香猫だと言って、追跡して行った」
大森がそう言うと、
「しまった! その騎馬一隊が麝香猫一味だ。いっぱい食わされたのだ。その一隊のなかに笠間新九郎もまじっている」
山口三郎右衛門は眦をあげ、唇をかんで言った。
「ううむっ、左様だったか。後からきたのが本当の麝香猫だったか。まんまとだまされた。今から追う」
大森や番士たちはふたたび地団駄をふむおもいにかられた。麝香猫一味におもうさま翻弄されたのが、何とも腹立たしかった。まことに麝香猫の策略はたくみであり、こちらの意表をつく大胆さであった。

「われらも一緒に追う」
大森はさい前の失態があるので、そう言った。
「好きになされよ」
山口はやや軽侮の眼差しをむけて言うと同時に、もう馬をはしらせていた。
部下の番士たちも同様である。
あっという間に柵を駆けぬけた。
大森もおくれてはならじと、数人の部下とともに番所から馬で追いかけた。
番所にのこった番士たちはただ唖然とするばかりである。
麝香猫一味に名をなさしめたのを悔んでも、後の祭りだった。
「麝香猫を追いつめ、とらえることができればよいが」
麝香猫一味に翻弄されて逃げられたとなると、番士たち一同もきびしく叱責され、庶人たちからも嘲笑われるので、どうなるかと案じた。
「麝香猫がここにもあらわれたか」
「憎っくき麝香猫やが、見事にやりおった」
番士たちのうちには麝香猫のあざやかな手口になかば感心する者もいた。
大森左馬助と部下の番士たちはなかなかもどってこなかった。
追跡して行ってから一刻（約二時間）くらいたってももどらなかった。

番士たちは大森らを心配しはじめた。
夕闇があたりをおおいはじめたころ、ようやく大森と番士たち、さらに山口三郎右衛門一行は落胆、憔悴してもどってきた。伏見まで追跡し、ほうぼう探索したが、麝香猫一味を見つけることはできなかったのだ。煙のように消えていた。
「麝香猫の正体は一体、何者なんや？」
番士たちは手のほどこしようがなく言った。
「正体はさっぱりわからんのやろ。所司代も町奉行所も必死でさぐっておるのやろうが」
「尊攘志士の一人やないやろな」
「志士たちは今、京を逃げるに夢中や。ほかの仲間をつぎつぎにたすけだす余裕はないはずや」
「これからも麝香猫は神出鬼没のはたらきをするやろう。番所の警戒はもっと大変になる」
番士たちは麝香猫についていろいろ疑問や推測を口にした。
けれども正体の手がかりになるものは誰も持っていなかった。まったく見当もつかないのだ。
麝香猫もその一味の者たちも、尻っ尾はまるで見せない。手がかりは全然のこさない。つかまりそうになったこともないのだ。いつも意表をついた、あっと驚く策略をもちいて、

厳重な封鎖網を悠々と突破してしまうのである。

しかも南の五条橋口はずいぶん警備警戒のきびしいところである。そこを何ともあざやかに脱出されてしまったので、番士たちは衝撃をかくせなかった。

「洛中洛外で麝香猫を喝采する者がふえてるようや」

「麝香猫は今や京の人気者や。今日の一件でまたひときわ人気があがるやろう」

番士たちは不安な一面を見せた。麝香猫の人気がでれば、その反対に憎まれ役になるのは自分たちである。

麝香猫は志士を脱出させると、いつしかまた京都にもどっていて、あらたに志士救出の作戦をたてるという具合である。

「当分は五条橋口は避けるやろう。ほかの六口をねらうんとちがうか」

「そうおもわせておいて、つづけて五条橋口にくるかもしれん。まったく予想しがたいのが麝香猫や」

「うごきが全然読めん」

「つかまえれば賞金ものやけど、なかなかむつかしい」

番所は麝香猫一味の話題でもちきりである。

洛中洛外の庶人も同様である。寄るとさわるとその話題だ。あたかも麝香猫を見たことがあるように言う者もいた。

麝香の匂い

この夜も、初更から二更にうつるころ、気味のわるいほど長い尾をひいた彗星が東北の空にあらわれた。

おそい時刻にもかかわらず、京都の人々は彗星を見上げて身震いをした。不吉の前兆どころか、彗星そのものが京都に混乱と恐怖をもたらしたかにおもえたのである。

コロリもおとろえるどころか、上方で本格的な勢いをふるいだした。これにかかったら最後、一両日で息たえるという、未曾有の魔病といってよかった。医者は手も足もでないのだ。

彗星があらわれる半刻ほど前、長野主膳は宿舎にしている俵屋を駕籠ででて、二条京極南にある妙満寺へむかった。

駕籠には護衛が二人ついている。

妙満寺は顕本法華宗の総本山である。

井伊の意をうけて京都にやってきた老中間部詮勝はずっと妙満寺を宿舎にしている。

長野は間部をおとずれて、昨今の京都情勢や見通しについて相談をするつもりである。

ちなみに京都所司代酒井忠義も九条尚忠の諸大夫島田左近も妙満寺に呼ばれている。

大獄は井伊の決断によって断行されているが、京都の尊攘方の情勢を長野はやや誇大して井伊へつたえ、そそのかした感があった。したがってこの大獄は長野がひきおこしたとも言える。

長野は井伊の懐刀であり、国学の師でもある。井伊は長野の助言に影響されやすい。長野は〈陰の大老〉と呼ばれ、今は〈京都大老〉とまで呼ばれている。それほど京都における長野の権勢はすさまじい。

長野は京都における尊攘勢力を一掃するつもりである。尊攘派と開国派がはげしく対立している情勢を本道にもどすには、荒療治も必要だとおもっていた。志士たちが尊攘派公家をうごかし、それが天皇をうごかすところに幕政の危機はあると信じている。だから大獄をもあえてやらねばならないと覚悟しているのだ。

大獄は当初において順調にすすんでいた。長野のおもいどおりにはこんでいた。大物志士たちがつぎつぎに捕縛された。長野はみなが想像している以上に徹底的に大獄をおこない、京都情勢を一変させるつもりであった。それでなければ意味はないという信念である。ところが、これに狂いが生じた。長野も予期していなかった狂いがおこった。

長野が妙満寺に到着すると、酒井忠義も島田左近もすでにきていた。

長野は間部の宿坊にとおされた。妙満寺は敷地の大きな寺である。

「京都を妙な魔物が横行しはじめたようじゃ」

間部が長野をむかえるなり言った。

間部は長野や酒井よりもひとまわり以上年齢が高い。その上、幕閣の老中である。

長野がいかに権勢がさかんだとはいえ、それはあくまでも井伊の側近、謀臣としてである。公的に言えば間部の地位にはおよばない。

長野はだまってうなずいた。

「つぎつぎに志士が京を脱出していると聞いたが」

間部はにがにがしく言った。

「左様にございます。面目次第もございませぬ」

所司代酒井がこたえた。これについては当面、酒井と町奉行の責任である。

「麝香猫とか呼ばれておるそうではないか。まるで京の英雄のようじゃ。由々しきことだ」

「とても英雄などと呼べるようなものではございません。尊攘派ばかりがそのように言っているのでございます」

酒井はむきになってこたえたが、説得力はあまりなかった。麝香猫の評判はつとに間部の耳にも入っているのだ。

「そう申しても、京はみな昔から尊皇ときまっておる。皇室の膝元じゃ」

間部の言葉は手きびしい。

「それはそうでござります。今、必死に探索、追及をおこなっております」

「手がかりはつかめておるのか」

「相手はなかなかの難物でござります。残念ながらいまだに手がかりはありません。探索、追及もむなしく逃げられ、面目をうしなっております」

酒井は正直にこたえるしかなかった。

「いつまでも賊に活躍の場をあたえておっては、幕府、所司代の権威にもかかわる。高名な志士が京を脱出するたびに、幕府の名折れとなろう」

間部はいらだちをおぼえているようだ。

「まったくそのとおりにござります。かならずや賊をひっとらえるつもりにござります。今しばらく時間をいただきとうございます」

酒井はもっとも弱いところをつかれて、額に汗をにじませながらの返答である。

長野は沈黙したまま二人のやりとりに聞き入っていた。

麝香猫の跳梁(ちょうりょう)は長野の責任でもある。京都における長野の立場は酒井をこえている。事実上、長野が所司代を指揮しているとも言えるのだ。

したがって間部の辛辣(しんらつ)な言葉は長野にもむけられていると見るべきである。

長野も麝香猫にはまったく手を焼いている。切歯扼腕(せっしやくわん)のおもいは酒井以上なのである。

長野なりに麝香猫の探索と召し捕りをかんがえているのだが、今のところまったく効果をあげていないのだ。幕府方は翻弄(ほんろう)されているばかりである。

麝香猫の首に百両の懸賞金をかけているが、情報すらももたらされていない。長野はみずから市中をまわることもある。何か手がかりがつかめないかという思案によってだ。

「残念ながらこちらはキリキリ舞いをさせられております。知恵も武略も兼ねそなえた勇気のある賊です」

長野の言葉は敵をほめそやすようなものとなった。長野は麝香猫を追っていて、本当にそんな気持になったのである。

「しかし早いうちになんとかいたさねば、大獄そのものが失敗におわってしまう恐れがござる。もっとも心配いたすところはそこだとおもう」

間部は今度は長野へむかって言った。

大獄の会談はまず麝香猫のことからはじまった。

「島田、よい策はないか」

長野は島田左近へ言葉をむけた。

島田も志士召し捕りに大きな活躍をしてきた。さらに朝廷における尊攘公家の情報については、島田からだいぶもたらされていた。九条家の諸大夫だけに情報を得る道筋は持っているのだ。

「麝香猫にはいつも幕府方が裏をかかれております。こちらが裏の裏をねらうと、相手はさらにその裏をかくといった具合です。この相手には奇手はつうじますまい。地道に探索をつづけるしかないでしょう」

島田は正統論をのべた。つまりそれほど幕府側の対策は手づまりなのである。

「うむ、地道な探索こそが、将来の一網打尽につながる」

酒井は一応うなずいた。が、本当は酒井は島田から奇手でもよいから、はっとするような対策が聞きたかったのだ。

「囮をつくって、およがせてみる策はいかがでしょう」

島田は酒井の心中を察して、そう言った。

「それでもかまわぬ。効果のありそうな策はすべてためしてみよ」

酒井はこたえた。

高名な志士をとらえず、およがせておいて、麝香猫との接触を待つという方法は、かねて長野もかんがえていた。囮にすべき志士を誰にすべきかで、まだ結論がでていなかったのだ。

「小林民部は何か吐きそうな気がいたしたが」

長野が酒井にたずねた。

小林民部権大輔良典は鷹司家の諸大夫である。彼は尊攘公家の家来たちのうちではもっとも有能、有力な人物と見られ、かねてから幕府方にねらわれていた。

不運にも鵜飼吉左衛門が召し捕られたときに、尊攘方の機密ともいうべき密書をおさえられた。そのなかに井伊大老の本城彦根襲撃の計画を明かしたものがあり、それを教唆した者として小林が浮かびあがり、捕縛されたのであった。

大獄の手がついに公家方にのびた犠牲者の第一号であり、宮、堂上では小林の捕縛におおきな衝撃をうけた。

「小林はなかなかしぶといやつで、尊攘方公家のことについて容易に吐きません。けれども責めかた次第によっては、今後吐くかもしれません」

酒井はこたえた。

彦根城襲撃という大胆不敵な計画を立案しながらも、小林は六角獄でのきびしい取りしらべにたいして言を左右にして、なかなか口を割らないのだ。公家にはめずらしい硬骨漢である。

「ことが容易にすすまないようであれば、公家方にびしびし捕縛の手をのばすことがかんがえられる」

それはかねての長野の持論である。中途半端な弾圧ではかえって尊攘方の反撥と怒りをまねく恐れがある。弾圧、大獄をやるならば世の中を震撼させるほど徹底的に根こそぎやるというのが、長野のかんがえなのである。

すでに長野の胸中には志士たちの今後の捕縛者の一覧表がえがかれている。その中の大物は橋本左内、吉田松陰、西郷吉之助、有馬新七、有村俊斎、月照和尚、頼三樹三郎、池内大学、宇喜多松庵、六物空満、藤原恭助、久坂元瑞、世古格太郎、西川善六、藤本津之助。さらに公家の過激派大物の家来たちといえば、山田勘解由、伊丹蔵人、豊島伊勢守、飯田左馬、兼田伊織、三国大学、高橋兵部権大輔、牧式部権少輔、近衛家の老女村岡、森寺若狭守、柳田加賀介、柳田木工少允、森寺因幡守、丹羽豊前守、富田織部、入江雅楽頭、若松木工権頭、春日潜庵、藤井但馬守、山本縫殿……、といったところである。

しかも京都に呼応して、江戸においても尊攘派の捕縛はすすんでいた。飯泉喜内は江戸において幕府を批判し、幕府の内情を京都の尊攘派へ伝達したとされて、召し捕られた。鵜飼幸吉とともに密勅を持って江戸へくだった薩摩藩士日下部伊三次は息子とともに江戸で捕縛され、小伝馬町の牢におしこめられた。京都在住の志士たちと交わりをむすんでいた儒学者藤森大雅もとらえられて、入獄した。

江戸における志士弾圧は、井伊大老がみずから指揮をとって命令をくだした。京都と江戸両方で弾圧の嵐は吹きすさんでいたのである。

井伊も長野も、あくまでも強硬な手段によって難局の正面突破をかんがえていた。この両者の当面の政治的目標は、紀州慶福の将軍位継承と、条約の無断調印の弁明、九条尚忠の関白辞任の却下である。この三つを実現するためにも、尊攘志士と朝廷を圧迫するのは

効果のある手段とかんがえられた。

これらの目的を実現させるために間部は京都にやってきたのだ。

十三代将軍家定はすでに薨じ、先月、幕府は所司代をつうじ慶福の将軍宣下を奏請していたが、まだ朝廷から認可はくだっていなかった。

さらに九条尚忠は尊攘公家たちに圧迫され、関白辞任を申してでていたが、幕府は大獄を背景にして、辞任をやめさせようとしていた。

「小林民部の捕縛で朝廷の尊攘派はたちすくんでおる。勢いさかんだった鷹司父子、近衛、三条、一条らの公家たちがすっかりしずかになった。これは大獄のおおいなる成果でござろう」

長野はそれがあたかも自分の功績かのように言った。長野は井伊大老の強大な権力を背景に京都に乗りこんできていらい、権力に馴れすぎていた。

「弾圧をつよめればつよめるほど、われわれの仕事はしやすくなる。将軍宣下も近々のうちにおこなわれるようになるであろう」

間部はそういう見通しをたてていた。

「問題は麝香猫にござります。麝香猫の跳梁が尊攘方をおおいに勇気づけております。せっかく鳴りをひそめた尊攘方がこれで息を吹きかえす心配がござります。こやつの召し捕りが目下の一大事です」

酒井は自分の立場から、京都の情勢をそう判断していた。

「うむ、いかにも麝香猫の召し捕りがもっとも肝要じゃ。できるだけはやく、それを何とかいたせ。長びけばながびくほど、京の情勢がむつかしくなる」

間部の言葉も結局、ここにもどってきた。

長野の心中もおなじである。

「コロリ、彗星、麝香猫。この三つが要注意じゃ」

長野は自分の心中をそういう言葉にした。

いずれもむつかしい問題である。この中で自分の手で解決できそうな問題が、麝香猫なのだ。

一刻ちかくの会談をおえて、長野は妙満寺をでた。

夜空をあおぐと、位置はやや西北にずれたものの、まだ彗星が不気味な光をはなっている。

時刻は三更にいたろうとしている。

夜更けの闇としずけさが洛中洛外をおおっている。京都には、もう寒気がしのび寄ってきている。

駕籠は二条通りをしずかにすすんだ。

護衛は二人ついている。が、長野の立場をかんがえれば手薄な護衛と言えなくもない。

長野はあくまでも鼻っ柱がつよく、強気である。自分に直接敵対しようとする相手など京都にいるはずがないというかんがえである。

道はどこまでも真っすぐ闇の中につづいている。

先棒のかざす提灯の明りが路上を照らしている。

その明りの先を、一瞬、黒い影がかすめた。

先棒は野良犬ではないかとおもったようだ。昨今、京洛には野良犬がふえている。深夜、通行人に吠えかかる犬もいた。

しかしかまわず駕籠はすすんだ。

そのとき、もう一度すっと黒い影が前方に浮かんだ。

犬ではない。

「駕籠の前を邪魔すな」

先棒が一喝した。その影は人間であった。

しかし黒い影は道をあけなかった。それどころか、二つ、三つにふえた。

三人とも黒い頭巾でふかく顔をおおっている。

左手は寺院の長い壁であり、右手は竹藪である。京都には竹藪がいたるところにある。

三人は竹藪にひそんでいたようだ。

「どかんか」

先棒がもう一度叱声をとばした。背後に腕ききの護衛者がついているので、気が大きくなっているのだ。

「駕籠の主に用事がある」

正面の黒い影が圧するように言いはなった。

「駕籠の主をどなた様とおもっとるんや」

先棒が言いかえした。

「わかっとるから、待ってたのや。駕籠からでよ」

黒い影が命じた。

「お前らに命令をうけるようなお人ではないぞ」

先棒はあくまでも強気に言った。

「長野主膳であろう。大獄の張本人や。長野の命をねらっておる者はすくなくないぞ」

黒い影は不敵な声で威嚇した。

そのとき、先棒をおしのけるようにして、護衛の二人が前にでた。

「長野様とわかって無礼をいたす気か。不埒者めっ」

恰幅のいい護衛の一人が叱咤した。

「長野主膳は大老井伊にとり入り、その権勢をカサにきて京で暴慢無類のはたらきをいたしておる。京都千年の歴史ではじめてじゃ。尊攘の志士ばかりでなく、朝廷にまで捕縛の手をのばそうとしておる稀代の悪党じゃ。ゆるしておくことはできぬ」

黒い影は駕籠のなかの長野にむかって声をはなった。

このとき、駕籠の垂れを持ちあげて、長野がゆっくり外に姿をあらわした。

長野はもともと国学の学者であるが、度胸も気迫も見識もあり、腕にも一応おぼえがある。天下を御するだけの自信はそんなところからもきている。駕籠の脇にすっくと立った長野の姿には気迫があふれており、闘志にもみちている。自分の前に立ちはだかる賊にたいして、恐怖は微塵も見せなかった。

それればかりか、長野は一歩前へふみだそうとした。その眸と風貌にはなみなみならぬ自信があらわれている。自分にたいしてくわえられた侮辱は断じてゆるさぬ自尊心もうかがえた。

ところが、長野のうごきが急にとまって、ぎこちなくなった。ふみだそうとした足は元のところにもどった。

護衛の侍は不審をいだいた。

長野にはあきらかに異常がおこっていた。今までの不敵な表情にまじって、戸惑いと驚きの色があきらかに浮かんでいた。長野には似つかわしくない態度である。長野が今までこのような態度をとったことはなかった。

長野は足をうごかそうとしたが、硬くなってうごかなかった。

あきらかに異常な事態だ。
「何者じゃ」
長野がやや硬ばった声で誰何した。
周囲は闇である。
長野の背後の闇の中にもう一人、曲者がいたのである。
「長野主膳、身のほどを知るがよいぞ。あまりに勝手なことをいたしておると、自分が命をおとすことになるぞ」
闇の中からひくい、力のある声がひびいた。威厳のある声である。
「京で不埒なことをいたせば、その者が命をおとす。京はわが指揮のもとにある」
長野は生来の強気をふるいおこして闇の中の男へ言った。
しかし長野の立場はいちじるしく不利になった。すくなくとも、前に三人、後ろに一人、曲者がいる。
「長野主膳、うごけば死ぬるぞ。大獄は中道にしておわる」
背後の声には、いくらか揶揄のひびきさえあった。
「ころさぬのか」
長野は精いっぱい言った。いつしか、長野の背中には太刀の切っ先がつけられていた。
太刀を抜いているのは、やはり黒い頭巾で顔をおおった長身の男である。

そのとき、夜風が闇の中からふんわりとかんばしい匂いを長野の鼻孔にはこんできた。
「麝香猫だな」
長野はその匂いを麝香だと判断した。
麝香というのは麝香鹿や麝香猫が体内から分泌する液をかわかして、そこから採るもっとも上質な香料である。
麝香猫は神秘の霊猫といわれ、夜間によく活動する。敏捷で勇敢、敵をおそれぬ猫である。
「そう呼ばれておる。われわれは尊皇のためにいささかのはたらきをいたしておる。長野主膳は尊皇の敵だ」
「人にはそれぞれのかんがえと立場がある」
「それはこちらの言うことだ。今回は、命をあずけておこう。これ以上、大獄をつづけるならば、今度は長野主膳と所司代酒井の首を獲る」
背後の男は腹にずんとひびく声でそう言った。
さすがに長野は返事をためらった。麝香猫の要求をこばめば、瞬後に太刀の切っ先が自分の背中から胸をつらぬくことがあきらかだったからだ。
「麝香猫、それにしても大胆で、滅法勇気があるな。二条通りからは所司代も、町奉行所も近い」

長野はそうこたえた。所司代も町奉行所も毎夜、夜廻りをつづけている。大声をあげれば、あるいは夜廻りの耳にとどくかもしれぬ。

けれども長野が背中に太刀をつきつけられているので、二人の護衛は下手にうごくことも、声をだすこともできないのだ。

「おれからの命令だ。無謀な大獄はすぐに止めよ」

麝香猫は気迫のこもった声で言った。きびしい強迫である。

「その言葉、たしかに聞いておこう。大獄はわしだけの意でおこなっておるのではない」

「聞いておくだけでは駄目だ。麝香猫はどんなところにも出没する。長野主膳の部屋にしのびこむかもしれぬ。言うことをきかなければ、本当に命はないぞ」

そう言って麝香猫は太刀の切っ先で長野の背中をつついた。

「所司代、町奉行所も麝香猫をねらっておるぞ。かまえて油断はいたさぬことだ」

長野も精いっぱいそう言った。

「所司代や町奉行所でつかまえることができるかな」

麝香猫はたのしげに声をあげた。

「いつかはつかまえることができるだろう」

「たのしみにその時を待っていよう」

その声を最後にして、麝香猫の声がたえた。

いつしか、前方の黒い影も闇の中に消えていた。

けれども、しばしのあいだ長野はうごくことができなかった。麝香の匂いが闇の中にのこっていて、まだ背後に賊がいるような気がしてならなかったからだ。

「殿、賊は逃げ去りました」

ややあってから、護衛が声をかけてきた。

「どうして追わぬ」

長野は叱咤した。

「すぐに闇の中に消えてしまいました」

護衛はうろたえたようにこたえた。

駕籠かきは二人とも腰をぬかしていた。しばらくは立つこともできなかった。

尊皇和尚

夕闇が東山の峰々からせまってきた。

日は西山の端におちたばかりである。

京都は盆地であるから、日暮れが平野よりもいくらかはやい。

清水山の断崖上に寝殿造風の本堂がたち、数十尺の長材を縦横にくみ合わせた束柱で、舞台がささえられている。有名な清水の〈舞台〉である。

その舞台の足下をとおって、雄偉な体軀の武士と、中背だが体中に闘志のあふれた武士が成就院へむかって行った。

元来、清水寺は、成就院、真乗院、智文院、光乗院など九つの子院が輪番で運営していたが、室町のころから本坊の権威は成就院にうつっていた。したがって成就院の住職が本坊の住職を兼ねていた。

現在の住職は尊皇の僧侶として名高い月照である。

月照は若くして成就院の住職となったが、尊皇の志があつく、和歌をつうじて近衛忠熙としたしくなり、西郷吉之助、有馬新七、鵜飼吉左衛門ら諸藩の志士たちと交際し、尊攘

運動に没頭していた。先年、近衛忠熙とともに高野山において外夷退散の祈願をおこない、世間の耳目をあつめた。水戸藩への密勅降下についても、鵜飼吉左衛門や西郷吉之助、頼三樹三郎、梅田雲浜らと公家への入説につとめ、幕府ににらまれている。

大獄の標的のうちに、当然、月照も入っていた。清水寺は鎮護国家の道場であり、勅願所である。そこの住職の尊攘運動については、幕府は以前からにがにがしくおもっていたのである。

月照自身も大獄の手がのびてきそうなことはうすうす察しており、寺務を弟の信海にまかせ、自分はいつでも寺をでられるようにしていた。それほどまでに月照の尊皇の信念はたかまっていたのだ。

この日、

夕闇にまぎれるようにして、西郷吉之助と有村俊斎、二人の薩摩藩士が成就院をおとずれてきた。

有村俊斎は有村三兄弟の長兄であり、前薩摩藩主島津斉彬の側近に出仕して薫陶をうけ、西郷を水戸藩の藤田東湖に紹介した。月照とは以前から関係がふかい。

西郷と有村は成就院の方丈にとおされた。

「和尚、清水寺は住みごこちのよかところでごわすが、もはや安閑としておられなくなりもした」

西郷は十四歳年上の月照にむかって言った。二人の交際は西郷が月照から尊皇の思想をまなぶことからはじまったのである。有村も同様である。したがって西郷も有村も、いわば月照の弟子のような間柄だ。

「京の空気は日に日に切迫いたしてきたようじゃ」

月照はそう言いながらも、ゆったりとした態度である。

そして月照は二人のために茶をたてはじめた。月照の部屋には囲炉裏が切ってあり、鉄瓶の湯が音をたてている。月照は茶道においても知られている。

「志士たちがつぎつぎにとらえられ、獄につながれてごわす。やがては和尚のところにも、拙者のところにも捕り手がまいるでごわそ」

西郷はおおきな膝をそろえ、正座して言った。

有村もその横にきちんと正座している。

「しかし、もはや京都七口はふさがれておる。間道にも目がそそがれておる。逃げるにも逃げられまい」

月照は悠々たる点前を見せながら言った。すすんで逃げる気はなさそうである。

「和尚、かと言って、とらえられるのをじっと待っておるわけにはいきもはん。こちらも手をうたんとなりもはん。和尚がとらえられては志士たちの士気にかかわりもそ」

西郷は月照の悠然たる態度が気になった。

「座してとらえられるのを待つより、逃げるほうがよいかもしれぬ」

月照もそういう気持はあるのだ。

「和尚、なんとしても京を脱出しなければなりもはん。おいと有村が手引きいたしもそ」

「七口のどこかを脱ける手立はあるか」

「簡単にはいきもはん。じゃどん、逃げ道が絶対なかとは言えん」

西郷はなんとかして、月照を京都の外へ抜けださせたい心境にある。くわえて自分たちも一時、京都を避難したい気持なのである。

「しかし、なかなかむつかしい。志士がどんどんつかまっておる」

月照は情勢のきびしさをよく理解している。脱出をくわだてて、つかまれば獄につながれるのは仕方がない。

「和尚、京ばぬけだして、薩摩へ行きもそ。鹿児島には和尚の安住の地がごわす。住みなれればよかところでごわす」

西郷は自分の意中をあかした。

「薩摩か……」

月照にすれば、そこはおもいもよらぬ遠い地だ。

「薩摩はよかところでごわす。先君いらい、尊皇のこころざしも厚き地にごわします。和尚の身柄ば、おいにあずけてくれまっしぇんか」

西郷は熱っぽく口説いた。月照をこのまま京都においておけば召し捕られることは必至である。西郷は月照をつれて薩摩へもどることが最善の道だとおもっていた。

薩摩藩主斉彬は名君の名をほしいままにしたが、今年七月、おもいがけず五十歳で病没してしまった。西郷はその斉彬がもっとも信頼した側近の臣であった。

斉彬は幕末の混迷した政情のなかで、徳川斉昭、松平慶永、伊達宗城、徳川慶勝ら識見のすぐれた諸大名と会合し、従来の幕政から有力諸大名の連合によって政治的危機をのりきろうという大構想をかんがえだしていた。しかも斉彬はその主導的立場にたって、大老井伊と対峙した。井伊の強圧政治にたいして斉彬は薩摩藩の全力をあげて、挙兵の準備にかかった。関ヶ原の合戦いらい、薩摩藩は幕府最大の仮想敵国と見られていたのであった。その斉彬は挙兵の準備をはじめて間もなく、病魔のためにたおれた。

しかし斉彬はたおれても、薩摩藩は斉彬の遺志をついでいると西郷はかんがえていた。だから月照の薩摩藩への亡命を計画したのである。

薩摩藩は今、水戸藩とならんでもっとも強力な尊攘の国である。月照は、薩摩藩ならば自分をむかえ入れてくれるかもしれないとおもった。

「薩摩藩はたのもしきところじゃ。行ってみたい気もするが、わしが行けば、薩摩藩におおきな迷惑がかかろう。幕府はかならずや強権をもって、身柄のひきわたしを薩摩藩に命ずるにちがいない」

月照は今の立場から将来を読んでいた。月照は世間知らずの僧侶とはひと味ちがう尊攘運動に身を投じた和尚だ。

「薩摩藩は先君斉彬様の衣鉢をついでござわす。和尚をまもるくらいの気骨はみなが持ってござわす」

西郷はさらにすすめた。

「されど厳重に出口を閉じられた京から、どう脱出する？　そのような手立があるか」

月照はしずかに言った。そして点前をおえた茶碗を西郷と有村の前へおいた。

「ないことはござわはん。おいと有村が身をもって和尚ば護衛いたし、薩摩へおつれいたしもす。身柄ばおいにあずけてくださいましぇんか」

西郷はおおきな眸に熱意と激情を秘めて言った。

「両氏の言葉は大層痛み入る。今後わしがかくれることのできるところといえば、水戸と薩摩両藩しかないかもしれぬ。しかも水戸藩は幕府の膝元にちかく、とてもわしをかくしおおせまい。だとすると落ちるところは薩摩しかない」

尊皇和尚として名をはせた月照も、大獄の嵐の前には身をおくべきところもなくなった。月照は思案にふけった。今の幕府は尊攘派を目の敵にしており、恐れおおくも朝廷内部にまで泥足でふみこんで尊攘派公家の大物に手をのばそうとしている。勅願所の住職とはいえ、月照にたいして幕府が捕縛をおもいとどまる理由はなに一つない。

「和尚、猶予はなか。幕府はいつでも清水寺にふみこんでこれる。明日かもしれぬし、明後日かもしれん。はやい決断が大切でごわす」

西郷が力づよく言うと、

「おいも、それがいちばんよか道とおもいもす。そうなさりませ」

有村もつよくすすめた。

「二人の好意には感謝するしかない。もう一両日だけ答えを待ってもらいたい。この寺にはわしのほかにもねらわれている僧がおる。それらのことも始末いたさねばならない」

月照はようやく京都脱出、薩摩への亡命にかんがえがかたむいたようだ。そうする以外に現在の危機から脱出する道はなかったのである。

「ことはきまりもした。和尚の命、おいが請け負いもした」

西郷はもはやきまったように言った。一日おくれればそれだけ、脱出は困難になる。

西郷も七口の突破にそれほどの自信があるわけではなかった。今まで、突破をこころみて成功した率はひくいのである。

西郷ははやくも七口突破の方法を模索しはじめた。

有村もその思案に入ったようである。茶を飲みながらかんがえている。

言葉では七口突破と言うが、それを実行するのは至難のわざなのである。幕府の京都封鎖はますますきびしくなっている。

しかし月照の決断がほぼかたまったことを、西郷と有村はよろこんだ。二人とも、はじめは、幕府方がこれほどまでに秋霜烈日たる大獄、弾圧にふみこんでくるとはおもっていなかったのだ。わかっておれば、七口が封鎖される以前に、月照をともなって京都を脱出していたはずだった。

「すでに清水寺には幕府方の見張りがついておるかもしれもはん。いったん薩摩屋敷に身をかくすほうが安全かともおもいもす」

有村は月照の身を案じて言った。

「薩摩屋敷のほうが、まだ安全でごわす。幕府方もまだ薩摩屋敷にふみこんでくることはなかとでしょう」

西郷もそうすすめた。ともかく月照の身柄は自分と有村とでまもってやるしかないとおもった。

「そのときは薩摩屋敷にかくまってもらうことにする。京都でいちばん安全なところは薩摩屋敷じゃ」

月照も身の危険は十分わかっていた。

尊皇のあつきこころが自分に危険をもたらした。月照にしてみれば、覚悟の上の運動だった。自分にどのような運命がおそいかかってこようとも悔いはないのである。

しかし西郷や有村にしてみれば、月照の危機をだまって見ているわけにはいかない。自

分たちも運動が実をむすぶまでは、簡単には死ねないのだ。そこが現実の運動家と宗教家とのちがいであろう。

「残念ながら、これから志士がつぎつぎに召し捕らわれていくものとおもいもす。朝廷へも公家捕縛の手はのびるものとおもわなければなりまっしぇん」

「大老も長野も、気がくるったとしかおもえん。弾圧をくわえればくわえるほど、後で反撥をまねく。いずれ幕府の大事におよぼうやもしれぬ」

「橋本左内があぶないという噂がひろがっておりもす。先月、江戸でつかまった飯泉喜内が、手紙や連絡文などを大量におさえられ、志士たちの行動が露見いたしたと言われておりもす」

西郷は江戸の情報を月照につたえた。江戸と京都は百三十里をへだてており、双方の情報がつたわるには、はやくても十日以上がたってしまうのである。

「左内もねらわれておるだろう」

月照は顔にくらい翳をおとして言った。

月照も左内とは交友がふかかった。とはいっても年齢は二十ばかりはなれている。月照からすれば、左内は自分の子供ほどの年齢である。それだけに左内の危機は人事ではなかった。

橋本左内は越前藩士であり、松平慶永の家臣である。幼時からの俊才で、大坂の緒方洪

庵の門に入って、〈池中の蛟竜〉と嘆ぜしめ、藩主慶永もことのほか左内に目をかけた。藩医から書院番になり、さらに若くして慶永の謀臣となり、国事に奔走しはじめたのである。

左内の政治思想は、幕府と諸藩のあいだの壁をくずし、〈日本国を一体〉とみなす雄藩連合を構想していた。その中心には朝廷をおくというのであるから、幕府にとってはゆるすべからざる暴徒である。将軍継嗣問題、条約締結問題では鷹司政通、中川宮、近衛忠熙、三条実万らにたいして積極的な工作をおこなった。さらに今年の七月、藩主慶永が斉昭、慶勝、慶篤らとともに不時登城を責められて、隠居、急度慎の処罰をこうむると、左内ははげしく幕府の態度を責めた。それが今にしておおきな災いとなったのである。

西郷はことのほか左内としたしい。斉彬と慶永が肝胆相照らす仲となったときから、西郷と左内も深交をもつようになった。西郷としては七歳年下の左内から、ずいぶんおしえられるところも多かったのだ。

西郷は江戸にいる左内の身を案じていた。

江戸も京都と並行して志士弾圧はきびしく、捕縛もすすんでいる。尊攘運動は京都と江戸を中心にしておこなわれていたので、両地で大獄ははじまった。

「京にも身の案じられる同志が大勢おりもす。できれば力になってやりたいとおもっちょりもす」

「しかし、最後は志士一人一人の運命次第じゃ。運のつよい者はどんなところでも生きのびていく。運のよわい者はどれほど力を貸したとて生きのびていくことはできまい」

月照は西郷へ言った。月照は自分自身にそう言っているのかもしれなかった。

「左様でございます。今のようなかくべつな時機には、運のつよさに左右されることがおおかことでございましょう」

「西郷どんは運がつよそうじゃ。わしは西郷どん有村どんにまもられておるから、まず大丈夫じゃろう」

月照ははじめて笑顔を見せた。

「身命を賭けて、和尚ば薩摩におつれいたしもす。ご心配はなかとです」

西郷も力づよく言った。

「わざわざよくきてくれた。礼に清水寺の粥を馳走しよう。体がよくあたたまる」

月照はそう言って、青坊主を呼んだ。

あつい粥を馳走になった後、西郷と有村は成就院を辞した。

二人は提灯を片手に、清水山のくらい道をくだって、御所の北にある薩摩屋敷へむかった。

あるきながら、西郷は七口突破の方法をかんがえていた。薩摩屋敷にいるからこそ、西郷も有村も今のところ幕吏の追及をうけていない。しかし七口を突破しようとすれば幕吏はだまってはいまい。失敗すれば、召し捕られて六角獄に押しこめられるのは目に見えていた。

七つの口のどこをえらぶか。西郷はそれをかんがえた。

三条口、五条橋口、東寺口、丹波口、長坂口、鞍馬口、大原口、いずこも脱出するとなると、一長一短である。どこが困難で、いずこが簡単かはきめられぬ。それぞれ厳重な封鎖がおこなわれている。

七口のどこかを運よく脱出したならば、後は陸路か海路によって薩摩へむかう。中国路をとって九州へむかう陸路は日数がかかる。かといって、大坂から船で海上をゆくには危険がともなう。

西郷は今後の危険な旅についておもった。

河原町通りを北へのぼっていくと、丸太町通りと交差するところで、所司代の提灯をかかげた数人の一団と行き合った。

「何者や、どこへ行く？」

一団の一人から誰何された。所司代の夜廻りである。

「薩摩藩士、菊池源吾にごわす。薩摩屋敷にもどるところでごわす」

西郷はふだんつかっている変名を名乗った。

「おいはおなじく海江田武次郎」

有村も変名を口にした。

両人ばかりでなく、尊攘運動にしたがう志士たちは日ごろから変名を用意していた。

「薩摩藩士か」

夜廻りたちは一瞬神経をとがらせ、両人に見入った。しかし薩摩藩士だからといって、番所へひっぱるわけにはいかない。

「よし」

夜廻りたちはそう言って、通行をゆるした。

「市中警戒も一層きびしくなりもした。こげん有様じゃ、往来の通行もままならんたい」

西郷は有村へ言った。

河原町今出川の近くまでくると、ふたたび夜廻りの一隊に出会った。今度は町奉行所の夜廻りであった。

御所歌会

深秋の小春日が、京都市中にしずかに降りそそいでいる。

数日前から、鴨川の河原に初鴨の姿を見るようになった。

すでに京都のまわりの山々は紅葉の真っさかりである。しかも北の山へ行くほど、唐紅を染めだしたようにあざやかな色になる。

今日はことのほか、ほかほかとした玉のような晴れた日である。三、四日、小春日和がつづいている。

都大路に車の音がする。

牛車のゆく音だ。

今朝は、網代車や半蔀車、糸毛車がさかんに御所をでて、嵯峨野、嵐山の方面へむかっていく。なかでも、いろいろな糸で屋根をうつくしくふいた糸毛車が目立っている。これは宮廷の女性がもっぱらもちいる牛車なのである。

御所から一時にこれほどおおくの牛車がでることはめずらしい。牛にひかれた車がゆっくりと都大路をすすむ光景は、いかにもみやびな雰囲気である。

今日は、宮中の紅葉狩りがおこなわれる。毎年この時季におこなわれる紅葉狩りと春の花見は、宮中の恒例である。

上は天皇、関白、左右大臣、内大臣、大納言などのやんごとなき人々から、中納言、参議、大弁、中弁、少納言あたりの中級公家までが会して盛大な紅葉狩りをもよおし、歌会をおこなう。

すでに孝明天皇の唐庇車も御所をでて、丸太町通りを西へすすんでいった。今日は関白九条尚忠も、政敵の鷹司政通、同輔熙、近衛忠熙、一条忠香、三条実万らも呉越同舟でおなじ紅葉のうつくしさをたのしむことになる。

今日一日は御所の車が往来するので、丸太町通りは庶人は通行を遠慮する。

その丸太町通りが西大路通りと交差する近くの物陰にひそんで大路を注目するいく人もの姿が、よく注意すると見られる。丸太町通りのあちこちにおり、その人数は約百人にもおよぶ。

彼等は長野主膳に指揮された所司代と町奉行所の役人である。よく言えば大路の警備であり、裏をかえせば公家百官の見張りである。

嵯峨野、嵐山といえば洛外であり、七口の外である。したがって尊攘派の公家たちの万一の動向に神経をとがらせて、見張っているのだ。大獄をおそれ、捕縛をまぬがれようとする公家がいるかもしれぬとかんがえて、長野は丸太町通りにそれとわからぬように役人

を繰りだしたのである。

長野は前関白であろうと左右大臣、内大臣であろうと容赦する気はないのだ。いったん大獄の幕を切っておとした以上、徹底的にやらねば意味はない。

しかも長野が京都において矢面にたってはじめた以上、失敗すれば、その責任は自分にかえってくる。それで長野はみずから陣頭指揮にたっている。

あやしい者、挙動不審の者はすべてひっくくる決意である。長野は大老の代理人として京都に乗りこんできたときから、戦いの渦中に身を投じていた。

長野は今年、四十四歳。男の人生のもっとも充実した時期にある。彦根城下の陋屋埋木舎で部屋住みとしてくらしていた直弼と機縁をむすんだことによって、長野の運命はひらけた。直弼は藩主井伊直中の十四男に生まれ、一生埋木舎で兄の厄介者としてくらすか、他家からの養子の口を待つ身だった。そんな直弼が兄直亮の養子となって、藩世子となったことからはからずも、現在の大老にまで躍進していった。直弼の出頭にともなって長野の身分、地位もここまであがってきたのだ。

もとより長野は直弼と一蓮托生の運命をたどるつもりである。

大獄はいくべきところまですすむ状況にある。もう後もどりはできない。中断もできぬ。

長野は空家の前庭にひそんで、丸太通りを見張っていた。

牛車のながれがとだえた。

紅葉狩りに嵐山へむかう牛車はおわったかに見えた。
しばらく同所にとどまっていて、長野はようやくひきあげようとおもった。
空家から大路にでたとき、むこうから優美な飾りをほどこした糸毛車がゆるゆると一台やってきた。
やんごとない宮中の女性をのせた車である。その糸毛車は今までとおった同種の車とくらべても一段と糸飾りが豪華でうつくしい。
長野は車の中の女に興味をいだいた。どれほどの女性が乗っているのか関心をおぼえた。
長野は京都にきてからというもの、最大の権限をにぎった。彼の意にかなわぬことはほとんどない。
牛車の中をあらためるくらい、何程のこともない。
長野は大路まででていって、糸毛車の前に立った。
車をひく雑人(ぞうにん)が何事かと立ちどまった。
「止まれ」
長野は高飛車に命じた。宮中の高貴な車にたいしてこのような振舞をする者はかつていなかった。長野は朝廷にたいして幕府権力を見せつけておきたいという気持もあったのである。
牛車が止まった。牛までがおどろいた様子である。

「中のお方はどなたでござる」
長野は雑人ではなく、牛車にしたがっている家来にたずねた。
家来は長野の見幕におされた。
「前大納言白河惟在(これあり)様の夫人蓮子(れんし)さまにござる」
と家来はこたえた。
長野も聞いたことのある名であった。蹴鞠(けまり)や諸芸にうつつをぬかして生きる白河惟在の名も知っているが、その夫人蓮子の美貌(びぼう)と才媛(さいえん)ぶりは京都中に聞えている。
長野もかねて一度は対顔してみたいとおもっていた女である。長野は蓮子が乗っている車と聞いて、どうしてもその姿を見てみたいとおもった。
「車の中をあらためる。戸をあけい」
長野は命じた。
「それはなりませぬ」
家来がすぐにこばんだ。宮中の貴人が幕府役人に車の中をあらためられるという前例はなかった。
「余は長野主膳である。戸をあけよ」
長野は再度命じた。高圧的な態度である。
長野と聞いて、家来はおどろいたが、それでも車の戸をあけようとしなかった。困惑し

きった様子で、躊躇しつづけた。
「長野様でもなりませぬ」
意を決したとみえ、家来はようやくこたえた。
「余の命令は幕府の命令である」
長野はそこまで言った。そこまで言えば、もうひくにもひけない。幕府を口にした以上、その体面にかかわるからだ。長野は車の中の容姿美麗な夫人を想像した。どうしても見たい。
そのとき、車の中で人のうごく気配がした。
「戸をひらきましょう」
車の中から玲瓏たる声がひびいた。
そして糸毛車の戸がするりとひらいた。
その瞬間、この世のものともおもわれぬ芳香が車の中からただよった。
長野の正面に夫人蓮子の姿があらわれた。
綾の袿をかさね、その上に唐衣をまとった蓮子の姿に、長野は目がくらむのをおぼえた。さすが宮中一の美女と称されるだけのことはある。高貴とみやび、それにはなやかさを溶け合わせたような容貌容姿の蓮子が長野に眼差をむけた。
長野はあまりのうつくしさに一瞬目をそらしかけたが、すぐに視線をもどした。余の命

令は幕府の命令とまで言った以上、宮廷の夫人の容顔に負けてはならなかった。
「おあらためいただきましょう」
蓮子がしずかに言った。
その声を聞くだけで、長野は足がふるえそうになった。しかしそれを相手に気づかせてはならなかった。
「前大納言白河惟在様のご夫人でございますな」
長野は背をいくぶん反らすようにして言った。が、その声はいくらか上ずっていた。
「左様におじゃります」
蓮子は微笑すら浮かべてこたえた。
そのとき、長野は蓮子が発する芳香をふかく吸いこんで、頭がくらっとした。
「どちらへ行かれなされます」
長野は恍惚たるおもいにひたりながら、役目上の尋問をした。
「本日、嵐山におきまして、宮中の紅葉狩りがおこなわれます。それに出席いたしますためにまいる途中におじゃります」
蓮子がうっとりするような声でこたえた。
「白河惟在さまは？」
長野はすこしでもながく蓮子と対面をつづけ、言葉をかわすためにたずねた。陶然たる

気分をあじわっているのである。

「前大納言さまは、すでに紅葉狩りの会場へでかけております」

蓮子はみやびやかな容子でこたえた。

「左様にござりますか。世情けわしき折から、本日宮廷の方々に万一のことがあってはとおもんぱかり、道中の警備をいたしておるところにござります」

長野は夢見ごこちの気分で言った。

「お役目、ご苦労におじゃります。車のあらためはおすみでおじゃりますか」

はじめてやや皮肉な意味合いをこめて蓮子が聞いた。

「車のあらためはすみましてござります。十分お気をつけてお越しくださりませ」

長野はもっと蓮子と会話をつづけていたかった。もっと蓮子の美貌に接しつづけていたかった。

長野はすっかり蓮子にこころをうばわれてしまった。世の評判はいつわりではなかった。この世にかほどかぐわしき女人がいようとは知らなかった。今までに見たどんな美女も蓮子のうつくしさ上品さにはおよばなかった。

長野ほどの男が、少年のような恋ごころと野獣のような欲望を蓮子におぼえた。

いつの間にか、車の戸がひかれ、蓮子のうるわしき姿は車の中にかくれていた。

(いつかまた会いたい)

長野がそう胸に期しているとき、牛車はゆっくりとうごきだした。

長野はしばし凝然と牛車を見おくった。

蓮子が高貴な身分の夫人であることもわすれて、長野は蓮子へのおもいを胸に焼きつけた。

長野には今強大な権力がある。京都中に権力をおよぼすことができる。宮中のやんごとなき人々にたいしても、時によっては強権を発することができる。

(何といたしても、かの女人を……)

長野はこのときから、蓮子にどす黒き野心をいだきはじめた。

権力は魔物だというが、長野はすでに魔に魅入られていた。権力にものを言わせても、蓮子をものにしたいとかんがえた。

牛車の一行は、おいおい嵐山の天竜寺にあつまった。

天竜寺は京都五山の第一で、臨済宗天竜寺派の本山である。後醍醐天皇の崩御のあと、菩提をとむらうために足利尊氏と直義の兄弟が夢窓疎石を請じて開山とした寺である。

かつては七堂伽藍と百数十の塔頭、子院を擁し、東は釈迦堂、西は亀山、南は嵐山、北は浄金剛院におよぶ三十六町以上も寺域はあったが、応仁の乱やその後の災火によって、今は全盛時の姿をうしなっている。が、その面影は十分にとどめていた。

孝明天皇をはじめ、九条尚忠、鷹司政通、同輔熙、近衛忠熙、一条忠香、三条実万らは藤原氏時代の釈迦坐像、日光立像を安置した方丈において、ひとまず休息した。方丈の背後には亀山と嵐山を借景にした池泉廻遊式庭園がひらけ、紅葉まっさかりの絶景をあますところなく見せている。ほっと溜息がもれるようなうつくしさである。

池の水面にも錦をうつしたように紅葉があかあかと映え、園路にも、敷石、飛び石、池をかこむ白砂にも紅葉が舞いおちている。池の中のところどころに島をかたどった岩が見える。紅葉狩りにはまさに最適の場所である。借景の亀山と嵐山の峰もかがやくばかりに紅と黄金に染まっている。今時期は京都がいちばんうつくしく見えるときである。京都千年の歴史をはぐくんだ風景が見事に浮かびあがっている。

天皇をはじめ、烏帽子、狩衣姿のやんごとなき公家たちが休息所から庭におりてきた。廻遊式の庭園がたちまちはなやかになった。色とりどりの袿、唐衣姿の女人や被衣姿の女官もいっせいに庭におりてきたのである。

紅葉の風景と色あざやかな衣装が溶け合い、うつくしさが何倍にもなった。宮廷の公家や夫人、女官たちはおもいおもいにひろい庭をめぐり、紅葉の色彩に酔った。

緋毛氈をところどころにひろげ、夫人、女官たちは用意してきた重箱をひろげ、料理をとりわけて舌つづみをうつ者、甘酒や茶をくむ者さまざまである。

庭からでて、天竜寺の伽藍や塔頭、子院を見物したり、嵐山や亀山の方面へ紅葉狩りに

足をのばす者もいた。幕府がとつぜん断行しはじめた大獄に宮廷の百官は戦々兢々とした日々をおくっていたが、今日だけはべつであった。御所をでて解放された時を満喫し、日ごろの憂さをわすれていた。

はやくも歌を詠みだす者、笛や鼓を奏する者もいた。

どの緋毛氈もにぎやかではなやかだが、とりわけ豪華できらびやかな雰囲気にはえているのは、白河惟在卿の夫人蓮子のすわるところである。夫の惟在卿の姿は見えないが、錚々たる大臣、諸卿たちが入れかわり立ちかわり蓮子の緋毛氈へ挨拶にくる。

蓮子はどの客の挨拶もたのしげにうけ、うるわしき容顔をほころばせて会話をたのしんでいる。あたかも蓮子が紅葉狩りの主賓のようである。蓮子の一顰一笑に緋毛氈の人々がわいた。

蓮子が歌を詠むと、人々は絶賛した。舞いをまうと、さらなる拍手がわいた。

ところが、いつまでも惟在卿は姿をあらわさぬ。どこへ行ったのかも、人々にはわからない。

けれども蓮子は気にもしなかった。惟在卿の日常といえば、いつもこんなものである。自堕落といえるまでに気ままであり、ぐうたらである。何処でなにをしているのかわからない。いつの間にか屋敷をでてゆき、数日もどらないかとおもうと、ある日飄然ともどってくるのである。

惟在卿はすぐれた才能を持っていながら、どこかで道をまちがえ、宮中の道楽者、あそび人と言われるようになった。蓮子は結婚後、何度か惟在の生活ぶりと将来についてかたり合ったが、その効果はなかった。蓮子とはなしたときは惟在は今後はこころをあらため、一生懸命に精進するとこたえるが、一日たてばすべてわすれて、蹴鞠や諸芸にうつつを抜かす毎日である。蓮子は夫についてはすでにあきらめていた。官位官職の昇進の野心もなく、若い年で大納言さえ辞してしまった惟在の心中は蓮子にはとてもわからなかった。

あきらめてからは、蓮子は夫にたいして興味も関心もうしなってしまった。今は自分のことだけをかんがえる毎日の暮しであった。言い寄ってくる公家や御曹子はあまたといる。しかも蓮子にとって都合のわるいことに、実家の飛鳥井家は代々蹴鞠の宗家、家元である。蓮子が惟在と縁組したのは、父と惟在との蹴鞠の交友が機縁となった。

蹴鞠は奈良時代のころから宮廷内を中心にしてはやりだした競技であり、飛鳥井家と難波家が宗家になって、地下の者たちのあいだにもひろめた。蓮子の父飛鳥井雅信は上鞠と称する蹴鞠の達人である。しかも家元による収入があるから、飛鳥井家の暮しは公家の貧乏時代においても裕福なのである。その実家の助けがあるから、蓮子は今でも暮しにこと欠くことはない。

緋毛氈の上で、ふと蓮子は耳をすました。

どこからか鞠を蹴る音が聞えてきた。

鞠を蹴り合う人々ののびやかな声もかすかに聞えた。

一瞬、わずかに蓮子の顔に苦笑が浮かんだ。

天竜寺境内のどこかに〈かかり〉をつくって、惟在らの仲間が蹴鞠をたのしんでいるのである。

惟在は御所の仁寿殿の東庭でも蹴鞠をやるくらいであるから、天皇行幸とはいえ、天竜寺の境内で蹴鞠をやるくらいは、おどろくにあたらない。

「歌会にやってきて、歌も詠まずに蹴鞠に興じているお人もおじゃる」

蓮子の緋毛氈にやってきた公家の一人がそう言った。

「なにしろ嫁の実家の芸が蹴鞠でござりますから、いたし方おじゃりません」

蓮子はわるびれたふうもなく、にこやかに言った。そうでも言わぬかぎり、公式の席上で夫の悪口をみとめることになる。

「そうでござりましたな、蓮子さまのご実家は蹴鞠の宗家でおじゃりました」

その若い公家はわらって言った。

「夫が蹴鞠をたのしむのは義父孝行なのかもしれません。嫁といたしましては、どうするべもございません」

蓮子は百花の王をおもわすばかりのあでやかさでこたえた。

蓮子にこう言われてしまえば、誰も惟在を非難することはできなくなるのだ。

「前大納言さまは、まことによき嫁をお持ちになられた」

べつの公家がそう言った。

「蹴鞠ぐるいの人のことはもうお話しいたすのをやめましょう。それよりもよき歌を一首でも詠みたいものでございます」

蓮子はそう言い、筆をとって、短冊に歌をしたためた。

蓮子が言えば、人もそれにならう。蓮子がわらえば、ほかもわらう。おなじ緋毛氈にすわる人々はみな歌を詠みはじめた。

短冊に歌をしるした者は、それを席上で公表するのが歌会のしきたりである。

蓮子が自分の歌を読みあげると、人々はみな賞賛し、蓮子をたたえた。

蓮子はあたかも紅葉狩りと歌会の女王のようであった。

蹴鞠に興ずる声はいつまでも境内の庭から聞えた。前大納言ら蹴鞠仲間は飽くことを知らぬらしい。

日が西山にかたむくと、風がでてくる。境内の空気もつめたくなってきた。およそ一日たのしんで、一行は牛車に乗り天竜寺を後にして、御所へかえっていった。

蓮子は、この紅葉狩りでは一度も夫と顔を合わさなかった。屋敷にもどって大分たったころ、惟在の牛車がかえってきた。

惟在は自分の部屋に入り、蓮子も自分の部屋にこもっていた。屋敷にもどっても、夫婦はあまり顔を合わさなかった。

蓮子の顔がくもり、悩みが浮かんだ。惟在との仲をどうするか、真剣にかんがえねばならないとおもった。

白梅図子

寺町今出川に、大原口町というところがある。

ここを出町と呼んだ。七口の一つ大原口の出口だからである。

このころの旅行案内に、

『寺町通り今出川、東川原へでるところより田中村、百万遍、下賀茂、修学院、八瀬、大原比叡山、若狭への道筋なり』

とある。

この出町のあたりは高野川と賀茂川が合流する地点でもあって、以前から洛北の人々があつまってくる場所であった。とくに洛北の農家を相手にする商家がおおく、町は繁盛していた。

煮売茶屋を表看板にした〈白梅図子〉という遊女街もあって、昼間からさかんに客を呼びこんでいる。遊女屋は十数軒あって、紅殻格子、鎧格子の京都特有の店づくりで客をむかえ入れている。遊女屋のほかは旅籠、古着屋などである。

今日も、客をまねく女たちの姿が紅殻格子のむこうに見える。

「あんさん、おいでえな」

「泊ってったら、楽しゅうおまっせ」

女たちの声にもおっとりとした京都の風情が感じられる。

その声に呼び寄せられた男二人の客がいた。

いかにも洛北の百姓といった感じの男たちだ。田畑でとれた作物を洛中へ売りにでて行ってのかえりであろう。懐はあたたかそうである。それを見てとった女たちは精いっぱい媚びをふくんで男たちをひきつけた。

「ねえさん、ええ女や。あそんでいこか」

若いほうの男が、若いほうの女を見て、こころがうごいた。

「ほな、わても付き合おか」

中年の男も好色心に火をつけられてそう言った。

男たちはやにさがった顔で〈もみじ家〉という店に入った。

女たちがうれしそうにそれをむかえる。街道筋の遊女屋でよく見かける風景である。

中年と若い男は茶屋の座敷にあがって、遊女二人のもてなしをうけた。酒を飲み、商売物の煮売り料理をつついた。料理、味つけはわるくなかった。

それよりも、客は二人とも相手の女を気に入ったようである。洛北の百姓村の女と洛中の商売女とでは器量がちがう。匂うような色気がある。

女たちは男の欲望をそそりたててくる。酒の勢いもあって、男たちはその気になってきた。

日が暮れて、座敷のなかの膳が片づけられた。

二つの部屋に床が用意された。

男たちは二つの部屋にわかれて、女を待った。

やがて、女たちはやってきた。

〈もみじ家〉には二階と階下に座敷が六つあり、ほぼ客でうずまっているようである。どこの部屋からともなく、客と遊女の秘め事がはじまった。ときによって、遊女のあえぎ声が襖のかなた、廊下のむこうから聞えてくる。白梅図子の茶屋では、毎夜おなじことがくりひろげられている。

朝は早立ちである。

くだんの二人の客も、早々に遊女たちにおくられてもみじ家をでた。

大原口の番所と柵は出町のすぐ先にある。今日もきびしい警戒がおこなわれている。柵の出口にはすでに数人の旅人が改めを待っている。洛北の村々へかえる者と、若狭へ往来する者たちである。

大原口をでる道は、近江路、若狭路、あるいは〈鯖の道〉とも呼ばれる。京都と若狭小浜をむすぶ道である。比叡の山々を東手にして、鴨川の源流のひとつ高野川ぞいに八瀬、

大原とさかのぼり、丹波高地と比良山地のあいだを途中峠、花折峠とこえて、近江朽木を経由し、敦賀と小浜にいたる。大原口の道標から小浜城下まで二十五里が全行程である。

京都は内陸の盆地であるために、鯉や鮒、ゴリなどの淡水魚しか人の口に入らない。それで若狭の魚がよろこばれた。若狭の海辺で一塩して、商人の背に負われて京都にはこばれてくる二日のあいだに、塩がしみわたってほどよい味になる。それで鯖街道の名がついた。

くだんの二人の百姓が柵にいたったとき、背後からガラガラとおおきな音をたてて車がやってきた。

車とはいっても、牛車のようなやんごとなきものとは大ちがいだ。

番所の番士たちがみな露骨に顔をしかめた。あたりにつよい臭気がにおう。汚穢車である。

しかも大八車に汚穢のおおきな樽を二つもつんでいる。洛北の農家が車に野菜や芋類などをつんで洛中に入ってくるのはしばしばであるが、稀に汚穢車が洛中から洛外へでて行く。洛中の家々でだした汚穢を洛北の農家が肥料にほしがるのである。それは結構いい金になる。

柵の前で改めをうけるためにならんでいた後ろに汚穢車がつくと、あたり一帯をひどい臭気がおおった。

逃げ腰になる旅人や番士もいた。
「へえ、相すんまへんどす」
「くそうて、申しわけありまへん」
汚穢車をひく初老と中年の農夫が、あたりの人々に詫びを言った。
しかし改めをおえるまでは、そこを立ち去るわけにはいかない。
車にはおおきな樽が二つつまれ、フタがされているが、車がうごくたびにピチャピチャと樽の中で音がする。
順番がくると、番士はあからさまにいやな顔をした。
「洛北の汚穢車だな」
番士の一人がたずねた。汚穢車だからといって、改めをしないわけにはいかないのだ。
「へえ、左様どす。ご迷惑をおかけします。八瀬へもどるところどす」
いくらか腰のまがった初老の農夫が気をつかってこたえた。
「一応、樽をあらためる」
番士が言うと、初老の農夫が前の樽のフタをとった。
とたんに胸のむかつくような汚物の臭気が今まで以上のつよさでにおった。
直径半間くらいはある大きな樽のなかには黄金の人糞がいっぱいにつまっていた。車がゆれると、樽の縁から外へこぼれそうになる。慣れた者でなくては、汚穢樽を車につんで遠くへはこぶのはむつかしいのだ。

「かなわんな」
番士がつい本音をもらした。
「後ろの樽もあけまひょか」
初老の農夫が言うと、その番士は顔を横にふった。
「かまへん、あけんでいい。前も後ろもおなじやろ」
番士は辟易した顔で言った。
「おなじどす。後ろの樽にも汚穢がいっぱい入ってま」
「早よう、行け。番所の中がくそうなるやないか」
番士は追いたてるように言った。
ほかの番士も大勢いたが、それをとがめる者もいなかった。彼等は一瞬でもはやく、汚穢車に柵をとおり過ぎてほしかったのだ。
「さっさと行け」
そばからべつの番士も叱声をとばした。
「へえ、すんまへん。通させてもらいま」
初老の農夫はそう言い、樽のフタをしめ、車をだした。
汚穢車はまたピチャピチャと音をたてて、柵を通過した。

「汚穢がくさいのは当り前や。自分かて毎日だすやないか」
車の後を押す中年の農夫がやや憤然たる顔で言った。
「まあええやないか。汚穢のにおいが好きいう者はおらへん」
初老の農夫がいさめた。
それから汚穢車は高野川の川べりぞいに田中へむかい、さらに高野にむかった。
北山杉が前方にひろがり、川べりの風景は紅葉が見事である。岸から川面へ樹木の枝がながくのび、水面に黄金や紅の葉をうつしている。
さらに行けば修学院である。ここには後水尾上皇がつくった離宮がある。渓流をせきとめて池をつくり、広大な敷地に高低差を利用して離宮をつくり、上・中・下の三つの茶屋をたてた。
汚穢車が修学院の近く山端という村まできたころ、大原口の番所では一騒動がもちあがっていた。
馬に乗った所司代の役人七、八人が番所に駆けつけ、けわしい様相で、番所に入ってきた。
彼等のさしせまった様子を見て、番所の若い者がすぐ応待にでた。
「何事かござりましたか」
「水戸藩の志士土浦孫三郎が仲間一人と逃亡した。大原口か鞍馬口のいずれかから脱出をはかったとおもわれる。それとおぼしき者はとおらなかったか」
一行の指揮者とおもわれる三十前後の男が息せきこむように言った。
「水戸の土浦孫三郎でございますか。今朝はまだ一人もあやしき者は柵をとおっておりませぬ」
若い番士がこたえた。
水戸藩の土浦孫三郎といえば、斉昭の近習出身で、尊攘の志士として知られている。藤田東湖にふかく私淑し、その高弟となった。一昨々年、安政の大地震によって東湖が圧死していらい、その遺志をつぎ、京都にきて尊攘運動に奔走していた。幕府方が召し捕りをねらう大物志士の一人である。
「土浦がここにむかった形跡があるのだ」
一行の指揮者は言った。
「土浦孫三郎ならば、番所に人相書がまわっております。柵に近づけば、かならずわかります」
若い番士は自信をもってこたえた。
「人相書のまわっておる志士が、そのままの姿で七口の柵に近づくはずがあるまい」
その指揮者は一喝した。
「左様でござります」

若い番士の自信はその一言でたちまち突きくずされた。
「変装いたしておるか、そのほかの細工をいたしておる。それらしき者には気がつかなかったか」
指揮者はきびしい口調で言った。
「気づいておりませぬ」
若い番士がこたえたとき、番所の奥から数人の番士たちがでてきた。番所をあずかる番士たちは交替制であり、約半分の者は番所の奥で休息している。
「大原口の番所をあずかる新藤房之助にござる。土浦孫三郎がこちらに立ちまわった形跡がござるとか」
四十がらみのおおきな体の男がすすみでて言った。
「八分どおり大原口へむかったと見ておる。おもいあたる節はござるまいか」
追手の指揮者は新藤房之助にたいしてはやや敬意をはらってたずねた。
「柵を通行する者は一人のこらず、しっかりとあらためておる。よもや土浦にとおりぬけられたとはおもわれぬ。間道、抜け道にも目はいきとどいておる」
新藤はこたえた。土浦孫三郎ほどの志士に通りぬけられては、番所の番頭の面目は丸つぶれになる。
「駕籠や車はいかがでござる?」

「駕籠も車も長持や長櫃も、その中や荷をあらためておる」
「左様でござるか。念のためにお聞きいたすが、駕籠や車はいかようなのがとおったか、おぼえておいでか」
追手の指揮者がそうたずねたとき、新藤の顔から急に血の気がひいていった。
「八瀬の汚穢車……」
そう言って新藤は絶句した。
「なにっ、汚穢車」
「汚穢の大樽を二つつんだ車がとおった……」
「ううむ、樽の中はあらためられたか?」
「番士が簡単にあらためた」
「簡単に……」
「なにぶん、汚穢の樽はくそうござる。ひどいものじゃ」
新藤はくるしげに言った。
「その樽の中に土浦ともう一人の志士はひそんでおったとおもわれる」
指揮者はうめくように口にした。
「樽のフタはとって見た」
「しかし樽の底まであらためたわけではござるまい。その大樽が二重底になっていたとし

たら、下に人間一人がかがんでひそむ余地は十分ある」
「ううむ……」
今度は新藤がうめいた。
「車をひいておったのは、麝香猫だ」
どきりとする言葉が指揮者の口をついてでた。
麝香猫ならば、それくらいの細工や仕懸けはするかもしれない。
「今からすぐに追いかける」
新藤は蒼白な顔面をして言った。
「麝香猫ならば、今ごろ若狭路をうろうろしておるまい」
「しかし放ってはおけぬ。追跡する」
そう言って新藤は外へ飛びだした。
「馬をひけっ、汚穢車を追う。麝香猫があらわれた！」
新藤は大声で号令した。
「汚穢車に土浦孫三郎がひそんでおった。車をひいておったのが麝香猫だっ、追え！」
新藤は自分の馬に飛び乗った。
ほかの番士たちも、つぎつぎに馬に飛び乗った。
「麝香猫をひっとらえよ！　土浦を召し捕れっ」
新藤は大声を発しながら柵を飛びだし、若狭路を疾駆していった。
新藤の後を、約十騎の番士たちが追っていった。
騎馬の群れはもうもうと街道に土埃をあげ、落葉を舞いあげて、たちまち見えなくなった。
所司代の追手もおくれてはならじと、馬を飛ばしていった。

このころ……、
若狭路の山端に、くだんの汚穢車はとまっていた。
山端はその名のとおり、北も東も山がせまっており、村は山際にある。北は北山、東は東山である。
山端から北へも、東へも、もう車をひいては行けぬ。道はほそく、坂道になり、高瀬川の西岸は渓谷となる。川の流れは早くなっている。
「樽をあけよ」
やや腰のまがった初老の農夫が、今までとはうって変ったきびきびとした動作で力づよく言った。その声は若く、腰ものびている。すっくと立った男の背丈は意外に高い。眸にも光がある。
髪は白いものがだいぶまじり、顔にもシワが見えるが、それが変装によるものであるこ

とはあきらかである。

「汚穢はどこに始末いたしましょうか」

中年の農夫はたずねた。

「渓谷の雑木の肥料にもってこいであろう」

初老の農夫は微笑してこたえた。

それから二人で、車の上から汚穢の樽を一つずつおろしていった。

そして、樽のフタをはずした。またしても強烈な臭気があたりににおった。この臭気ならば柵の番士たちが辟易して、車をとおしたのも無理はない。

二人は樽をかついで道端まで行き、渓谷へむかって汚穢をながした。黄色いいくつかの筋となって、汚穢は渓谷の底へながれていった。

やはり樽の底は二重になっていた。上の底をぬくと、ぽっかりと大きな穴があき、人間の頭があらわれた。

「土浦さん、ながい辛抱でしたな。大原口を無事抜けだし、ここはもう山端です」

初老の農夫が声をかけた。

樽の中から、一人の男が這いだしてきた。

三十前後に見える屈強な感じの男で、見る者が見れば水戸藩の土浦孫三郎とわかる。

「ひどい臭いで、息がつまりそうだった。けれどもこれで七口をぬけ、虎口を脱することができた。お力ぞえをいただいて、かたじけない」

土浦は初老の農夫に丁寧に礼を言った。

つぎの樽から、もう一人の男が這々のていでてきた。こちらはまだ若い武士である。

「上の底から臭いがもれてきて大変でした。気絶しそうでしたよ。それよりもいつ番士たちに二重底を気づかれるか気が気ではありませんでした。生きたここちもしませんでした。大変お世話をかけました」

やはり水戸藩の渋井市之進という志士である。空気穴はあけてあったが、せまい樽の中に息をひそめているのは想像以上にくるしい。

「七口は抜けましたが、まだ安全だとは言えませんよ。おそらく道の先々にちいさな番所がもうけてあるでしょう。油断も安心もできません。十分注意をなさってください」

初老の農夫は言った。

土浦孫三郎も渋井市之進も、この初老の農夫が麝香猫であることを知っている。もう一人の農夫は麝香猫の信頼すべき部下である。

「麝香猫どの。われらが洛中をぬけだすことができたのは麝香猫どののお陰です。お礼の申し上げようもありません。麝香猫どのにたすけられた命、この先危険をおそれることなく、尊攘のためにはたらいてゆきます」

土浦は敬意をあらわし、こころからの礼を言った。実際に、麝香猫一味の力を借りなけ

れば、京都を脱出することはできなかった。

「尊攘の志士たちを京にとじこめ、袋の鼠にいたしておくことはできません。京をのがれ、尊攘の運動をやりとげてください。わたしも微力ながら志士たちを京から脱出させる手助けをつづけるつもりです」

麝香猫と呼ばれた初老の農夫は力づよく土浦と渋井をはげました。

「京を脱し、大獄の嵐が吹きやむのをしばらく待つつもりです。今召し捕られたり、死ぬわけにはまいりません」

「左様、今は逆風が吹きまくっておるが、いつかはしずまるか、風向きがかわる。それまではじっと辛抱いたしておることがよろしい。志士たちの今後の活躍を期待いたしております」

「麝香猫どのと一味の方たちへの感謝は生涯わすれません」

「ところで土浦どの、この若狭路をとおって、小浜へ抜けるのは、琵琶湖が近く、見通しもよいから、相当な危険があるとおもいます。おなじ小浜へでるならば、大原から江文峠の間道をぬけて周山街道へでたほうがよろしいのではないでしょうか。江文峠越えもそうきついものではありません」

麝香猫はそう助言した。京都周辺の地理にはとてもくわしいようである。

「小浜から船で逃げるつもりです。小浜にいたる前につかまっては何もなりません」

土浦も、はじめは鞍馬口からでて、周山街道を行く道筋をかんがえていたのだが、鞍馬口は道がけわしく、汚穢車が行けるような道ではないので、大原口をえらんだのだ。麝香猫の言葉は理にかなっていた。

「かつて織田信長も、越前朝倉攻めで近江の浅井に寝返られ危地におちいったとき、その道をとおって京に逃げかえったと言います。琵琶湖岸の近くをとおるのは、はなはだ危険がおおいのです」

「わかりました。麝香猫どののお言葉にしたがいましょう。いろいろお世話になりました。今ひとつ気がかりなのは、清水寺の月照和尚のことです。和尚には薩摩の西郷さんと有村さんがついておりますが、万一危険がせまったときには、麝香猫どの、よろしくご尽力をおねがいいたします」

わかれぎわになって、土浦は月照の身の上を心配した。京都にいる志士や学者はみな身の安全をおびやかされているが、とりわけ月照は僧籍である上、水戸藩士や薩摩藩士などのように後楯になってくれる藩がないので、不安は大きい。

「月照和尚でござるか。麝香猫にできる援助はどんなことでもいたそう。月照和尚は尊皇にとってとても大事な人だ。今、志士たちが京を脱することはよほどむつかしい。土浦どのもご承知であろう」

麝香猫は言った。

正体不明の麝香猫はたのもしい返事をした。

「のこるも危険、でるも危険。京都にいる志士のぜんぶが窮地におちいっております。麝香猫どのにたのむ以外にはありません」

渋井もそう言葉をそえた。

「尊攘運動にはたらいている人々にできるだけ尽力いたしたい。幕府の力まかせの取り締りはまったく無謀と言うほかはない。断じてはねのけねばなりません」

そう言った麝香猫の眼には怒りがにじんでいた。

「ぜひともおねがいいたします。一人でもおおくの志士をたすけてやっていただきたい」

土浦は麝香猫の手をにぎって言った。

麝香猫も土浦の手をつよくにぎりかえした。

「では」

「さらば、麝香猫どの」

「お二人の幸運と安全をいのる」

双方はおたがいにわかれの言葉をかわした。

土浦と渋井は山峡の道をとって、北山にむかってあるきだした。その道の先に、八瀬、大原など洛北の村々はある。

麝香猫とその部下はしばし見おくって、二人の姿が山峡に消えてから、ゆっくりと踵を

かえした。むろん、このままの姿では京都へはもどれない。今までの変装を変えなければならなかった。

薩摩屋敷

「なにっ、土浦と渋井を逃がしたと」
京都所司代の奥の一室で、長野主膳は怒りの声をもらした。
報告にきたのは所司代の役人で大原口の番所をまもる新藤房之助である。
新藤は修学院の先、山端まで汚穢車を追い、それ以上は車では行けぬので、八瀬まで馬で行き、むなしくひきかえしてきたのだった。
「まことにもって面目次第もございません」
新藤は長野と酒井忠義の前に平伏して、しばらく顔をあげなかった。
長野は宿舎としていた俵屋をひきはらって、近ごろはずっと所司代の奥の一室を居所にしていた。文字どおり所司代を陣頭指揮することになったのだ。
「土浦、渋井を逃亡させた手口はまさしく、今噂の麝香猫だな」
長野はにがりきった顔で言った。長野はもう何度も麝香猫に顔に泥をぬられている。長野がつくりあげた鉄壁の京都封鎖網は麝香猫のためにしばしばやぶられた。
「そのように推察いたします。麝香猫ならではの手口にございます。まんまとしてやられ

ました」
新藤は無念そうに表情をゆがめた。
「こうたびたび麝香猫にやられるのは、やられるほうも悪い。気合いが入っておらぬのではないか。それに反してむこうは決死の勇をふるっておる。このちがいであろう」
所司代酒井も責任を感じて言った。
「手前どももみな必死で七口の警備にあたっております」
新藤がやや弁解がましい言葉を口にすると、長野の眸に怒りの色があらわれた。
「必死で警備をいたしておれば、汚穢車などにあざむかれるはずもなかった。臭さをいとうて警備の手をぬいたのであろう。番士、番頭として何たること。役目怠慢じゃ。今の京は戦場だとおもえ！」
長野は腹の底から叱声をとばした。尋常な怒りではなかった。
「まことに恐れ入りましてございます。目下、番士たちが若狭路を懸命に探索いたしております」
「いったん京洛から逃がしてしまえば、その後の探索には十倍の難儀がかかる。土浦や渋井も、麝香猫も今回はおそらくつかまるまい」
長野主膳は志士取り締りと大獄に自分の命をかけている。失敗におわれば、自分ばかりでなく大老井伊の立場もあやうくなるのだ。

「土浦らはもう京にはあらわれぬ。しかし麝香猫は京にあって、またまた志士の京脱出に手を貸すであろう。憎っくきやつ。何とかいたさねばならぬ」

酒井の怒りもけっして長野におとるものではなかった。

「これほどまで京を探索しつづけて、いまだ麝香猫の尾にふれることもできぬ。幕吏全員がやつら一味に振りまわされておる。こやつをとらえんことには取り締りは失敗におわるであろう」

長野はにがにがしく吐き捨てた。

長野は京都の尊攘派を一網打尽にするために今回の挙にでたが、正体のわからぬ猫一匹に翻弄され、いやというほど屈辱をなめさせられているのだ。

「所司代と町奉行所の全力をあげて、麝香猫を取りおさえませんことには」

酒井も危険をおぼえはじめていた。京都の治安と法秩序の維持は一に、所司代酒井が負う立場にある。酒井にとっても、今いちばんの強敵は麝香猫である。

「かの敵にあまりに幕府の面目がつぶされるようだと、所司代の首がとぶことになるかもしれぬ」

長野はついに恫喝まがいの言葉をもちいた。

「ははっ、その覚悟で麝香猫の探索にあたります。今しばらくご猶予のほどをおねがい申しあげます」

京都所司代といえば、いずれは老中への道がひらけた幕府の重職である。その酒井が長野にはまったく頭があがらなかった。長野は無位無官、井伊直弼の謀臣にすぎないが、その人物が現在、京都における全権力をにぎっているのが実情である。

「麝香猫のことはひとまずおくといたして、清水寺の和尚はどうしてござる」

新藤が去ってから、長野は話題をかえた。

長野はかねてから、月照を召し捕りたいとかんがえていた。

それは酒井も同様である。京都にはまだ尊攘派の大物や有力者たちが大勢ひそんでいるが、長野はとらえるべき人物の第一に月照をあげた。月照は志士たちへの影響力がつよく、和歌の道にふかく、国学にも造詣をもっている。長野とは学問の道がおなじであり、なおかつ月照は長野よりも造詣がふかい。長野は以前から月照が個人的にも気に入らなかったのである。

「月照は今、薩摩屋敷にかくまわれている模様でござります」

酒井は九条家の島田左近や京都町奉行所渡辺金三郎、同心大河原十蔵、目明し文吉などをつかって、京都情勢をさぐらせている。

「かくまっておるのは、西郷吉之助、有村俊斎などであるな」

長野はややむつかしい顔をして言った。

薩摩藩は斉彬の時代は反井伊の旗幟を鮮明にしていたが、斉彬の死後薩摩藩の実権をに

ぎった久光はまだはっきりとは態度をあきらかにしていない。藩の主流は尊攘であるが、久光は生前の斉彬とつねに対立する立場にあり、長いあいだ権力抗争をつづけてきただけに、藩論には微妙なところがあった。

「西郷、有村も召し捕らねばなりません。しかし今雄藩薩摩をはっきりと幕府の敵といたすべきかどうか、いろいろ問題のあるところにござります」

酒井はそう言った。

薩摩藩は前代、前々代から藩内抗争がつづいており、この雄藩を敵とするのも味方とするのも、なかなかむつかしいのだ。

「月照、西郷、有村の三人をまとめて召し捕りたい。斉彬が死んだとはいえ、薩摩藩は信用がならぬ。いずれは幕府の敵にまわるような気がする」

長野は心中をうち明けた。

「三人とらえることができれば重畳にござります」

「なんとか薩摩屋敷からおびきだすことはできぬものか」

「ちかごろでは西郷、有村らも警戒いたし、滅多に屋敷の外へ姿をださぬようでござります」

「薩摩藩は幕府を敵にまわしてまで、月照をまもりとおす覚悟があるのかどうか……」

「薩摩の藩論はわかれております。が、京都においては断然、尊皇攘夷でござりましょう」

「では当分三人に手がだせぬことになる。しかしこの三人は薩摩への脱出をはかるかもしれぬ。警戒が肝要だな。けっして薩摩屋敷から目をはなさぬことだ」

長野も酒井も月照、西郷、有村の動向には重大な関心をもっていた。

「一人の月照は十人の志士に匹敵し、一人の西郷は百人の志士に匹敵する」

酒井は斉彬時代の西郷のはたらきぶりをよく知るだけに、彼をもっともおそれていた。

西郷は郡方書役助のころ、民政をふかく観察し、安政元年抜擢されて庭方役となり、斉彬の側近に出頭し、江戸へ随行して、水戸藩の藤田東湖、戸田忠太夫らと交わりを持つようになった。一昨年、斉彬から将軍継嗣問題の秘策を指示され、さらに島津一族の娘を将軍家定の夫人とする工作に奔走し、才腕と大器ぶりを発揮していた。

「西郷をえらく買いかぶったものだ」

長野はやや冷ややかに言った。長野には西郷の大器ぶりをみとめつつも、薩摩の田舎侍を過大視したくない意識がある。

「あるいは買いかぶりかもしれませぬ。けれども西郷にはなにか大仕事をやりそうな雰囲気がある。かまえて注意いたすべきかと存じます」

「三人がずっと薩摩屋敷にこもったままだと、始末に難渋いたすな」

「薩摩屋敷にこもりとおすか、それとも屋敷を抜けだして、鹿児島へ逃げて行くか……」

「いずれかであろう。屋敷を見張るしか手はない」
「町奉行所の者たちが、わからぬように張りついております」
「また麝香猫に邪魔だてをされてはかなわぬ。猫めが月照らを手助けいたすようだと、ふたたび難儀なことになる」
長野の心配はここにあった。しかも近ごろ、麝香猫一味のはたらきを京都の庶人が応援しはじめている。皇城の地だけに喝采する者もいるのだ。これが長野の気にさわるところであった。
庶人の応援がひろがれば、麝香猫は京都の英雄になる恐れがある。そうなると弾圧、取り締りがきわめてやりにくくなる。尊皇派の者たちを勢いづかせることにもなるのだ。
長野は今の弾圧をさらに徹底させ、宮廷の大臣たちにまでおよぼそうというつよい意図がある。それだけに麝香猫をはやいうちにとらえておきたいのだ。今のところは、麝香猫の正体についての探索がまったくすすんでいない。京都のすみずみまで知っているような、渡辺金三郎、大河原十蔵、猿の異名をもつ文吉すら、麝香猫については何の情報も得ていない。
「ちいさなほころびが大きな失敗をもたらす例は、歴史に数かぎりなくあった。麝香猫をつかまえることができぬと、大老の政治が失敗をきたす恐れすらある」
長野は先々のことまで読んで言った。

「洛中洛外の警備をいっそうきびしくいたしております。やがてのうちに麝香猫を追いつめることができようかと存じます」
酒井は大老の懐刀である長野の機嫌を損じたくはない。酒井は以前にも所司代をつとめており、今回は経験を買われての再任である。そして井伊、長野に全面的に協力をしているのは、その功績によって老中に推挙してもらおうという野心があるからだ。酒井の父忠進も京都所司代をつとめたが、老中への躍進はのぞめなかった。酒井の老中への野心は父子二人のものなのである。
酒井がその野心をとげるには、この時機に所司代として功績をあげることが大事なのだ。反対に失敗をすれば父子二代の野心がついえるばかりでなく、酒井は更迭され、自分の代では再起がのぞめなくなる。由緒ある酒井の家が凋落の運命をたどることはあきらかである。
だから、酒井も弾圧と取り締りに躍起になっている。今酒井の野望は麝香猫におびやかされていると言ってもいい。
「前大納言白河惟在卿夫人であるが」
このとき長野が言った。
「蓮子さまにござりますか」
「左様」

「蓮子さまがなにか」
酒井はとつぜん長野が夫人の名を口にした真意がつかめなかった。
「先日、宮廷の乗物をあらためたところ、かの夫人が乗っておられた。なかなかの美形にござった」
長野が言った。
「蓮子さまは宮廷一の美女にして才媛として知られております。ただ夫の惟在卿がいささかおぼつかなき人物にて、蹴鞠に凝って大納言の役を辞した前歴がござりまして」
酒井はようやく長野の心中をうかがうことができた。
「前大納言は少々盆暗だという噂がある。夫人とくらべると、まことに異な取り合わせだな」
長野は蓮子への興味をしめした。
「宮廷でもそのように言われております。蓮子さまがお気の毒だという声さえささやかれておるようです」
「左様でござろう」
長野はおおきくうなずいた。長野の胸中には宮廷の紅葉狩りのときに見た蓮子の姿が焼きついており、好色の虫がむずむずとうごきだしていた。好色は長野の生来の性である。
長野には妻たきがいるが、直弼が手をつけた女村山可寿江を妾にはらいさげてもらっている。その可寿江も現在、女間者として京で尊攘方の探索にはたらいている。この両人のほかに長野が手をつけた女は数おおい。そして今、長野は蓮子に一目惚れし、こころをうばわれた。

相手はやんごとなき宮中の夫人であるが、長野はどうしても蓮子をわがものとしたい衝動にかられた。美貌の才媛蓮子をわが胸の中に抱き、そのまま押したおしてゆきたい欲望が長野の胸に炎をあげて燃えつづけている。
「前大納言の夫人に蓮子さまではあまりにもったいない。夫人が気の毒だ。蓮子さまも夫に不満でござろう」
長野は自分勝手に言った。惚れた女のこととなると、長野ほどの男が冷静な判断力をうしないがちになる。
酒井は長野のその悪癖に気づいていた。
「おおいにご不満でございましょう。夫人がときに奔放なお振舞をいたされるのは、そのせいかもしれませぬ」
「かの夫人は奔放な女か」
「世間ではそういう噂がございます。宮中にても蓮子さまにおもいをかける公家は何人もいるとか」
酒井がそう言ったとき、長野の眸にかがやきが浮かんだ。蓮子は手ごわそうな女である

が、つけこむ余地はあるような気がしたのである。

老中間部を別格とすれば、長野は今京都でいちばんの権力を有する男である。その権力にものを言わせれば、なんとかなると長野はおもった。伝統の貴族的地位だけあって、権力はなにもない公家たちにちょっかいをださせるより先に、自分が蓮子をものにしてしまおうと長野は決心した。

夫の前大納言などは、長野の眼中にはない。四の五の言えば、権力にものを言わせて取り締りの対象にすればよい。前大納言といえどもそれをまぬがれることはできぬ。

長野は権力者としていろいろな攻め手にこと欠かない。それに前大納言は権力者に決然とたちむかってくる気迫も覚悟も持ち合わせていないようである。夫よりは蓮子そのもののほうが手ごわそうだ。

(蓮子をどう落すか)

長野はその思案をたのしんだ。これは権力者のみにゆるされた傲慢な特権である。

長野は京都の志士弾圧に八面六臂のはたらきをしていながら、蓮子を落すためについやす余裕ならばあるのだ。どんなことをしても目的をはたしたいと長野はおもった。

日暮れになって、長野は腰をあげた。

防寒の頭巾をかぶり、所司代の与力、同心、手代など七人をつれて、長野は市中へでていった。京都ははや初冬である。日が暮れると急速に寒さがしのび寄ってくる。長野は頭巾が手ばなせなかった。

頭巾は長野が面体をかくすためにも有用だった。長野は一行をつれて、市中をあるきだした。

市中見廻りは、所司代でも町奉行所でも昼夜となくおこなっていたが、長野はそれとはべつに、みずから役人をひきいて市中見廻りをおこなっている。

同心は所司代の提灯をかかげて、長野の先をすすんだ。大路、表通りには商家の灯がともっているが、小路、裏通りとなると、ほとんど明りはない。人通りもすくなくなっている。

一行は堀川通りをゆっくり北へのぼっていった。与力、同心、手代らは市中を見廻りながらあやしい人物、気配、様子をうかがい、尊攘志士の脱出を警戒しているのだ。

中立売通りと交差するとき、御所を警戒する見廻り一行と出会った。双方は目顔で挨拶しただけで通りすぎたが、むこうは頭巾の主が長野であるとは気がつかなかったようである。

今出川通りを右へまがって、長野一行は御所の裏側の方面へむかって行った。

白峰神宮の木立から冬鳥の鳴き声が聞えた。あたりはしずまりかえっているのである。

一行の足はしずかに薩摩屋敷へむかっている。

薩摩屋敷は相国寺と今出川通りとのあいだにある。大名屋敷としてはひろい敷地をもっ

ている。

烏丸通りをすぎると、薩摩屋敷の灰色のながい塀が提灯の明りの中にぼんやりと見えてきた。

塀の内側に、月照、西郷、有村はいるのだ。が、今おもてだって薩摩屋敷にふみこむわけにはいかぬ。

ながい塀が近づいてきた。

なんとなく、長野は胸さわぎをおぼえてきた。

長野は塀の前にいたり、内部のふかい木立に目をやりながらすすんだ。

そのとき、とつぜん前方に黒い影があらわれ、提灯の明りの中をかすめた。

(何者?)

とっさのことで、長野はすぐには判断ができなかった。

鼬かムササビではないかとおもった。御所の裏手や相国寺の境内の奥などには、そうしたたぐいの動物が棲息している。

提灯の明りにおどろいたか、その黒い影は猛然と明りにむかって突進してきた。体長は二尺ばかりの敏捷な獣である。黄金にひかった二つの眸が長野を見すえてきた。

「あ……!」

一瞬、長野は立ちすくみ、抜き打ちに太刀をふるおうとした。が、それよりもはやく獣は長野の足もと近くをはしりぬけ、薩摩屋敷の塀の上へ躍進し、そのまま一気に塀の上を疾り、闇の中に消え去った。

あっという間の出来事だった。

「何だ、あれは?」

背後にいる与力が言った。

そのとき、闇の中にふんわりと、え も言われぬ芳香がにおった。麝香のような匂いだ。

(麝香猫……!)

とっさに長野はそうおもった。見たことはなかったが、麝香猫は日本にもいるようである。猫よりはやや体が大きく、俊敏で戦闘的な小獣である。

長野は背筋に冷たいものをおぼえた。どうしてそのような珍獣が今この場に出現したのかいぶかった。

「明りをかざせ」

長野は命じた。

同心のかかげる提灯が前方を照らした。

かすかな予感が長野の脳裡に生じた。

そのとき、黒い人影が前方に浮かんだ。

灰色小袖に黒羽織、黒袴、その上黒い頭巾でふかく顔をおおっている。

黒い影は臆することなく、悠然たる足取りでこちらにむかってきた。
長野の予感はあたった。長野の体の中をすっと冷たいものがはしりぬけた。
長野はその人物を待ちうけた。背丈のある男である。
空には初冬十月の欠けた月が白い光をかすかにそそいでいる。
一行の中でも声を発する者はいなかった。
双方の距離がちぢまった。
「麝香猫だな。よいところで出会った」
長野が声を発した。このときの長野はもう驚きも戸惑いもない。麝香猫をどうしてもとらえてやろうという戦意と功名心の固まりになっていた。
「長野主膳と見うける。奸賊め！」
その男が気迫のこもった声で言った。
その言葉が長野の闘志に火をつけた。
「ころすな、取りおさえよ！」
長野は余裕をもって一行に命じた。
長野は剣術もできる。剣術に凝った時期もあるのだ。
与力、同心らは、いっせいに太刀を抜いて、道幅いっぱいにひろがった。手代は六尺棒をかまえて、麝香猫に相対した。

長野も太刀の鞘をはらった。相手はただ一人である。ほかに人影は見えぬ。長野は取りおさえることができるとおもった。
「長野主膳よ、志士弾圧をつづけるかぎり、幕府に手むかいいたすぞ。志士をいくらでも逃してやる」
その人物が声を発するや、与力、同心たちがいっせいに切っ先をあげておそいかかった。
手代も六尺棒をかまえてせまった。
その瞬間、黒い装束が月明りのなかにおどった。一刀を打ち抜きざま、麝香猫は先頭の与力の太刀を簡単にはらいおとし、しかもかえす一刀で同心の小手を打った。
「ううっ……」
うめいて、その同心はその場にうずくまった。
見るもあざやかな太刀さばきだ。
長野はこのような水際だった剣術を見たのははじめてだった。
与力、同心、手代たちも、肝をぬかれた。段ちがいの腕を見せつけられて、彼等は啞然となり、闘志がにぶった。
「どうしたっ、敵は一人だ！」
一歩さがって塀を背にしていた長野は、逆に闘志がはじけた。一同を叱咤しながら、みずから麝香猫の正面へすすみでた。

おのずから麝香猫の一刀の切っ先が長野の眉間あたりにむいた。その瞬間、長野は魂を敵の切っ先に吸いとられていくような恐怖をおぼえた。

「やっ」

長野は恐怖をうちはらうように自分から打ってでた。敵の肩口をめがけておもいきり袈裟がけに斬りこんだ。

やった、とおもったが、黒い影が目前におどって、敵はなんと鍔元で長野の太刀をうけていた。おもいがけない放胆な太刀さばきだ。

長野と麝香猫はわずか三尺ほどの距離をおいて、鍔競り合いとなった。力と技のせめぎ合いだ。

たがいに頭巾の中から眼光をぶつけ合い、相手の気合と技をはかった。

長野は背丈で相手におとった。気合はほとんど五分五分である。

背丈でおとるぶんだけ、長野は上から相手の鍔の圧迫をうけた。満身の力をこめて、長野は競り合った。相手にはまだ余力があるようだ。このままつづけば、長野が力負けをすることはあきらかだ。長野はあせりをおぼえはじめた。

そのとき与力の一人がようやく横合いから、斬りかかった。

「今宵は腕試しだ。長野、命は大切にするものぞ」

麝香猫はあっさりと与力の太刀をかわし、すでに二間以上の距離をとっていた。想像もつかぬ俊捷さである。

長野がつけ入る隙はなかった。

「麝香猫っ、逃げるのか！」

長野がさけんだ。

「勝負をする機会はまだいくらでもある。長野、腕を十分みがいておけ」

言うや、麝香猫の体が一転し、地上から跳んだ。

高々と跳ねあがり、その体はなんと二間の高さはある薩摩屋敷の塀の上に乗りうつった。

長野は唖然として見上げた。

与力、同心、手代たちもどうすることもできずに見まもった。

麝香猫は今し方の麝香猫がはしりぬけたと同様に、一気に塀の上をはしって、闇の中に消え去った。

しばし呆然と長野らは立ちつくして、麝香猫を見おくった。とつぜんの夢幻のような出来事だった。

相国寺

白河家の屋敷に、関白九条家の諸大夫島田左近がおとずれてきた。白河家ではこの日も当主惟在が留守であった。それで白河家の諸大夫花房内記が応待した。

公家として九条家は白河家よりも格式が高く、したがって家来の諸大夫でも九条家の島田のほうが花房をしのいでいる。その上島田は辣腕家で、関白家を背景にして宮廷内外に権勢をきずいている。このたびの志士弾圧、大獄にあたっても、島田は長野と意をつうじ合い、朝廷の情報をながしたり、幕府の間者の役目をはたしていた。そのために朝廷の内情は幕府へ筒ぬけになった。

島田のおとずれは花房にとって意外であった。いかなる意味での来訪かまったくわからなかった。

客室において、島田は花房を睥睨するがごとき態度でのぞんだ。

「主人白河惟在はただいま屋敷を留守にいたしております。かわってわたくしが御用をうけたまわりましょう」

花房は下手にでて言った。惟在夫人蓮子は屋敷にいるが、客の応待にだすわけにはいかなかった。

「前大納言はいつごろ屋敷におもどりになられる」

島田はいやな質問をしてきた。

「近々のうちにもどられるとおもいますが」

花房の返事はいかにも歯切れがわるい。前大納言とはいえ、無断で何日も屋敷をあけることは公にはゆるされていない。そこを問いつめられると、具合がわるいのだ。

「いつおもどりになられるかわからないのだな。では、夫人蓮子さまはいらっしゃるか」

島田は蓮子への面会をもとめてきた。

「奥方さまはいらっしゃりますが、風邪気味にて、お部屋にこもっておられます」

蓮子に対面させてはまずいことになるのではないかと花房は予感し、そうこたえた。

「卿はご不在。奥方さまはお風邪にござるか」

島田はねちねちとした言い方をした。

「左様にござります。ご要件はわたくしがうけたまわりたいと存じます」

花房は難物の攻撃をすこしでも避けたいためにへりくだって言った。

「前大納言様の行状が、昨今所司代においても取沙汰されておる」

島田は高飛車に言った。

「……」

花房はすぐには適当な返事ができなかった。返事のいかんによっては、島田に言質をとられる恐れがあるからだ。まして主人惟在の行状に多少とも問題があることは、花房も承知である。

「関白様も、前大納言様にはすこしかんがえていただきたいというご意向にござる。ただ今京は幕府と尊皇方とが衝突いたし、けわしき情勢にある。朝廷においても多事多端な折から、帝をはじめ公家百官が真剣に皇国の行く末について案じておるとき、前大納言のみは蹴鞠やそのほかの遊戯にうつつを抜かし、浮かれておられる」

島田はきびしい口調で惟在を非難した。この非難は関白九条尚忠のものであろう。

「ははっ」

花房はかしこまって頭をさげた。惟在の行状については、花房も頭をなやましている。いたずらに弁解がましき言葉は避けるべきであった。

「蹴鞠、遊戯をいたすのがいけぬとは関白様もおっしゃってはおらぬ。けれども公家の行状がみだれておれば、幕府につけこまれる恐れがある。幕府はそれを理由に朝廷内のことに口をだしてくるやもしれぬ。前大納言様のお遊びは、ちと度をこしていらっしゃる。朝廷の体面にもかかわる」

島田は非難をつづけた。

しかし幕府側の九条関白が、幕府につけこまれると心配するのは、いささか筋道がちがうと花房はおもった。

「お言葉はもっともにござります。前大納言さまにおつたえいたし、おかんがえになっていただこうと存じまする」

花房はなるべく当りさわりのない言葉をえらんで言った。

朝廷、公家は幕府がさだめた〈禁中並公家諸法度〉によって百般の規制をうけている。官位、官職、席次の事柄から任免、諸芸能、生活ぶりのことまでさだめられているのである。幕府はことこまかに口をだしはしないが、だそうとおもえばだせる。島田はこのことを口にしている。

「今幕府はおもいきった手をつぎつぎに打ってきておる。志士や学者などが召し捕られているが、宮廷の大臣たちといえども安閑とはしてはおれぬ。幕府はやろうとおもえば、いつでもやれる。何事でもやれる。前大納言様のお遊びもあまり目につくようであれば、所司代の取り締りをうけることがあるかもしれぬ。夫人蓮子さまはことのほか聡明なお方として知られておる。惟在卿の行状について、いかがおかんがえになっておられるか、機会あらばお聞きいたしたいと関白様はかんがえていらっしゃる」

島田のきびしい言葉はまだつづいた。

「奥方さまへよくお話しいたしておきまする。じつのところ、奥方さまも惟在卿の行状に

はご心配をいたしておられます。時世けわしき折から、おかんがえがなさ過ぎるようです」

花房は島田の権勢をおそれて、なかば迎合もした。ひところの九条尚忠は尊攘方公家たちのはげしい攻勢にさらされ、関白の地位もあやうかったが、先月来の弾圧、大獄によって、九条の地位は確固としたものに盛りかえした。それにしたがって島田の権勢も並々ならぬものになってきていたのだ。さらに島田は長野主膳の懐にとびこみ、京都や朝廷についてあまり知識のない長野にいろいろな情報をもたらしていた。長野も関白をうごかし、あやつる上で島田と手をむすぶことは、はなはだ有利であった。

「その程度のかるい気持でおられてはこまる。関白様としては前大納言様をきびしく尋問いたしたいところでござる。よほど肚をすえてもらわねばならぬ」

「どのようにいたしましたらよろしゅうございますか」

花房は島田の意がよほどつよいのを見てとってたずねた。

島田はすぐにはこたえず、腕をくんだ。

花房は島田の肚に一物あるのを見ぬいた。

「いちばんよい方法は奥方蓮子さまが長野様とお会いになられて、惟在卿のことをねんごろにたのみ入ることであろう」

島田が心中をもらした。

花房にとっては予想しなかったことであった。

「奥方さまが、長野様に……？」

花房はすぐにはその言葉の意味が読めなかった。島田は裏のある男である。策略もある。花房はそれを読もうとした。

「左様、今は何事も長野様にたのみ入るにしくはないのだ。長野様も惟在卿の奥方に関心をもっておられるご様子。奥方が真ごころをもってたのみ入れば、長野様はよきように取りはからってくださるやもしれぬ」

島田の言葉を聞いて花房はおどろいた。

「そのような……」

花房がおもわず口ごもると、

「世の中には何事にも裏がある。表ばかりでは世の物事はうごくものではござらぬ。表と裏をつかいわけることが世わたりの芸というものであろう。な、花房どの」

島田の態度はしだいにあからさまになってきた。

花房は怒りをおぼえたが、島田を敵にするわけにはいかなかった。それに島田の言葉にも一理はあるのだ。

「奥方さまにおつたえいたしておきます」

いやなものを飲みこむように花房は言った。

蓮子のはなやかな美貌と才媛ぶりは宮中ばかりでなく、世間に知られている。したがって蓮子に興味をいだく男は世におおい。しかしこれほどあからさまに蓮子への興味を口にした者は今までになかった。

「よしなに。関白様も長野様も大層惟在卿をご心配なさっておられる。丸くおさまれば結構なことだ」

島田はそう言って、座をたちあがった。

花房は腹の中が煮えくりかえるのをおぼえた。長野は権勢におごって、宮中一の美女を手に入れようとしているのかもしれぬ。島田はその手先である。

「関白様、長野様のご尽力をおねがい申し上げます」

玄関を辞してゆく島田へむかって、花房はそうたのみこんだ。

島田が去ってから、花房は蓮子の部屋へむかった。

蓮子は自室の机の前にすわり、歌づくりに余念のないところであった。侍女がそのかたわらにはべっている。

「花房、九条家の諸大夫は何用でおじゃったのじゃ」

蓮子が物憂げに問いかけた。

その表情、姿が諸大夫の花房にさえなやましく見えた。宮廷内外の男たちがさわぐのもまんざら無理ではないとおもった。蓮子には本当に男の本能を揺さぶる女の魅力がみちている。

「惟在卿のことにてござります」

「島田左近が惟在卿についてなんと？」

蓮子は筆をおいて、花房に見入った。

蓮子は自分の夫について大いなる不満と失望をいだいているが、それと他人が夫についてとやかく言うのとはべつである。

「惟在卿の行状は近ごろ目にあまると……」

花房はかくしだてはしなかった。してすむものではなかった。

蓮子がやや柳眉を逆だてた。その顔がなんともうつくしい。

「関白家の諸大夫が前大納言の行状を口にいたすとは」

蓮子の誇りたかき自尊心にいくらか傷がついた。

「長野主膳の意向をつたえにまいったようでござります。近ごろ、島田は長野主膳の意をうけてうごいております」

「そして何と？」

「惟在卿の行状をこのままにいたしておきますと、大事にいたる恐れがあると。そのために奥方様とご相談いたしたきことがあるそうにござります」

「威しでおじゃるな。長野とどんな相談をいたすことがある」

蓮子の柳眉がさらに逆だった。

「ただの威しではござりませぬ。惟在卿の行状を理由とし、長野は奥方様とねんごろにお話がいたしたいのでござりましょう」

花房はそこまで明かした。

「いやしき匹夫におじゃる、長野主膳め。権勢におごって、何たることを」

蓮子は長野の下ごころを察し、本当に怒りをおぼえたようである。耳にするさえも汚らわしいことである。朝廷にたいする侮辱だとおもったのだ。

「長野主膳がそうしたことを口にするのは、朝廷、皇室の衰微をあらわすものでござりまする。あなどられておる証拠でござりましょう」

花房がそう言うと、蓮子はいかにも口惜しそうに唇をかんだ。

「朝廷、皇室の権威は地におちた。尊皇の運動がおこってきておるのは、あまりにも朝廷や皇室が幕府にふみにじられてきたためでおじゃろう」

「それにしましても惟在卿はどのようにおかんがえになっておられるのでござりましょうか。奥方さまのおこころをいささかなりともおかんがえになっていただきとうござりまする」

花房は蓮子にいたく同情していた。

「花房、それは言うても無駄でおじゃろう。惟在卿は生まれついて遊びのこころに染まったお人。他事に興味はおじゃるまい。今更、言うのはむなしい」

蓮子は本心をのぞかせて言った。蓮子はすでに前大納言を見はなしているようである。もう立ちなおることはないとおもっているのだ。

惟在は容姿容貌にすぐれ、若いころは学問や武芸の道に精をだし、遊技にもすぐれていた。が、今の惟在は蓮子から見ても、公家の道を逸脱し、堕落している。朝廷の内部にも尊皇の思想が澎湃としておこり、その運動に身を挺する公家たちがおおいなかで、惟在のみはとりのこされている。蓮子はこういう夫の姿を見るのがつらく、情なかった。若きころの惟在の面影は今はまったく見ることができなかった。

「そうはおっしゃられましても、このままにいたしておくことはできません。奥方さまが惟在卿におっしゃられるのが一番よいとおもわれます」

「言うたとしても甲斐なきことじゃ。馬の耳に念仏と申すではないか」

「されどもこのままでは済みそうにありませぬ。長野主膳が目をつけておりますれば」

花房がそう言ったとき、蓮子の表情がわずかにかわった。

「長野に会うてみようか。それほど会いたいと申すのならば」

前言をひるがえすように蓮子は言った。蓮子の顔には女人ながら不敵な微笑みが浮かんでいる。

「奥方さま……」

今度は花房が制止するように言った。

「長野に会ったとても、よもや取って喰われることもおじゃるまい」

今度は蓮子はかえって興味ありげに言った。それが蓮子のわるい癖である。挑まれれば受けて立とうという女の意地だ。

「それはなりません、奥方さま。ご身分をおかんがえくださりませ」

「しかし相手は会いたいと申しておる。どんな言い分があるのか、一度聞いてみてもよい」

「長野の罠にはまるようなものでござります」

花房はとめたが、蓮子はその気になったようである。ねむっていた子をおこしたようなものだ。

「花房、長野と会う手筈を」

と言って、蓮子は机にむきなおって、ふたたび筆を手にした。そして近くに花房がいることもわすれたようである。

もう花房がなにを言っても、蓮子はふりむきもしない。歌づくりの境地に没入しているのである。

花房はとりつく島もなかった。蓮子は長野との面会を本気でやるようである。

烏丸通りに牛車の行く音がする。

牛車はみやびた糸毛車である。車に一人したがうのは白河家の諸大夫花房内記である。糸毛車の主は蓮子ということになる。

牛車は烏丸通りから、五山の第二位、相国寺の山門をくぐった。相国寺はかつて室町幕府のあった東方を占め、東は寺町、西は大宮、南は一条、北は御霊森の周囲二十余町にわたる広大な寺域をもっている。堂々たる伽藍を擁し、将軍の居室となる蔭涼軒もある。

豊臣秀頼が再建したといわれる法堂の入口に牛車はついた。

車からおりてきたのは、まぎれもなく白河蓮子である。

花房がしずしずとしたがい、蓮子は控えの間に入った。その部屋には狩野光信の雄壮な絵が画かれている。

部屋の中はさむいが、火鉢や火桶などはおいていない。

蓮子はその部屋の中で端然とした姿で待った。

蓮子が今日会う人物は、尊皇弾圧と大獄の主人公ともいうべき長野主膳である。

二人の面会は長野の希望によっておこなわれた。

ほどなくして青坊主が入ってきた。

「どうぞ、お座敷へ」

とすすめられた。

蓮子は花房をしたがえて、法堂の座敷へ入っていった。襖絵は光信の蟠竜図である。

座敷にはすでに長野が下座にひかえて待っていた。

当然、蓮子は上座へすすんだ。

長野は平伏して蓮子をむかえた。

「本日は恐れおおくも、わざわざご足労をいただき、大変恐縮にございます。さらに先日、宮廷の紅葉狩りにおきまして、車あらためをいたし、失礼申しあげました。申しわけなき次第にございました」

長野にとって蓮子との対面はこれが二度めである。

蓮子の今日の装いは色あざやかな浅黄の袿に季節の紅葉をちらした優美な唐衣の正装である。

前回にまさるともおとらぬ蓮子の美麗典雅な姿に長野は一瞬うっとりとなったが、挨拶には謹厳な態度をとった。

「白河蓮子にてございます。本日はそなたの呼びだしをうけ、でてまいりました」

蓮子は花房をしたがえてすわるなり、やや冷ややかに言った。感情を押しころし、いっさい表にださぬ態度である。前大納言夫人としての威厳がおのずから雰囲気のなかにただよっている。

「恐縮至極にございます。やんごとなきお方をむかえ、身のちぢむおもいにございます」

かさねて挨拶をする長野の態度には緊張があらわれていた。が、長野ごとき辣腕、したたかな者にとって、これが本心だとはおもえなかった。肚に一物をひそんでいることは蓮子もあらかじめ予想していた。

蓮子がかすかに微笑んだ。長野の下ごころを揶揄するがごとき態度だ。

「幕府の尊攘圧迫がはげしくなっておじゃります。恐れおおくも帝にあらせられてもご宸襟をなやませられ、一日たりとも安穏なおこころの日はございますまい。わが皇国の史上におきましてもこのような例は一度たりともなかったでございましょう」

蓮子はおだやかな口調ではげしい意味の言葉を口にした。

長野は顔をあげ、蓮子に見入った。

「幕府が取り締りをおこなうのは尊皇に名を借りた志士、学者などが、朝廷に運動いたし、国の政治をゆがめ、幕府政治をないがしろにいたそうとするからです。このような志士たちの運動がしずまれば、幕府は尊攘圧迫と言われるようなことをするはずがありません。尊皇はもともとわが国根本の国体にて、幕府も朝廷、天皇の委託によりて成りたつものにございます。このたびの取り締りを皇室に圧迫とおっしゃられるのははなはだ遺憾にございます。大老の本意でもございません。大老の尊皇のおこころは若きころからのものにてございます」

長野はすぐれた国学者で、雄弁家であるだけに、ここらあたりの弁舌はたくみである。

巧弁といってもよい。

「左様でございますか。それならば帝をはじめ公家百官の悩みを、明日といわず今日にもとりのぞいていただきたいものにございます」

「天皇、皇室は幕府の敵ではございませぬ。一天万乗の天皇、皇室は幕府の母胎にして、よりどころにございます。天朝あっての幕府であることは万民の知るところでございましょう」

弁舌ならば長野の得意とするところである。宮廷一といわれる才媛の蓮子をもってしてもかなわない。双方で弁をきそえば、蓮子は袋小路に追いこまれるばかりである。

「もともと天朝と幕府はそのようであったと聞いております。けれども近ごろでは、ずいぶん違ってきたようでございます。はやく元のようになればよいとおもっております」

蓮子は皮肉で長野の巧弁をかわした。

「大老ならびにわたくしも、その日がはやくくることをねがっております。しかしそのためには、天朝が尊皇派志士たちにうごかされることなく、一日もはやく本来の姿にもどられることです。左右大臣、内大臣、前関白様らにはやくそれについて気づいていただきたいとおもうばかりです」

長野は蓮子を巧弁によってだましたいところであるが、蓮子はその手には乗らなかった。

「それは江戸より大老から派遣されました長野さまのお仕事でございましょう。女子にお

っしゃられても、詮なきことにございます」

蓮子はびしゃりと長野の出口をふさいだ。

「蓮子さまはただの女子とはちがわれましょう」

長野がはじめて蓮子の名を口にした。

「それは買いかぶりというものでおじゃりましょう。わたくしは前大納言の妻にしかすぎませぬ」

蓮子が夫のことを口にしたとき、長野は本論に入るきっかけをつかんだ。

「前大納言さまの行状、お暮しぶりが近ごろ所司代の目についておりまする。公家には公家の定めがございましょう。白河惟在卿のお暮しぶりはいささかそれから逸脱されておられませぬか。お遊びもいい加減になさりませぬと、幕府の咎めがくだるやもしれませぬ」

「……」

「公家や皇室には禁中並公家諸法度がございます。それをおまもりくださるならば、むつかしいことにはなりませぬ。前大納言さまにもそれについてかんがえていただきとうございます」

長野は遠まわしな惟在攻撃にでてきた。惟在攻撃が長野の最大の武器である。惟在に幕府の咎めをくだすのは、長野自身であると蓮子に認識させたいのである。

「いつのころからか前大納言は蹴鞠に魂をうばわれたようでございます。大納言の官職を

うしないましたのもそのためでございます。つまり前大納言は官位、官職を捨ててまで蹴鞠とたわむれることをえらんだと言えましょう。その意味では筋金が入っているのでございます。なまなかな忠言、諫言などで夫の暮しぶりを変えることなどのぞめませぬ」

蓮子はこたえた。

「奥方さまがそこまでおっしゃられるならば、いたし方ありませぬ。幕府も目にあまるならば、お咎めをいたすことになるでございましょう。ご自分でえらんだ道でございますれば、覚悟のほども十分にございましょう」

長野はつっぱねるように言った。これは長野の手順どおりである。長野は遠まわしな恫喝にでたのだ。そして蓮子のほうをさり気なくうかがった。

蓮子はしばらく間をおいた。実際、蓮子自身の悩みもそこにあるのだ。蓮子はずっとそれになやんできた。いまだその悩みは解決できなかった。

「長野さまのおっしゃるとおりでございましょう。前大納言さまが蹴鞠にくるうて幕府の咎めをうけるならば、それはいたし方ありませぬ。覚悟もついておりますでしょう。夫も無念だとはおもいますまい」

蓮子はおもいきった答えを口にした。

長野にとって予期せぬ答えであった。

「異なことをうけたまわります。奥方さまのご本心とうけとってよろしゅうございますか」

長野はやや驚きをかくさず言った。

「いたし方なきことにございましょう。官職を辞したとはいえ、前大納言として公家の身分はかわりませぬ。あそび呆けて、公家の道を外れたといたしますればお咎めをうけても仕方がありませぬ」

蓮子はきっぱりと言った。宮廷の公式行事の紅葉狩りでさえ、歌も詠まずに、仲間たちと蹴鞠に興じている夫である。惟在の心中は蓮子にすらつかめなかった。

「前大納言さまがお咎めをこうむりますと、ことはそれだけでは済みませぬ。白河家の行く末が心配になります。奥方さまの身もどうなることかわかりませぬ」

長野の恫喝はしだいにあからさまになってきた。最初の遠まわしな恫喝に蓮子が屈し、憐みを乞うてくると長野は予想していた。それがくるったために、長野は手順をうしなったのだ。

「そもそも白河家は、難波家とともに蹴鞠の宗家、家元にございます。前大納言さまが蹴鞠に熱中いたすはお家の芸にはげみ過ぎたとも言えましょう。学問や諸芸能の道にはげむのは禁中並公家諸法度にもさだめられております。それを罰することは法度で法度を咎めるようなものでございます」

蓮子はやんわりと反撃にでた。

幕府は天皇や公家が政治に関心をいだくのをふせぐために、歌や学問、諸芸能の道に精進するよう法度でさだめたのである。

「しかし諸芸能にはげんで、公家の道をはずしたならば、公家として責められるべきでございましょう。公家には朝廷の一員としてまもるべき節度がございます」

かたるに落ちた。惟在を処罰したい長野の心中を蓮子は見すかした。

「おやりになりたくば、やるがよろしかろう。長野主膳どの」

蓮子はにこりと笑みをもらして言った。まるで長野の器量と実力をはかるように。

「やるべきときにはやります。それはわたしがそう信じたときです」

ついに長野はかねての戦術、手順をうしない、自分から丸裸になっていった。

「長野さまは前大納言さまをどのようにおかんがえになっていらっしゃいます」

蓮子が問うた。

「場合によっては、お咎めも仕方がなきかとみております」

やや自棄になって長野が言った。蓮子とのこころははなれていくばかりである。到底、蓮子を自分の膝元に屈服させることなどできなくなった。

「そのときは、蓮子は長野さまにおたのみにまいります。よしなにお取りはからいおねがいいたします」

微笑すら浮かべて蓮子は言った。長野は完全に愚弄されたのである。

端正な長野の顔がいくらか苦悩にゆがみ、額に冷汗がにじんできた。長野のもくろみはくずれた。

「できる取りはからいはいたしましょうが、できぬことはどうにもなりませぬ」

「前大納言をささいなことから咎めだてると、今もりあがっております尊攘運動の火に油をそそぐことになりませぬか」

勝負はすでにきまっていた。長野は蓮子に手玉にとられたと言ってさしつかえない。

長野の姿がしだいに小さく見えてきた。態度に余裕もうしなわれた。

「今そうなったとしても、危険な芽はつんでおかねばなりませぬ」

長野はあくまでも強気に言ったが、もう形勢の逆転ははかれなかった。

「お好きなようになさりませ。わたくしはどちらでもかまいません」

蓮子はおもいきりよく突っぱねた。

ここまで言われてしまうと、長野も立場がない。

「奥方さまのご意向はうけたまわりました。今日のところは、この寺の和尚の点前でもご馳走になってかえられませ」

長野はもうそう言いつくろうしかなかった。

しかし長野は蓮子をあきらめたというのではない。今日あじわった屈辱を倍にして蓮子へかえしてやろうという愛憎の炎を燃やしているのだ。

長野は自尊心がつよく、執念ぶかい男である。これによって、蓮子ばかりでなく惟在も身に危険を背負うことになった。

居酒屋米半（よねはん）

東寺（とうじ）の五重塔が間近に見える。

九条大路に面したこの五重塔は京都市中のどこからでも見ることができる。旅にでる者は東寺五重塔を見て京都をでてゆくことをおもい、またかえってきた者はこの塔をのぞむことで故郷にもどってきたことを実感するのである。京都ばかりでなく、この塔はわが国最高最大の五重塔である。

かつて平安時代には、平安京の大極殿（だいごくでん）から都を南へつらぬく大動脈朱雀（すざく）大路が九条大路に合して、ここに出入口をひらいていた。それが羅城門（らじょうもん）であった。北端の朱雀門と相対して金色燦然（さんぜん）と鴟尾（しび）をあげた雄大な大門であったが、平安中期には荒れはてて盗賊の棲家（すみか）となり、いつしかその姿を消してしまった。

この羅城門をはさんで東西に建てられたのが東寺と西寺であった。が、西寺ははやい時期に焼けおち、今では東寺だけが平安の時代をしのぶがごとく、京都の南口にのこっている。

その出はずれに七口の一つ東寺口があり、南方にむかい、さらに西国につうじている。

したがってこの道を鳥羽街道とも摂津路、播磨路とも言う。伏見街道とならぶ南への道である。

東寺に近く、堀川に面したあたりに茶屋、飯屋、旅籠、居酒屋などのたちならぶ一画がある。京都を旅だつ者、かえってきた者が一息ついて家族知人らと久方ぶりの再会をしたり、送別をおこなう場所である。

その一画のいちばんはずれに〈米半〉とすすけた提灯をだした居酒屋がある。間口わずかに二間ほどの店だが、奥行はかなりあり、一応紅殻格子と鎧格子のかまえである。

この店の主人半兵衛は、かつて桂川、淀川の船頭をしていた者だ。十年ほど前、増水した桂川に船をだし、転覆して客の五人を死なせてしまったために船頭暮しがいやになり、陸にあがって、女房と二人で居酒屋をはじめたのだ。

酒や肴はうまいが、いたって愛想がなく、気に入らぬ客とは喧嘩をしてしまうので、店は繁昌していない。繁昌はしなくとも、半兵衛は気に病むふうはないのである。気に入った定連の客と終日はなしこんでいるときもある。

今日も、半兵衛は二人の客と昼ごろからずっとはなしこんでいた。

一人は折烏帽子に腰刀、素襖姿の下級公家のいでたちで、きりっとした顔だちの男である。二十七、八の年ごろと見える。

もう一人は顔のながい男である。武家屋敷の若党姿で腰に一本刀をおびている。年ごろは四十前後で、手足もながい。

半兵衛はときに立ったりすわったり、たまに客でもくれば注文の酒や肴をだしたりするが、この二人は小座敷にすわりこんだままである。今はほかに客もいないので、三人ともかなり大きな声で話をつづけている。何かを待っているような様子である。

「まだこぬ」

と言ったのは素襖姿の男だ。深草道実という人物で、見かけどおりの下級公家である。公家にはめずらしい剣の達人で、以前、米半に侵入した盗賊二人をまたたくまにたおした経歴がある。

「おそい」

若党姿の長五郎という男も、ながい顔で相槌をうった。

二人は昨日から、米半でこうして待っているのである。

米半には二階に部屋が三つと納戸があり、ときに客を泊めることもあった。

「今夕までにはくるやろう」

半兵衛はおちついている。居酒屋の主人にしては一癖ある男である。

そう言えば、深草も長五郎も一癖感じられる男だ。

三人は手持ち無沙汰で、しばらくそれぞれ手酌で酒を飲んでいた。とりとめのない話がつづいた。

一刻（約二時間）近くがたち、
「おそいやないか」
長五郎がながい顔に浮かぬ表情を浮かべてふたたび言った。
もう外は夕闇が近づいている。
「何かあったんと、ちゃうか」
深草が思案顔で応じた。
今度は半兵衛も何も言わなかった。
三人のあいだにながい沈黙がながれた。
先程やってきた二人づれの客は店をでてゆき、また三人だけになっていた。
しばらくたって、半兵衛は店頭の提灯に火を入れに立った。
そのとき、半兵衛と入れかわるように前髪頭で筒袖を着た童児が入ってきた。
深草と長五郎の眼が童児にそそがれた。早熟た、すばしこそうな童児である。
「お頭は？」
長五郎が童児へ声をかけた。
「今日はこれんようになったようどす」
童児の返事に深草も長五郎も気落ちした表情にかわった。
「所司代、町奉行所の市中警備がとてもきびしく、大事をとらざるを得なくなったんどす」

童児はつづけて言った。
「ほな、お頭は足止めくっとるのか。京はほんまに日ごときびしい様子になってきたな」
「お頭がでられんようになるとはよくよくのことや」
「ほかに言づけは？」
深草がたずねた。
「明日はかならずくる言うてはりました」
童児の返事に深草と長五郎は半信半疑でうなずいた。
「麝香猫の名がすこし高まりすぎたのや」
「近ごろ麝香猫、麝香猫と子供までが噂しとる。これでは身うごきもとれんようになる」
「また待ち呆けや」
半兵衛ももどってきてそう言った。
彼等が待っている人物こそが、今市中で話題の麝香猫である。
したがって、彼等が麝香猫の手下である。米半は一味の連絡場所であり、隠れ家ということになる。麝香猫は大抵ここで策略をねり、手下たちに指示をくだしてきた。ここに変装の名人麝香猫がなかなか近づけぬということは、よほど情勢が切迫してきている証拠である。

「わてらも気いつけなあかん」
長五郎もそう言った。
「所司代も町奉行所も躍起になっとるのや。麝香猫をつかまえんことには志士弾圧も大獄も失敗におわるというかんがえやろ」
「しかしこちらもだいぶ危のうなってきた。仕事はますますむつかしゅうなった。これからどうなるか」
「そのかわり、仕事のやり甲斐はある。市中の者も麝香猫のはたらきを待っておる」
「今度の仕事は、とりわけ大仕事や」
みなはぼそぼそと小座敷ではなし合った。
夕方といえば、居酒屋などは店のたてこむ時刻であるが、米半はそんな有様でもない。
鳥羽方面から東寺口に入ってきた旅の者が二、三人、酒で喉をうるおしにきただけである。
しばらくすると、もう外は宵闇になった。
深草と長五郎、それに童児は二階へひきあげ、早々に寝床にもぐりこんだ。
翌朝、
まだ早いうちに、深草と長五郎はおきてきた。
半兵衛はもうおきており、今日の商いの仕込みをしていた。

めずらしく朝のはやい行商人がきて、朝餉をかっこんでいた。これから東寺口をでて、鳥羽、淀方面へむかうのであろう。五十前後の行商なれした感じの男である。
深草と長五郎はその男の前をとおって、小座敷にあがった。
長五郎は煙管をとりだし、朝の一服をやりだした。
今日は風があり、外は寒そうな感じである。店の戸や障子がかたかたと音をたてている。
今日も麝香猫はいつやってくるかわからない。
「今日はどうなるやろ」
長五郎が言った。
深草が素襖の袖をまくってつぶやいた。
そのとき、
「深草」
店内で男の声がした。
「長五郎」
もう一度声がしたので、二人はいぶかった。
声の主はくだんの行商人しかいない。
二人は行商人へ視線をそそいだ。
半兵衛が料理場から笑みをおくってきた。

「お頭っ」
先に深草が声をあげた。
「お頭やないですか」
長五郎も呆気にとられた。
「暁についた」
その行商人は箸をやすめて言った。
「それにしてもわかりまへなんだ。いつもながら見事な変装どす」
長五郎が言った。
今日の麝香猫は中肉中背である。麝香猫の変装の見事さは自分の背丈まで変えて見せることにある。背をまげたり伸ばしたり、履物の底を細工することで五寸まで背丈を変えることができるのだ。
かなり老けた顔に見えるが、まちがいなく麝香猫である。
「お前たちがわからないのなら、ほかの者にわかるわけがない」
麝香猫は笑みも見せずに言った。
忍法に〈七方出〉という言葉があり、忍者は七種の姿に変装すると言われるが、麝香猫の変装はその上をゆく。深草も長五郎もついだまされてしまうくらい絶妙である。だから捕り方や七口の番士たちにもまだ顔をおぼえられていないのだ。

「お見それいたしました。米半の客だおもうとりました」
深草も完全にしてやられた。
「それくらいでなくては、幕府を相手にたたかえぬ」
そう言いながら麝香猫は朝餉をすませた。
「今回の仕事は？」
深草と長五郎は麝香猫の飯台の前にきて言った。
「月照と西郷、有村の三人を京から脱出させる」
麝香猫はしずかに言った。
この三人は尊攘志士たちのうちでの最大級の大物である。幕吏たちによく顔も知られている。
「大変な仕事どすな」
長五郎はこたえた。
「そうだ、むつかしい仕事だ。三人の居場所も知られておる。薩摩屋敷には幕府の見張りもついている」
麝香猫は茶を飲みながら言った。しかし成算はありそうである。麝香猫は今まで一度も失敗をしたことがない。くわだてた脱出作戦はことごとく成功している。
けれども情勢はずっときびしくなっている。麝香猫の知名度もあがって、ずいぶん作戦

はやりにくくなった。今までのようにはゆくはずもなかった。
「行き先は？」
深草がたずねた。
いつしか半兵衛も童児も麝香猫の近くにきていた。
「薩摩」
「薩摩まで同行いたすのですか」
深草がややおどろいた。
薩摩へは遠い。陸路を行けば、障害なく行って、中国路十数日、九州路十余日。およそ一ヶ月近くかかる。
「追手がかかれば護衛のために同行もいたし方ない。船で行けばさほどはかからぬ」
麝香猫はあっさりとこたえた。
彼の智謀と勇気、行動力をかんがえても、大変に難事である。
「京をでるのは、どこの口から？」
長五郎が聞いた。長五郎は東寺口から大坂へとかんがえていた。そして大坂から船に乗るという道筋である。
「東寺口はあぶない。この口は大坂にいちばん近い道だ。幕吏の警戒ももっともきびしいだろう」

麝香猫はこたえた。
「左様どすな。東寺口をぬければ、伏見まではすぐや。そこから船で一日で大坂へくだれる。それだけに見張りのいちばんきびしい道どすやろ」
長五郎は京都、大坂を中心にした上方の地理なら、道端の地蔵のことまでくわしく知っている。
「ほかの口からでて、大坂へ行く」
「ほなら丹波口？」
「まあそのあたりだろう」
丹波口からでたならば、それほど遠まわりをしないですむ。けれどもそう近くもない。丹波口は老ノ坂をへて丹波へいたる道の口である。大坂へは一見何のかかわりもなさそうな道筋である。
いずれにしろ丹波口からでたなら、丹波道（山陰道）のどのあたりからか迂回して大坂へむかわねばならない。その場所のとりかたと道筋で成否がきまる。
「それにしても薩摩へ逃げこむとは、月照和尚もよく決断したもの」
深草は言った。
「月照が逃げこむところと言えば、今は薩摩をおいてはほかにあるまい。薩摩は尊攘の大藩だから」

「薩摩しか行くところがない言うことどすやろ」
「けれども薩摩かて一筋縄ではいかん藩や。何がおこるかしれへん。謎の国や言われとる」
長五郎は思案ぶかくこたえた。薩摩はもともと生やさしい藩ではないのだ。藩内に抗争もあれば、古い因習もある。長五郎はややそれが不安であった。
「今はそんなことはかんがえておられぬ。まず月照、西郷、有村を京から脱出させることが大事だ」
麝香猫はそう言った。
麝香猫の顔からは不安は感じられなかった。
その顔を見て、手下たちは何とかやれるのではないかという気になった。今までも、麝香猫は何度も至難の道をくぐりぬけてきた。
「丹波口を抜ける手立は？」
深草が聞いた。
「手立はある」
と麝香猫はこたえただけである。その手立について今は口にしなかった。
「いつ」
「今日だ」

麝香猫の答は明快である。
この日の昼さがり、中堂寺村一帯にコロリ騒ぎがおこった。
コロリはまだ京都において猖獗をきわめており、死者の数は一向におとろえていなかった。コロリは猛菌によって腹の内臓がおかされ、はげしい下痢と激痛、高熱を発する急性伝染病である。一度これに伝染した者はまずなおる見込みはない。何とも始末のわるい病気である。
急性伝染病であるから、一ヶ所で患者がでると、一人や二人ではとどまらない。すくなくとも数人から十人くらいの感染者がでて、確実な治療法はなく、一時的に患者を隔離するしかないのである。
祈禱師や修験者がしきりに病調伏の祈禱をおこなっているが、もとより霊験のあろうはずがない。天地自然の力でいつか難病がしずまるときを待つしかなかった。しかしその時はまだきていないのである。
中堂寺村で感染者がでたということは、もっと多数の患者がでるということである。中堂寺村の附近ではコロリにおびえて、一時的に避難をする者もでている有様である。
中堂寺村からほど近い丹波口の番所でも、コロリの噂がつたわって話題になった。
昼下り、

三台の大八車が、寝棺の形をした細長い箱をつんで丹波口に近づいた。車はそれぞれ前と後、二人の男がひいてやってきた。

柵のところまでやってきたとき、数人の通行人が改めをうけていた。

「その車、どこへ行くんや」

番士が呼びかけた。

「へえ、中堂寺村からまいりました。家の者がコロリにかかり、洛外の廃れ寺へつれていくところどす」

先頭の車をひく無精髭の中年の男がそうこたえた。コロリにかかった者は大抵、洛外の無住の寺に隔離されていた。無住の寺ならば雨露や寒さはしのげるし、家の者が食べ物をはこぶくらいのこともできるので、隔離するにはいちばんよいのである。

「コロリか」

病名を聞いた番士たちはとたんにいやな顔をした。なかにはおもわず遠ざかっていった番士もいた。

「へえ、昨夜からはげしい下痢がつづき、高い熱にうなされておりますんや。コロリがうつったにちがいありまへん。近くの医者も恐れてよう診てくれまへん。そうこうしているうちに家族二人にうつってしまったんどす。仕方なく寝棺を買うてまいりまして、病人を隔離しに行きますところどす」

その中年の無精髭の男には家族が三人もコロリにおかされた苦悩がありありとあらわれている。車をひくほかの男たちも同様である。なかには憔悴しきった様子の者もいる。

「行く先は佃田村の般若寺だな」

番士が聞いた。

般若寺はここ十数年無住になっており、洛西の隔離場所の一つにさだめられていた。

「へえ、左様でござります」

中年の男はこたえて、寝棺をあけようとした。寝棺には空気をとおす穴があいており、中に布団にくるまった病人が入っているようだ。

「よい、よい。開けなくともよい。コロリが番所内にうつったら大変や」

番士があわててとめた。

「改めがきびしいと聞いておりましたが、開けなくてもよろしゅうございますか」

中年の男は念入りにたずねた。

「病人を近づけるな。車を遠ざけよ。コロリはべつだ。わざわざあらためる要はない。はやく行け」

番士はそう命じた。その顔は嫌悪の表情があらわである。コロリを何よりも恐れていることがうかがえる。

それを制するほかの番士もいなかった。こころはみなおなじなのである。

「ほな、とおらせていただきます」
中年の男はそう言い、番士たちに頭をさげて柵をとおっていった。
「はよ行け、みなに迷惑がかかる」
番士たちはがらがらと音をたてて三台つづけて行く大八車を見ようともせずに言った。
ほかの通行人たちもあからさまに嫌悪をあらわしている。この番所にかぎらず、コロリにかかった者やその家族たちはみなこのような仕打ちにあっていたのだ。
ぺっ、ぺっと唾を吐き捨てる番士もいた。
「はやく、どうにかならぬものか。下手をするともっとひろがる恐れがある」
そう言う番士もいた。
三台の大八車は音をたてて、朱雀、西七条のむこうにある佃田村へむかっていった。
それからだいぶ時間がたった。
午後の日が西へかたむいた。
番士の一人が、ふとおもいついたように、
「コロリをはこんだ大八がまだもどってこないな」
ととなりの番士へ言った。
「おかしい。もっと前にもどってきてよいはずだ」
その番士がこたえると、近くにいた番士たちがいっせいに色めきたった。

「般若寺へ行ってもどってくるだけなら、これほど時間はかからない」
「何か理由があるのかもしれぬ」
みなは今になって不審をいだきはじめた。
そのとき、七条通りのほうから馬の駆けてくる蹄の音が聞えてきた。
番士たちは七条通りをながめた。
数騎の馬と徒士で駆けてくる十人ばかりの一隊が見えた。
番士たちはいやな予感をおぼえた。
たちまち騎馬が丹波口に到着し、しばらくおくれて徒士の人数が駆けつけてきた。
「こちらは長野主膳様にござる。拙者は島田である。月照と西郷吉之助、有村俊斎の三人が薩摩屋敷を脱出いたした。それらしき者たちがここに立ちまわらなかったか」
馬上から島田左近が番士にむかって言った。
長野主膳も馬から降りることなく、馬上から番士たちを見おろした。
「月照、西郷、有村の三人はこちらにまいっておりませぬ」
番頭の丸山某がこたえた。
「三人はそのままの姿ではここにやってくるまい。おそらく変装か策略をもちいておるにちがいない。おもいあたる節はないか」
島田はたたみかけるように言った。

「おもいあたるような者はここにはきませんでした」
丸山はそうこたえてから、
「昼下りのころ、コロリにかかった者を般若寺へつれて行くと言って、棺桶を乗せた大八車がとおりましたが」
気にかかると見えて、そうつけくわえた。
「その大八車はもどってきたか」
今度は長野主膳がたずねた。
「まだもどっておりませぬ。時間がかかり過ぎておると今言っていたところです」
丸山は不安げにこたえた。
「そやつだ。棺桶に入っていたのが月照、西郷、有村の三人であろう。大八車をひいておったのは、おそらく麝香猫とその一味だ」
長野はいまいましそうにこたえた。
「えっ、月照らと麝香猫？　本当でございますか」
丸山は驚愕して言った。
「本当だ、おそらく間違いない」
島田もおなじことを言った。
「中堂寺村でコロリがでたとは聞いておらぬ。麝香猫一味が偽りの噂をまいたのだ。その後車でとおれば、疑われることはすくない」
長野はきめつけて言った。その眼にははげしい怒りの色がにじんでいる。
「大失態をいたしました。これから追跡いたします」
丸山はあわててこたえ、追跡の人数を名指そうとした。
「お前たちが行っても間に合わぬ。この一行で追跡する。番所をしっかり固めておけ」
島田はそう言いつけて、柵を駆けぬけた。
長野やそのほかの騎馬も馬を疾駆させ、徒士の者たちはいっせいにはしった。
丹波口の先は朱雀、西七条とつづき、その先に佃田村がある。

竹の道

長野、島田一行は佃田村の般若寺に到着した。

無住と一目でわかる廃れた雰囲気の寺である。山門の屋根も柱も風雨にさらされて傷んでいる。境内や参道は長年清掃されていないので、落葉やゴミなどでいっぱいである。伽藍の形は一応のこっている。

本堂や方丈、庫裏などが病人の隔離につかわれているようだ。

一行は境内を見まわしたが、大八車は一台も見えぬ。境内には人影も見えない。

島田と与力渡辺金三郎、同心大河原十蔵、目明し猿の文吉らが本堂へ近づいて行った。ほかの者たちは隔離されている感染者を恐れて本堂には近づかず、境内をうろうろしている。長野は馬からおりようともしない。

しばらくたってから、島田、渡辺らがもどってきた。

「今日隔離された者はおらぬそうです」

島田が蒼ざめた顔をして長野に報告した。

「やはり、だしぬかれた！　麝香猫めっ」

長野の顔はそれ以上に蒼い。

「麝香猫一味が月照、西郷、有村を護衛して京を脱出した。何とかはばんで連れもどさねばならぬ。麝香猫もとらえねばならない。これ以上邪魔だてすることはゆるさぬ」

怒りにふるえる声で長野は言った。

「丹波路を行ったんでしょうか」

渡辺がたずねた。

「丹波口をでたなら、まず丹波路であろう」

長野は即答した。

「それにしても麝香猫めっ、かならずひっ捕えてやろう」

島田は歯ぎしりするように言った。

今までもさんざん麝香猫のために苦汁を飲まされた。長野、島田らにすれば恥をかかされてきた。その上今日の一事で彼等は怒り心頭に発した。

「草の根わけてもさがしだしたる」

そう言ったのは猿の文吉である。文吉は東西の町奉行所につかわれている目明しのなかで随一の評判をとっているものである。すばしっこくて、狡猾で、嗅覚が異常に発達している。残忍性もある。目明しにはもっともむいている男である。ほそい陰険な目をしている。今まで尊攘の志士がどれだけ文吉につかまったかしれなかった。志士からは蛇蝎のご

とく嫌われている。

渡辺も大河原もむろん腕っこきの与力、同心である。

「丹波路を追え！」

長野はきびしく命じた。

ほかの者たちもそのつもりである。

一行は早々に般若寺を後にした。

騎馬を先頭にして西へむかい、桂大橋をめざした。

桂川は上流の保津川からくだり、嵯峨、嵐山をぬけてくる急流で、大橋のあたりは川幅もひろい。下流の下鳥羽で鴨川、西高瀬川を合わせ、さらに下流淀のあたりで宇治川、木津川と合流し、淀川となる。したがって下鳥羽や淀のあたりは川が幾筋も合流して瀬をつくり、大雨で増水すると水があふれ、一帯がはてしない沼のようになってしまう。

桂大橋をわたると、すぐ右手が桂離宮である。

離宮のながくつづく竹垣ぞいに西へむかうと、川原、樫原の村がある。樫原は宿場になっており、丹波、山陰から京都をめざす者は樫原で宿泊し、翌日京都入りする。本陣は玉村屋である。

「今日の昼下り、大八車が三台ここをとおらなかったか」

文吉が本陣の近くで子守りをしている老人に聞いた。

「三台つづきの大八ならとおりましたよ。寝棺を乗せとりましたんで、ようおぼえとります」

老人はこたえた。

「それや、その車や」

文吉は陰険な目をかがやかせた。

「老ノ坂めざして行きはりました」

「老ノ坂は大八を引いては越えられんな」

地理にくわしい文吉らしく言った。

丹波道は、樫原をすぎると〈竹の道〉になる。道の左右に竹藪がつづき、どこまで行っても竹また竹の道である。竹藪のあいだをほそい道がつづいている。

「車をひいて行くのは無理どっしゃろ。老ノ坂ゆくなら、車を捨てなあきまへん」

「そうや、捨てならん」

文吉はその老人と二言三言話をかわした。

「一行が丹波道を行ったのは間違いありまへん。丹波めざして行ったんどすやろ」

文吉は島田に言った。

「山陰道から下関へでて、九州へむかうのか、それともべつの道をとってほかのところへむかったか」

島田がこたえた。

「ともかく車の行けるところまで、このまま行ってみようやないか」

渡辺が言うと、大河原はうなずいた。

それで一行は、さらに西へすすんだ。

一行がことさら道筋を気づかうのは、丹波道には間道、抜け道がおおいからである。たとえば、古記がしるすだけでも、

『西三条口通りを西へ上嵯峨村へでる。愛宕一の鳥居より水尾村へかかり、丹波の国保津村へでる』

『二条通りより西へ鳴滝村へでて、高雄道へかかり、中島村をとおり、丹波の国田尻村へでる』

『洛西松尾の南から山路をへて、丹波へでる道あり』

『広沢の池の西北に道あり。山路をのぼりて絶頂を京見峠という。これ丹波へかよう道なり』

といった具合であり、そのほかにもいくつかある。

左右から竹が生いしげる道を、一行はすすんだ。竹の枝が天上にひろがり、空が見えぬところもある。竹藪がはてしなくつづき、夕方のような暗さである。

竹藪をぬけてしばらく行くと中山村である。

このころから夕闇がおとずれた。

しかし誰も何も言わず、西へ西へとすすんだ。

一行は提灯の用意をしていない。丹波道は本当に暗くなってきた。

塚原村というところで、大河原と文吉が庄屋の家をたずねて、提灯と松明を都合してきた。

提灯と松明で足元を照らし、前方を見ながら一行はすすんだ。それでも一行がさがしもとめる麝香猫一味と月照、西郷らの姿は見えなかった。もう反対側からやってくる人の姿もなくなった。

丹波道はここらあたりまでくると、昼間でもそう人通りはおおくない。

寒さも夜になると、身にこたえてくる。

しかも雨が降ってきた。まだ初冬とはいえ、夜の雨の冷たさはたとえようもない。

けれども一行中、寒さを口にする者はいなかった。雨に濡れながらみな黙々とあるいた。

雨は体をとおして、肌にまで達した。昼間なら人家をたずねて笠や蓑を調達することもできるが、この時刻となるともう無理だ。しかもここらあたりは人家も稀である。

さがせども麝香猫一味と月照、西郷らの影も形も見つけることはできない。

山が近くなり、しだいに坂道になってきた。老ノ坂にかかってきたのだ。

老ノ坂は通称であり、本当の名は大枝山である。それがなまって老ノ坂になった。山城

と丹波両国にまたがる峻峰であり、天正十年（一五八二）丹波亀山の領主明智光秀は中国への出陣を命じられながら、輩下の軍勢をひきい老ノ坂を駆けくだって大挙京都に乱入し、本能寺を攻めて、信長をころした。

雨はしだいにつよくなってきた。前方に、一行をはばむように峻峰が立ちふさがっている。

一方、このころ――

老ノ坂とはまるで方向ちがいの、向日村から京都の南、淀へむかう七つの人影があった。七人とも笠も蓑も着けており、手甲、脚絆、甲掛け、草鞋のきびしい旅仕度に身をかためている。

提灯の明りに照らされた顔は、月照、西郷、有村の三人と、麝香猫、半兵衛、深草、長五郎の四人である。大八車をひいていたほかの二人は、車を捨てたときに京都へもどった。あまりの大人数では、田舎道でも人の目をそばだてるからだ。その二人はいずれも麝香猫の手下である。

彼等は、夕刻になる以前に、丹波道の中山を通りすぎ、塚原の先で大八車を街道からすこしそれた竹藪の中に捨て、そこから中山までひきかえし、中山向日道をとったのである。この道はいわば丹波道から向日、長岡、淀、山崎方面へぬける間道である。いったん塚原の先まで行ったのは、中山向日道をとったとおもわせないためである。彼等も慎重な上にも慎重な行動をとった。

地理にくわしい長五郎が先頭を行った。それから桂川流域の地理につうじている半兵衛がつづいた。麝香猫は月照、西郷、有村を警固しながら彼等にぴたりとついた。

「ずいぶん遠まわりをしたようですが、これがいちばん安全な道です」

麝香猫は大柄な男西郷へ言った。

「そこもとにあつくお礼ば言わせてもらいもす。麝香猫どのの手助けがなければ、とてもここまでくることはできなかったですたい」

西郷は素直によろこびをあらわした。

月照は疲れと寒さで口をひらくのも億劫なようだ。いかに尊皇の情熱に燃えた和尚であっても、薩摩屋敷での潜伏の暮しにはじまり、長年住みなれた京都からの脱出、命の危機、寒さは相当身にこたえるものであった。

「淀につけば、半兵衛が船を借りて淀川をくだり、大坂へおはこびいたします。この男は以前、桂川、淀川で船頭をいたしておりましたから、腕には信頼がもてます」

麝香猫は西郷らを安心させるために言った。

「かさねがさねお世話になりもす。京都、江戸における幕府のこのたびの取り締り、大獄は無茶苦茶のきわみでござりもす。尊攘のためにもこれに屈してはならんとおもいますた

い。力のかぎり幕府の無法に抗するためにも、おいは和尚の身柄ばまもりとおし、今後、尊攘の運動に力つくしたいとおもっちょりもす」

西郷は麝香猫の尽力にたいして真摯に礼を言った。

「麝香猫一味も心底、尊攘に身をささげる決意の者ばかりです。そのために危険のせまっている志士を京から脱出させることが、当面の仕事だとおもっております。和尚さまも西郷さまも無事京を脱出なされ、あらためて尊攘のためにおはたらきくださることをねがっております」

「そのつもりです。幕府のこげん暴政がそういつまでも長つづきするとはおもえんですたい。大老は自分で自身を追いつめちょるようなもんでごわそう。長い目で見れば、幕府はこれによって命ばちぢめるも同然ですたい」

「わたしも同感です。幕府はこの暴政に失敗し、威信の低下をまねくでございましょう」

「それを待つばかりでなく、おいたちは尊攘の力をあつめ、幕府にぶつかっていかねばなりませんたい。大老も長野もたおす必要があるとおもいもす」

「井伊と長野をたおすことができれば、幕府はがたがたになるでしょう」

「井伊の権力は一見絶大のように見えもす。けれども一度ヒビが入り、井伊が倒れれば、幕府は立ちなおることはむつかしくなりもそう」

「それには尊攘の運動を水戸藩、薩摩藩ばかりでなく、ほかへもひろげていくことが大切です。麝香猫はそのために役立つことならいたすつもりです」

麝香猫と西郷は雨の夜道をあるきながら、かたりつづけた。

雨はやまない。かえってしだいにつよくなってきた。寒気も今まで以上にきびしくなった。

その上、道もしだいにぬかるんできた。道は小畑川にそっている。京都は南へくだればくだるほど、道がぬかるんでくる。淀の湿地帯に近づくからである。

やがて今里村をとおりすぎた。

ときどき背後に注意したが、追跡をかけてくる者はいないようだ。

麝香猫一味のいちばんの心配はそれであった。一味と西郷らが淀につく前に捕り方たちに追いつかれると、ことは面倒になる。半兵衛にしても船を用意するには、いくらかの時間もかかるだろう。

丹波口をうまく抜けでることができ、丹波道を迂回して、中山向日道を抜けてくる作戦は成功だったが、相手の長野がそう簡単にだしぬかれてしりぞくはずはなかった。長野はそんな生やさしい敵ではない。いつか気づいて追跡してくる。そういうおもいが一味の者たちにはあった。

なんと言っても長野は大老の懐刀であり、このたびの志士大弾圧をはじめた当事者である。頭もきれれば、腕もたつ。行動力も申し分ない。

その長野が島田らの輩下をしたがえてひたひたと中山向日道をせまってくるような恐れを一味の者はみないだいている。いつくるか、相手の人数も心配である。十人やそこらの敵ならばたおすことも、だしぬいて逃げることもできようが、一隊をひきいて大勢でせまってくれば、撃退することはなかなか困難だ。

「長野は奸物じゃ。いずれにしろ始末せならんたい」

それまで沈黙してあるいてきた有村俊斎がこのとき言った。

「長野は奸物でも、井伊にくらべたら小物たい」

西郷が応じた。

「けれどもその奸物が京において権力ばふるっちょる。長野がいるかぎり、京の騒ぎはしずまらん」

「今はおいたちが追われるときじゃ。逃げることをかんがえるのが第一たい」

「いったん京を逃げても、かならずもどってきちゃる。そして長野の首ばあげる」

有村三兄弟といえば血気さかんで知られている。長兄俊斎はなかでも一本気だと言われている。

実際に京都の志士たちのなかでは、長野暗殺の手くばりがおこなわれた。けれどもそれが実現しなかったのは、長野の立場が圧倒的に有利で、志士たちの立場がよわかったからである。

「有馬さあは大老の首ば獲る言うちょった。水戸藩の志士たちも同調しとる。作戦も着々はこんじょる」

有村は意気軒昂である。

西郷と、有馬新七や水戸藩士たちのあいだで大老暗殺の密謀がおこなわれていることは知っている。しかし大老暗殺という未曾有のくわだてがそう簡単になるものではないと西郷はおもっていた。もしこれが実現すれば、幕府の権威は失墜し、屋台骨が揺らぐことはたしかである。

「あっ」

そのとき後ろをふりかえった麝香猫一味の一人が声をあげた。

「提灯の明りが遠くから追ってくる。追手がせまってきた」

深草の声で一同はみな後ろをふりかえった。

たしかに明りは見えた。

一同は身がまえた。逃げるか、待ちかまえて敵をむかえ討つしかないのだ。

「あれは提灯の明りやないやろう。あのあたりにはよく鬼火が燃えるという噂があった」

半兵衛がそう言った。

雨や雨あがりのときなどには、よく墓地などで鬼火が燃える。鬼火は狐火とも言われる。人魂や提灯の明りとよくまちがえられることがある。

鬼火はぐんぐんこちらに近づいてくるように見える。
しばらくそれがつづいた。
みなは後ろをふりかえりながら、夜道をすすんだ。
ところが、いつしか鬼火は消えていた。
「鬼火にしては、妙にはっきりした明りやったな」
長五郎が気がかりな様子で言った。
「もう、のうなったんやからええやないか。あのくらいはっきりした鬼火かてあることはある」
半兵衛がこたえた。
やがて一行は、馬場村についた。
しかし雨は止まない。笠や蓑をつけているとはいえ、雨は顔や首筋にかかり、提灯を持つ手はびしょ濡れである。甲掛けと草鞋をとおして膝から下も、水につかったようだ。
「和尚さま、大丈夫でござりますか」
深草は月照の身を気づかった。
「大丈夫、わしは大丈夫だが、みなには大層迷惑をかける」
月照はつとめて元気をだしてこたえた。自分のために西郷や有村に迷惑をかけ、さらに麝香猫一味をわずらわせていることを気にかけているのだ。

「月照どのに無事京を脱出してもらいたか。和尚は何よりもおいたち尊攘の精神的支柱たい。途中でたおれられてはこまるんじゃ」
西郷が言った。
尊攘運動に身を挺して奔走する者は各藩の志士、公家、学者、それを支援する商人など数は割合おおいが、仏門の和尚となるとたぐい稀である。しかも清水寺のような名刹の和尚が熱情につきうごかされて国事に没頭しているのは異例である。月照に感化されて運動にくわわる志士もいる。それだけに幕府では、どうしても月照をこのままにはしておけぬ。
「みなの気持はまことにうれしい。そのためにもわしはぜひとも京を逃れでて、今後の一生を尊攘のためにささげたい」
月照が力づよく言った。
「和尚どの、わたしたちがかならず無事に大坂までおつれいたします。ご安心なされませ」
麝香猫がたのもしく言った。
「今、尊攘が危機にさらされておる。みなが頑張らねば、尊攘の灯が消えてしまう恐れがある。時代が十年前にもどってしまう。この灯を消さぬためにも、わしも生き抜く」
月照は体はだいぶ疲労しているはずだが、さすがに気力はおとろえていなかった。危難に遭遇して、逆に気力がみなぎっているようだ。

「麝香猫どの、感謝にたえなか。大坂まで行けば、後はおいたちが月照どのを間違いなく薩摩におつれ申す。今後、京にのこっておる志士のためにも麝香猫どののお力ばお借りいたしたか。よろしくおねがい申しますたい」

西郷が麝香猫に声をかけた。

「ご安心ください、西郷どの。麝香猫は助力を惜しまない。尊攘のために獅子奮迅のはたらきをいたすつもりです」

「麝香猫どの、一つだけおたずねいたしてよろしいか」

そのとき有村が言った。

「何でござろう」

「麝香猫どのの正体は誰にも知られておらぬ。幕府が躍起になってもわからぬ。さしつかえなくばおいたちに明かしていただけまいか」

有村はこのとき真にせまる問いを発した。

そのとたん、

「有村、やめんか。麝香猫どのは正体ば明かせぬからこそ、仮の名でとおしておられる。あるいはそれは世間がつけた仮の名かもしれぬが、それでよかではなか。一人に知られれば、二人、三人に知られ、やがて正体のばれることになるかもしれんたい」

麝香猫がこたえる前に、西郷が有村を制した。

「左様でごわした。おいの不明でごわした。今のことは聞かなかったことにしてもらいたか」

有村はただちに自分の不明を恥じた。

「有村さん、まことに申しわけない。わたしの正体は誰にも知られたくないのです。はやく正体を明かせる日がくることをねがっております」

「いつかそういう日がくるでしょう。麝香猫どの、それまで頑張っていただきたか」

麝香猫と有村は言った。

道はますますぬかってきた。小畑川の下流になってきたからだ。場所によっては踝の上まで水につかるところもあった。

「どのあたりだ」

麝香猫が聞いた。

「久貝村をすぎたところどす」

半兵衛がこたえた。

「では暁より前に淀につくな」

「十分つけるでしょう」

「早朝いちばんで淀川くだりができるな」

「邪魔が入らなければ、さよな段取りになるでしょう」

「うまくいけばいい」

麝香猫はそう言った。

雨はまだ降りやまぬ。これだけ降っただけでも淀川は幾筋もの川を合流してながれるので、増水するのはやむを得ない。

淀川下り

大体の予定どおり、一行は暁よりすこし前に淀についた。

淀は淀川航路の水駅である。かつて太閤秀吉の愛妾だったお茶々がこの地の城に住んでいたので、淀君と呼ばれていた。その城に水をおくるために淀川に二十もの釣瓶をもった大きな水車がつくられ、終日ざぶりざぶりと音をたててまわっていた。この水車は淀の川船風俗を代表するものであり、今もとまることなくうごいている。

淀川の船便は京都伏見から大坂天満橋をむすぶ十里十三町である。のぼりは一日ないし一夜、くだりは半日か半夜である。つまり一日二回、昼船と夜船がでる。

「増水しちょるな」

川面を見るなり、有村が言った。

雨はまだ降りつづいている。淀川本流、桂川、木津川、そのほかの諸川が合流する淀のあたりは河川が増水してあふれ、洲は湖のようになり、それでもあふれた水が附近一面をおおっている。

「雨がやまんことには、三十石船はでんやろう」

淀川をのぼりくだりするのは公許の三十石船である。しかし川が増水すると航行をとりやめることになる。川船の客は川留めがあけるのを待つか陸路を行くしかない。

一行はその船便はつかえない。どう細工したところで目だってしまう。それに追われた場合に、逃げ場がない。

「ほな、茶船か上荷船を見つけてきますさかい」

淀の船着場の近くから、半兵衛は一人はなれて行った。

淀川を運航するのは三十石船のほかは茶船と上荷船である。両方とも運上金を免ぜられた荷船である。

半兵衛は船頭をやっていたころの顔があり、淀にも知り合いの川船問屋がある。そこから船を借用しようというのだ。

ほかの一行は、やはり半兵衛の知り合いの、一見しもた屋ふうの旅籠に草鞋をぬいで、濡れた衣類をかわいたものに着換え、囲炉裏の前で暖をとって半兵衛のかえりを待った。

もちろんそのあいだに腹ごしらえもおこなった。

腹が満ち、体があたたまると、眠気が一気に押しよせ、囲炉裏のそばでごろ寝をする者もいた。

夜明けがおとずれたころ、半兵衛はもどってきた。

「茶船を手配することができました」

半兵衛はほっとした顔を見せて言った。

「せやけど今日は船をだせんどすやろ。三十石船もでんかもしれまへん」

半兵衛は船問屋で聞いてきたことをはなした。茶船は十石船である。七人をはこぶには丁度よい大きさだが、増水した淀川に乗りだすのは危険である。

「一日は待たぬと駄目か」

麝香猫が言った。

「はやくて一日、長びけば二日かかりますやろ」

半兵衛の返事はもっともである。

「待つのは仕方がないが、追手がくるかどうかや」

長五郎が言った。

一同は今のところ追手の心配はないと見ているが、長野のことであるから、探索に遺漏のあるはずがない。島田や渡辺、大河原、文吉らはほとんど地元であるから、このあたりに鼻がきかぬわけがない。いったん丹波道を追跡しつづけて、そこをとおった形跡がないとわかれば、当然べつの道筋をかんがえる。そのとき中山向日道から淀や山崎という道筋は浮かびあがってきて不思議はない。

「追手がくる恐れはある。必死で探索しとるはずや」

深草が言った。

「そや、かならずくる」
長五郎も言った。
「その前に船をださんとならん。雨次第や」
半兵衛は腕をくんだ。
陸路にくらべれば船は至便であるし、早いが、どうしても雨風に左右される弱点がある。その上雨や風は予想しがたい。こういう場合、まことに厄介な相手だ。
「ともかく、雨がやむまで待つしかなか」
西郷はもう肚をくくっている。ここまできてじたばたしても仕方ないのだ。
西郷がそのように落着いた様子なので、月照も有村もこころに余裕が生れたようである。かくべつあわてる様子はなかった。
「一日でも二日でも待とうやないか」
そう言って有村は囲炉裏のかたわらにごろりと横になった。
そしてしばらくすると、おおきな鼾をかきはじめた。昨日から今朝にかけて全然ねむっていないうえに、疲れがたまっていたのだ。
「和尚どの、和尚どのにもべつの部屋ばとってあるから、ぐっすりとやすんでくださりまっせ」
月照の疲労も極に達しているはずである。今後も危険と背中合わせの旅がつづくことに

なる。やすめるうちにやすんでおいてほしかった。
「遠慮なく、やすませてもらおう」
そう言って、月照は二階にとった部屋へむかった。
ほかの者たちもそれぞれくつろいだ恰好で体をやすめた。
しかしこうしたときでも、麝香猫一味のうちで誰か一人はかならずおきていて、見張りの役目をやっていた。
西郷もねむった。疲れているので、すぐねむりに落ちた。
西郷はねむりながら夢を見ていた。
暗いところにぼんやりと明りが見える。
昨夜、今里と馬場村のあいだで見た鬼火のような明りだ。
西郷は目をこらした。火の正体を見きわめようとしたのだ。
闇のうえに雨が降っていて、はじめはよく見えなかった。しかしじっと見ているうちに、しだいに火の正体が見えてきた。
それは鬼火ではなかった。やはり提灯の明りだった。提灯の明りが闇と雨ににじんでぼうっとかすんで見えたのだ。しかも提灯はすくなくとも十数個はある。追跡者にまちがいなかった。
（長野だ！）

そうおもって西郷は目がさめた。
「西郷さん、どういたしました。今声をだされましたが」
囲炉裏にすわっている麝香猫がたずねた。
西郷はむっくりとおきあがった。
「追跡者の夢ば見ちょりもした」
「昨夜の鬼火ですか」
麝香猫は言いあてた。
「あれは鬼火ではなかとです。追跡者の提灯でごわす」
「そうですか、やはり提灯でしたか。わたしもそのような気がしました。追手が近くにせまっているのですね」
麝香猫は存外素直に西郷の夢を信じたものだ。
「そろそろ淀につくころじゃなかとですか」
「余裕はあまりない。ほかへうつる時間はないな」
麝香猫の表情の中にいくらかの迷いが浮かんだ。
そのとき半兵衛が囲炉裏端からむっくり体をおこした。
「この旅籠は看板も暖簾もあげておりまへん。場所も水駅のはずれですさかい、大丈夫おます。ほかにうつったほうがはるかに危のうございます」

半兵衛が言った。
「半兵衛の言うのはもっともだ。ここでじっとしていたほうがいいかもしれぬ」
麝香猫はこたえた。今からうごくとしても、すぐにはよい場所もないだろうとかんがえられた。
「茶船はこの近くの桟橋に用意しとります。いつでもだすことはできます」
「そういうことになるかもしれぬ。そのこころづもりをしておいてくれ」
「川は増水しとりますが、だしてだせんことはありまへん」
半兵衛は船を漕ぐ腕には自信がある。しかし大切な人をあずかっている立場としては、できるだけ川の水が落着くまで船をだしたくなかったのだ。
「決断は半兵衛にまかせよう」
麝香猫はあっさりと部下にゆだねた。川と船に関するかぎり、自分の判断よりも半兵衛の判断のほうがまさるからだ。
「そうさせてもらいまひょ」
月照、西郷、有村の安全に関する鍵も半兵衛の手ににぎられた。
「運を天にまかすちゅうこともある。世の中はそげんもんじゃ。それにおいの見た夢、正夢とはかぎらんたい」
西郷もそこはあっさりとしたものだった。どこかで自分の運を天にまかすような放胆さ

がなければ、この時代に尊攘運動などをつづけてはいかれぬ。それは西郷にかぎらず、ほかの志士たちも同様であった。みな命を投げだしている。京都にひそんでいて幕吏に召し捕られるのも運、脱出して逃げ切るのも運である。

いったんそうときまると、彼等は落着きはらったものだった。西郷はふたたび巨軀を横たえると、また眠りにおちいった。

雨はまだつづいている。

半刻ばかりたったころ、川の様子を見に出ていた旅籠の者がもどってきた。

「今日は船はでんそうや。雨の様子が明日もあぶのうおます」

旅籠の者は主人にそうつげていた。

一同にとって、状況はわるくなってきた。三十石船がでないということは、十石積みの茶船はもっと危ないということである。いかに半兵衛の腕をもってしてもだ。

麝香猫も西郷も有村も危険をすぐ前にして、一刻ばかりねむりこんだ。

これより一刻以上前——

淀の下流山崎の水駅に、十数人の武士の一団が到着した。一団はみな笠と蓑と手甲、脚絆の雨仕度をしており、けわしい眸であたりを探索している様子であった。

長野、島田らの一行である。

一行は昨夜、馬場村の先の二股で西国街道に入り、山崎にむかったのだった。その二股は淀にいたる道と、西国街道との岐れであった。麝香猫一行は前者をとり、長野一行は後者をとった。

長野一行も早朝、山崎に到着し、やすむ暇もなく、水駅附近の探索をはじめた。

山崎も淀川の大きな水駅で、水上交通の要衝である。したがって駅周辺には旅籠や木賃宿、食べ物屋などがたくさん軒をならべている。夜でる船、夜つく船もあるので、店々は大抵夜通しやっている。

「一軒のこらず、シラミ潰しに店をしらべよ」

長野の命令で一行は三隊にわかれて、山崎にある店をぜんぶ探索しはじめた。

一行は前日、丹波道の老ノ坂の手前からひきかえした文吉が塚原の手前で竹藪の中にかくされた三台の大八車と寝棺を発見したことによって、全員また道をひきかえすことになった。この地点で麝香猫一行が車を捨てたとすると、その後の道筋は中山向日道から大坂とほぼ推定することができる。

それで一行は中山向日道を追いはじめた。雨と闇のなかを追跡しつづけ、神足村というところで分岐点にぶつかった。

（淀と山崎……）

雨が降っているので、足跡はのこっていなかった。

いずれの道をとるも、可能性は五分五分であった。淀へむかうも、山崎へむかうも距離はほとんどおなじである。道の状態もおなじくらいだ。

ちがいは、淀が上流で、山崎が下流だということである。山崎のほうが淀よりも大坂に近い。

それで長野は山崎のほうに賭けた。逃走者の心理として、すこしでもよりはやく大坂へ逃げたいという心理がはたらくだろうと読んだのであった。

追手を二つにわけることもかんがえられたが、半分の人数でもし麝香猫一行に追いついたとしても、反撃された場合に勝ちみがなかった。

一行は天王山を右手にして、山崎に到着し、探索にかかった。

天王山といえば、天正の昔、信長を急襲してほろぼした明智光秀が、中国陣から急遽大返ししてきた秀吉と対陣し、決戦にやぶれたところである。長野の脳裡には光秀、秀吉のことも一瞬浮かんだ。

が、すぐにそれは消えて、かわって山崎の船着場から船に乗って大坂をめざそうとする麝香猫一味のことが頭に浮かんだ。

長野も陣頭にたって、探索をつづけた。

しかし、つぎつぎにもたらされる報告によいものはなかった。いずれも麝香猫一味、月照一行らしき者たちを見ていないという報せばかりである。

「どこにまぎれこんでおるやもしれぬ。一軒のこらずしらべてみよ」

長野はきびしく命じた。

しかし、その後もよい報告はなかった。夜船はだいぶ前にでた後であるから、それに乗ったということはかんがえられぬ。のぼりの船に乗るはずもない。

長野のこころのうちに、いやが上にも焦りがめばえてきた。ここまで追ってきて月照、西郷らを脱出させ、麝香猫をとり逃したとなると、長野の責任もおもい。それに反して麝香猫の世間の人気はあがるだろう。これで麝香猫は完全に京都の英雄になってしまう。

長野は京都における自分の不人気を知っている。いくら長野が京都で絶大な権力をふるおうとも、京都の人心を懾伏させることはできない。権力をふるえばふるうほど憎しみを買うこともわかっていた。

長野は志士取り締りという未曾有の圧政をおこないながら、実は自分自身が追いつめられていくような錯覚をおぼえていた。

長野は自分から旅籠や食べ物屋にふみこんで探索をおこなった。けれども彼等の影も形もない。

長野の胸に失望がきざした。

（山崎ではないかもしれぬ）

そんなおもいがおこりはじめた。そして反対に一味への憎悪がはげしく燃えだした。

「山崎の水駅はことごとく探索いたしましたが、一味や月照らもおりません。たち寄った形跡も見えません」

渡辺金三郎と大河原十蔵が報告にきた。

「ならば、淀だ。淀へむかったに間違いない」

長野は即答した。

島田もうなずいた。

「探索をやめて、淀へむかう！」

長野は躊躇なく命じた。

「一刻もはやく淀へ！」

長野はそう言うと、もう馬に乗っていた。

馬に鞭をあてた。

馬は沿岸の道を一気にはしりだした。

おくれじと島田らも馬で疾駆した。

徒士の者は馬についてはしりだした。みな疲れてはいるが、そんなことは言ってはおれぬ。馬も人も淀をめがけて懸命に駆けた。

淀川は増水しており、濁流が音をたてている。

船影は見えぬ。淀川の各支流の上流にもみな雨が降ったために、このような増水をまね

いた。ひくい堤防を川の水がこえて、河原が沼のようになっているところもあった。

だから、迂回して行かなければならない場所が随所にある。長野、島田、渡辺らは騎馬であるから大抵の水中でも平気だが、徒士の者たちは大変な難儀だ。

長野も島田もこころは逸っていた。すこしでもはやく淀に着かねば一味と月照らに逃げられてしまう恐れがあった。今ならばまだ一味をとらえることができると読んでいた。

時間とのぎりぎりの競争である。できるかぎりはやく淀に着かなければならない。救いは淀川の増水で船がでられないことである。

しかしあまりながく川留めがつづけば、一味と月照らは徒歩で大坂へむかわないともかぎらない。そうなれば長野らも大坂まで追って行かねばならぬ。できれば京都圏内で彼等をつかまえたいところである。圏外へだしてしまえば、探索は難儀をきわめる。

馬は昨日からの追跡行でだいぶ疲れが見えはじめた。替馬の用意をしなければならなかった。

（月照、西郷逃がすまじ！　麝香猫め、かならず捕えてくれよう）

寒さは肌身にこたえるが、長野のこころのうちは火のように燃えている。どんな寒さ、疲れにもうち克つだけの執念の火が熱気を高めていた。

いくつもの障害をこえて、一行は淀に近づいた。

淀の駅は文字どおり水の中にあった。

駅の中心は、のぼりくだりの船着場である。待合所もあるが、今はまったく人影も見えぬ。

（はたして、まだ一味はここにいるか？）

長野の胸の中は半信半疑である。

濁流が盛りあがるようにながれており、水は茶色にかわっている。

淀の町は駅を中心にしてひろがっている。流れにそって長くのびていた。

旅籠（はたご）や木賃宿（きちんやど）、食べ物屋などが水につからないのは、家々がみな土盛りをし、石をつみ、半間も基礎を高くして建っているからである。この地で川の出水が頻繁におこることを物語っている。そうした土盛り、石垣は川に近いほど高い。

水はでているが、まだ土盛りの高さの半分にも達していない。出水といっても町中がさわぎたつほどではないのだ。

「改めをはじめよ。旅籠、木賃宿だけでなく、人家という人家をことごとく改めよ」

長野は輩下に命じた。

長野には、一味と月照らはかならず淀にひそんでいるという確信があった。

「人家がおわったら、寺や神社も改めよ。淀以外に一味のいるところはないはずだ」

島田も命令した。

こうしてまたシラミ潰（つぶ）しの探索が開始された。山崎のときと同様、三隊にわかれて、一

軒一軒丁寧に改めがおこなわれていった。

屋根裏部屋

麝香猫一味と月照、西郷、有村がひそむしもた屋ふうの旅籠は、長年やっていた主人が数年前のはやり病いで死んでから、未亡人が本格的な商売から手をひき、店賃や地代だけで暮しをたてていくようになった。しかし家族や人手がのこっていることから、古くからの顧客や知り合いの客がやってくると気さくに泊めてやっている。

半兵衛はずっと以前からの馴染であった。

しかし、このしもた屋ふう旅籠が長野らの探索、改めをまぬがれる理由はなにもなかった。探索、改めをうけることは確実であった。

「お客さま、今お上の探索隊が淀にまいっております。そのうち、ここにもくるどっしゃろ」

五十年輩の上品そうな未亡人がやってきて、半兵衛と麝香猫につげた。

「さよか、それやったら、となりの二階にうつらせてもらおか」

半兵衛はかねてこういう場合をかんがえていたとみえ、思案する間もなく言った。

この屋敷は旅籠につかわれていたので、階下も二階もある。けれどもとなりは別棟で、

紅殻格子の階下と、二階は鎧格子の屋根裏部屋で、納戸や物置につかわれている。半兵衛はその屋根裏部屋のことを言ったのだ。

七人はとなりの屋根裏部屋にうつった。いちばん高いところでも、背の高い麝香猫は背をちぢめなければあるけない。障子戸のむこうに鎧格子が取りつけられていて、外の様子をうかがうことができる。鎧格子は外敵をふせぐ防具である。

屋根裏部屋には箪笥や長持、長櫃、蒲団などがしまわれているが、七人が入る余裕は楽にあった。

しかし長野らの探索隊がここにきた場合、屋根裏部屋まで改めないともかぎらない。その可能性は十分ある。

「そのときの備えは？」

部屋の中を見まわしながら深草が聞いた。

「鎧格子が三本内側からはずせるようになってますさかい、いざいうときには屋根へ逃げることができま」

半兵衛はこたえた。鎧格子はもともと防具であるから、そういう配慮がしてあるのだ。ここの鎧格子は表と裏の二ヶ所についている。表のほうは屋根から通りへつうじ、裏のほうは庭にでられる。古い家づくりにはそれくらいの配慮がしてあるのだ。

半兵衛が表の鎧格子の前にたち、外を見張った。

半刻あまりたったころ、
「母屋の旅籠に数人やってきた」
半兵衛がひくい声で言った。半兵衛の立っているところからは鎧格子の隙間をとおして母屋の旅籠の前部が見える。
さすがにみなは緊張した顔を見せ、様子をうかがった。
麝香猫も半兵衛のそばにやってきて、母屋のほうを注意した。
蓑笠姿で先頭にたっているのは中肉中背の男で、いかにも高慢な雰囲気をただよわせている。
「長野主膳だな」
麝香猫は言った。
「その横にいるのは、猿の文吉どす」
半兵衛は強敵をむかえて、いやな感じをおぼえたのだ。長野や文吉が母屋を改めて、別棟を改めぬわけがない。執拗さにかけては右にでる者のない二人である。始末のわるいのがやってきた。
連中は旅籠の中へ入ってゆき、改めをおこなっているようだ。
しばらくたってから、連中がでてきた。
文吉がこちらの別棟にぎろっと目をむけた。

そして文吉は旅籠の未亡人を呼び、別棟について問いただしているようだった。
半兵衛が合図をし、長五郎に裏側の格子を三本はずさせた。
未亡人は、別棟は今はほとんど使用していないというふうなことを言っている様子だ。
文吉はうなずいているが、念のためにこちらに足をはこんできた。大河原十蔵らしき者もやってきた。
（はやく！）
と半兵衛は手で合図をおくった。
有村、月照、麝香猫、深草、長五郎の順で鎧格子のあいだを抜けて屋根におりて行った。が、巨軀の西郷のところで手間どった。両肩がつっかえて、なかなかでられなかった。
はやくも文吉が別棟の戸口の前に立った。
半兵衛が内側から西郷の体を押し、外から長五郎がひっぱって、ようやく西郷をだした。
そのときはすでに麝香猫がほかの者たちを屋根から裏庭へおろしていった。麝香猫の手順はまことによく、西郷も裏庭へおりた。
半兵衛は鎧格子を内側から元にもどさなければならないために、屋根裏部屋にのこらなければならなかった。
すばやく鎧格子を三本はめこんで、半兵衛はいちばん奥にある長持のフタを空け、その中に身をひそめ、フタをしめた。

やがて階段をのぼってくる足音が聞えた。あがってきたのは二、三人の様子である。

長持に気づいたとしても、開けられることはまずあるまいと半兵衛はおもった。彼等は一人や二人を探索しているのではないからだ。

しかし、万一ということはある。ふとした気まぐれで、屋根裏部屋のいちばん奥にある長持の中を改めるかもしれぬ。

見つかったら逃げ場はない。

半兵衛は長持の中で息をひそめながら息のつまるおもいをつづけた。

「納戸と物置きだな」

そういう声が聞えた。

文吉の声だと半兵衛はおもった。

「旅籠をやっていたころの道具がしまってある」

べつの男の声がした。

「誰もかくれておらんな」

文吉のその声を聞いても、まだ半兵衛は安心できなかった。文吉なら、とつぜん嗅覚(きゅうかく)がはたらいて、長持を開けにくるかもしれない。

そのときは万事休すだ。せめて月照一行と麝香猫一味のために精いっぱいの時間かせぎをしようと肚(はら)にきめた。

一人の男が屋根裏部屋の奥までやってきた。

長持が目に入ったはずだ。

半兵衛は長持の中で目をつぶっていた。ひそかに懐中にのんでいた匕首(あいくち)をぬいた。見つかったときは精いっぱい暴れまわって、この場にいる者をやっつけてやろうとかんがえていた。

半兵衛にとっては長い時間がたった。が、本当はわずかな時間だったのだろう。

「つぎへまわれ」

ふたたび長野らしき者の命ずる声がした。

半兵衛はほっとしたが、まだ油断はできない。

男たちが階段をおりて行ってから、半兵衛はようやく長持から外へでた。死の世界からこの世に生還したおもいだった。

表の鎧格子から見ていると、三人の男が別棟からでてきた。そのうちの二人は長野と文吉のようだ。

ほかの男たちが母屋の前で待っていた。

「つぎへ！」

長野らしき人物が命じた。

月照らや麝香猫一味も無事だったとわかった。

長野らは反対側のとなりの雑貨屋へ改めに行った。
半兵衛は十分に様子を見きわめてから、屋根裏部屋をおりて行った。
母屋の裏庭へ行くと、一味と月照らが心配そうに半兵衛を待っていた。
「あぶないところやった。半兵衛、よう生きのびたな」
そう言ったのは深草である。
「匕首抜いてひと暴れするつもりやったが、残念ながら機会がなかった」
半兵衛はこたえた。
「まだ安心はできぬ。もどってくるかもしれんぞ」
麝香猫は慎重を期して言ったが、長野一行はもうもどってこなかった。
長五郎は天をあおいだ。
「また天候待ちや。雨があがらんことには身うごきもできん」
深草はうんざりしたように言った。一難去ったが、また一難おこってきそうな気配であった。
「夜船もでそうにないな。茶船もだせんやろ」
深草が言った。
麝香猫は長五郎と深草の言葉を聞きながらにんまりとした。三十石船が船止めになるなら茶船もだせないというのは常識的なかんがえである。

半兵衛が麝香猫のかすかな笑いを見てとった。半兵衛にはその意中が読めたようだ。
「今夜雨がやんだら、茶船をだせぬことはないだろう」
麝香猫は言った。
「無理をするなら、だせんこともあらしまへん。乗合船やないんどすから」
「ここは一番、無理をするときではないか。人間一生のうちには、何度か危険をおかすときはあるものだ」
「そうどす。追いつめられたら、やらなあきまへん」
半兵衛は二つ返事で応じた。
「大坂まで行けたら、逃げる手立はいくらもある。薩摩までの船便にもこと欠かぬ」
「左様どす。はようここから逃げだすことどす」
「半兵衛の腕にまかせた。昔の腕はまだくさっちゃいまい」
「やらしてもらいまひょ。危険は覚悟してくださいませ」
半兵衛は自分の腕を買ってくれたことがうれしかったのだ。一度身についた腕であるから死ぬまでわすれることはないという自信があった。
「半兵衛、命の賭けどころだぞ」
半兵衛はそう言ってもらったことがうれしかった。麝香猫一味にくわわったときから、命はあずけてあったのだ。

一味はふたたび別棟の屋根裏部屋にうつった。
そしてながい時間を待った。
夕方ごろ、屋根をうっていた雨音がやんだ。
「雨があがったようや」
深草が言った。
「淀川もすこしはおとなしくなるやろう」
半兵衛はうなずいて言った。男が本気で覚悟をすえたら、おのずから運もツキもまわってくるものだとおもった。
「出発は？」
有村が聞いた。
「四つを過ぎるまで待ったほうがええやろう」
四つといえばほぼ午後十時だ。まだ淀川は水嵩を増し、流れもはやいが、雨中で船をあやつるのと、雨があがってから漕ぐのとはだいぶちがう。まして夜間であるから、危険は随所にある。
相手の追跡も覚悟しなければならぬ。
半兵衛は下準備があるからと言ってでて行った。
もどってきたのは、宵に入ってからだ。下準備はととのったようだ。

雨のあと、月がでた。星もでている。夕方までの雨が信じられないくらいだ。
初冬の河原に冬鳥の鳴き声が聞える。雨のあいだ餌にありつけなかったので、あがってから河原にでてきて餌をあさっているのだ。
四つころ、一同は旅装束に身をかためて、別棟をひそかにでた。
ところが、それよりすこしはやい時刻に、河原にあらわれた数人の影が月明りにうつった。
月明りの中の一行は河原をすこしさかのぼって、堤防から桟橋へおりて行った。ちいさな桟橋はこのあたりにいくつもあった。
桟橋には何艘かの船がつないである。
一行はそのうちの一艘に乗りこんだ。これも十石積みの茶船である。人数はぜんぶで五人である。
そのうちから二人が櫓と竿をとった。
船は桟橋をはなれて、川中へでて行った。
ギイッ、ギイッと櫓をこぐ音がしずかな河原に聞えた。
川中から船は上流伏見のほうへむかった。
のぼりであるから船足ははやくない。しかし、櫓を漕ぐ者も竿をさばく者もあざやかな腕である。茶船は力づよく濁流を押しわけるように上へさかのぼっていった。

船の中のほかの男たちも屈強な者ばかりである。漕ぎ手がつかれたら、すぐにそれに替る者たちであろう。

何故、今時刻、危険をおかして茶船が伏見へむかってさかのぼるのだろう？　この光景を見ている者があれば、不思議におもうはずである。

宇治の茶所へむかうにしても、この時刻というのはおかしい。

実際に、不審をいだいた者たちがいた。

それは長野ら一行である。

河原を見張っていた者から、ただちに報せが長野、島田らのもとにとどいた。

「何っ、今ごろ茶船がでる？」

長野は、すわと立ちあがった。

「その船を追えっ、麝香猫と月照らであろう」

長野はただちに号令した。一行はいつでも出立できる仕度をしていた。

船着場の桟橋には空の上荷船がつないであった。上荷船は茶船より二まわりもおおきい。

漕ぎ手は三人ばかりいた。三人が櫓や竿をあやつって、茶船を追って上流めざして漕ぎだした。

茶船も上荷船も月明りだけをたよりにしており、船首に提灯をつけていない。かなり危険な航行である。

茶船は懸命に漕ぎすすんでいった。

しかし上荷船はそれ以上のはやさで追っていった。

二人で漕ぐのと、三人で漕ぐのとは、かなりちがう。

二艘のあいだはしだいにちぢまってきた。

「止まれっ」

「止まらんか！」

上荷船からしきりに茶船にたいして停船が命じられたが、茶船の漕ぎ手は聞き入れなかった。今までにも増して、必死で漕ぎつづけた。

そのために二艘の距離はなかなかそれ以上はちぢまらなかった。

「京都所司代、ならびに町奉行所の命令である。前の船、止まれ！」

長野もするどい声を発した。が、茶船は止まるものではなかった。濁流にさからって、なおも懸命の航行をつづけた。

「お前らの正体はわかっとるんや。麝香猫一味と月照、西郷らやろう。逃げたかて無駄や。逃げ切れん」

猿の文吉がドスをきかせた。

しかし前の茶船からは返事はかえってこない。

上荷船もいっそう力を入れて追跡をつづけた。

「つかまえられるもんやったら、つかまえてみい！」
追跡する船をあざわらうように茶船から声がかかった。
「ようし、つかまえたる。船ぶつけて転覆さしたる」
上荷船から威しの声がかかった。船をぶつけられたら船体のちいさい茶船のほうが転覆することはわかりきっている。この濁流の中に投げだされたら、よほど水練の達者な者でもおぼれる恐れがあった。
「岩にぶつけて、自分の船転覆させるなや」
茶船からまた嘲笑がかえった。茶船のほうも懸命である。二艘をくらべれば、どうしても茶船のほうが非力だからだ。
ふたたび二艘の距離がちぢまりはじめた。上荷船のほうは漕ぎ手を替えて、我武者羅に漕ぎすすんできた。そしてついに提灯をかかげた。
茶船のほうは漕ぎ手がつかれたか、船足がおちてきた。
ついに上荷船の舳先が茶船の船尾に接するくらいになった。
さらに上荷船が速度をあげた。
上荷船は茶船にぶつけることは避けて、ほとんど並走しはじめた。二艘は一間ほどの間隔をあけて並走しつづけた。提灯の明りに照らされて茶船の人員の姿や顔も見えてきた。
とうとう上荷船が茶船の行く手をはばんで、その前にでた。

これで茶船は航行を断念せざるを得なくなった。茶船の漕ぎ手もついに櫓をとめた。
「麝香猫っ、神妙にせえ」
「月照、西郷もおるやろう！」
上荷船から叱咤が飛んだ。
長野も島田も、渡辺も、とうとう麝香猫を追いつめたという興奮にかられていた。
「麝香猫め、とうとう運命のつきるときがきたな」
「ずいぶん手こずらせてくれたな。礼はたっぷりさせてもらう」
「麝香猫、顔を見せえ。月照、西郷もここまできて残念やったな。これから京へもどるんや」
捕り方たちは月照、西郷をつかまえたこともさりながら、今まで幾たびも煮え湯を呑まされつづけた麝香猫を追いつめたことに興奮した。
捕り方たちは、つぎつぎに茶船へ乗りうつってゆき、乗り手たちを一人一人ひっとらえ、縄をかけていった。
はげしい抵抗を予想したが、彼等の抵抗はほとんどなかった。
縄をかけられた乗り手は上荷船へうつされていった。
長野、島田らは手ぐすねひいて、麝香猫を待った。月照、西郷、有村らを数珠つなぎにする楽しみをおぼえていた。

長野は彼等にどんな対応をしようか一瞬かんがえた。残酷なおもいもめばえた。手ひどく痛めつけてやろうとかんがえた。それでなければ今までの恨みはとても晴れない。

だが、麝香猫らしき者は上荷船にうつされてこなかった。

月照、西郷、有村とおぼしき者たちもいなかった。彼等の顔は知っている。

長野の胸のうちに、いやな疑念がめばえた。

「麝香猫はどれや。観念して名乗りを上げえ」

「月照、西郷がおらんな」

提灯の明りをむけて、渡辺や大河原が言った。

明りのなかに浮かびあがったのは、川筋の若者たちのような風体だ。

「お前たちは何者だ！」

長野の叱咤がとんだ。

とらえられた若者たちは、茶船で逃げていたときの元気をすっかりうしなっていた。縄でしばられて、悄気かえっている。

「人にたのまれたのや。川を茶船でさかのぼれ言われましたんや。ほんまの京都町奉行と所司代が追ってきたとは知りませなんだ」

一人が呆気なく白状した。

「銭もろうて、たのまれたんか」

大河原がかっとしてたずねた。

「一人一両ずつもらいましたのや」

その答を聞いて、長野らはおおきな衝撃をうけた。

「してやられた！」

「麝香猫らは川下へくだった」

長野ら一同は憤怒と屈辱にまみれた。

自分たちがこの茶船を追って淀川をさかのぼっているあいだに、麝香猫や月照、西郷らはべつの船で一路大坂へむかったのだ。茶船が明りもつけずにひそかに川をのぼりだしたのを見て、とっさに追跡にうつったのが間違いだった。追跡者の心理の盲点をたくみについた術策に乗せられてしまったのだ。

「今からでも追いつけるかもしれぬ」

長野は悲壮感にみちた顔で言った。

「追え！」

島田もあきらめきれずに命じた。

そのころ、べつの茶船が枚方、大坂をめざして淀川をくだっていた。

船を漕いでいるのは半兵衛である。

乗っているのは麝香猫一味と月照、西郷、有村である。

船は提灯をつけていないが、月明りで川筋くらいは見える。まして半兵衛の腕は昔とった杵柄である。川の流れも、岩場、浅瀬、曲折なども体でおぼえている。危険なところに近づけば、自然に体がうごいてくれるのだ。

「半兵衛が昔船頭をやってくれていてよかったな。今度は大層たすかった」

そう言ったのは麝香猫である。

「みなの役にたてて、うれしゅうおます。船のことならまかしとくなはれ。せやけど、まだ安心はできまへん」

たくみに櫓を漕ぎながら半兵衛は言った。

半兵衛が今夕、下準備のためにでかけたのは、むろん囮の茶船を仕たてるためだった。昔の顔がこんなことにも役にたった。

しかし囮の茶船はあくまでも囮である。追手につかまることも半ばは予想された。つかまれば、ころされないまでも経緯を白状するだろう。そうすれば長野らはただちに船を返して川下へ追跡してくる。

捕捉されないとはかぎらなかった。

それを避けるために、今半兵衛は必死になって茶船を漕いでいるのだ。

淀川の流れは普段よりずっとはやくなっている。その上くだりである。事故さえおこさなければ、船ははやく大坂に到着する。

「京の重包囲ば抜けだすことができたのは、麝香猫どののおかげでごわす。おいたちだけではとても京を抜けだせなかったでごわしょう。幾重にもお礼ば言わしてもらいたか。どれほど感謝しても感謝したりなか」

西郷が三人を代表して麝香猫に言った。

「そのとおりじゃ、麝香猫どの、正体は存じよらぬが心底より、お礼を申しあげる。今後も尊攘のためによろしくご助力をおねがいいたしたい」

口数のすくない月照が丁寧に感謝の意をあらわした。

「月照和尚は尊攘運動の指導者である。幕府方へわたしてはならない人物でござる。お命を大切にいたしていただきたい」

麝香猫はそう言った。

「そのために京を脱出いたした。そしてほかの地で尊攘運動をつづけたい。ここまで盛りあがった運動を無にいたすわけにはまいらない」

月照は茶船の胴ノ間にすわって言った。

「ここまできた以上、かならず西郷さん有村さんに薩摩までつれて行ってもらってください。そしていつの日か、かならず京にもどってきてくだされればうれしい。われわれはそれを待っております」

麝香猫はこたえた。

一味の者たちは無言で聞き入っていた。

「幕府もこのたびの弾圧、大獄に存亡を賭けています。死に物ぐるいの勢いで志士取り締りいたしてくることとおもう」

「わたしどもはできるかぎり、京に閉じこめられている志士たちをたすけだしていくつもりです」

「麝香猫どのをたよりにいたしております。志士たちをなんとか京から逃してやっていただきたい」

「微力ながら、尊攘のために命を捨てるつもりです」

「その心意気があれば大層たのもしい。至誠かならず通じるでしょう」

月照と麝香猫は船に揺られながらかたり合った。

西郷はうなずきながら、腕をくんで二人の話に聞き入っていた。

茶船は橋本をすぎて、枚方へむかってすすんでいった。橋本には遊女町もあって、日ごろ繁昌しているところである。けれども今夜は遊女町の灯もあまり見えぬ。

半兵衛は前方を見すえて、ひたすら漕ぎすすんでいるが、ときどき後方をふりかえって見た。長野一行の追跡を気づかったが、その気配はないようである。

はやい流れに乗って茶船はぐんぐん枚方へ近づいていった。枚方は伏見と大坂との中間地点である。

蹴鞠の日

京都に本格的な冬（十一月）が到来した。

京都の冬は、かくべつな寒さである。底冷えのする夜は、手焙りも火鉢もきかない。

その京都の中でもいちばん寒さのこたえるのが、六角獄である。

六角獄の中には九月初頭いらい召し捕えられ、つながれている志士、学者、商人、公家の家臣たちであふれていた。京都における牢屋敷は、以前は小川通り御池上ルにあったが、宝永五年（一七〇八）に大火で焼け、その後は六角に牢屋敷がつくられた。それいらい百五十年がたっているが、この牢屋敷に今ほど人が満ちたのははじめてである。

千百坪の敷地にたてられた本牢、上り座敷、女牢にこれらの囚人はつめこまれ、体の骨をも凍らせるような冷たさにさらされている。牢内に火の気がないのはもちろんである。失火、放火などの懸念があるからだ。

十一月に入って、凍死する者、病死する者がでた。それでなくても牢内にきびしく拘束されたことで心身におおきな打撃をうけた者は大勢いる。寒さと不安、屈辱にさらされて、絶望的なおもいに追いつめられた者がほとんどである。

なかでも公家の家臣たちはうちひしがれ、取り調べで素志をまげる者も数おおくでた。

意気さかんであった前関白鷹司政通、左大臣近衛忠熙、右大臣鷹司輔熙、内大臣一条忠香、前内大臣三条実万らも、幕府のあまりにはげしい弾圧、恫喝に音をあげざるを得なかった。今は自分たちの家来が召し捕られているが、今後は自分自身に幕府権力の手がおよんでくる恐れがあった。

孝明天皇もこの惨状を見ては、目をおおわざるを得なかった。このまま幕府との対立をふかめていくことは朝廷の壊滅的な打撃を意味した。それでしばらくは幕府批判の態度をよわめることとした。

一方、幕府でもしばらく朝廷、および尊攘運動側の反応を見まもる態度にでた。

けれども京都における警備のきびしさは従来とすこしもかわらない。とくに七口の番所やそのほかの間道、抜け道の見張り、市中見廻りなどは一分の隙もないほどである。警備の番士や見廻りの隊士も増員されたくらいであった。

朝幕間の険悪さは、一見したところではかえってきびしくなったとおもわれるほどの状態だった。

長州藩士吉田松陰はかねて幕府の無断条約調印に憂憤していたが、先月、水戸、薩摩両藩有志による大老暗殺計画があるのを知って、自分も上京中の間部詮勝の要撃を画策して、十一月上旬には血盟者十七人を得た。が、長州藩では松陰のあまりに過激な言動をうれえ

て、野山獄につないだ。

この十一月は、朝幕双方にとっておたがいの立場をさぐり、つぎにとるべき態度をかんがえる期間であった。

十一月二十日、前大納言白河惟在の屋敷において、蹴鞠の競技がさかんにおこなわれた。この日は宮廷恒例の蹴鞠の日であった。蹴鞠の日は春と冬とにあり、春は宮廷仁寿殿の東庭でおこなわれ、冬は鞠道の宗家飛鳥井家か難波家でもよおされる。今年は飛鳥井家の順番であるが、当主が病臥しているため、娘婿であり、斯道の第一人者といわれる惟在の屋敷でおこなわれることになった。

宮中の殿上人、侍臣、地下らが午前中からぞくぞくと惟在邸にあつまってきた。そのほか客として京都所司代、禁裡付、京都町奉行らの武家や宮中の御用達商人らがまねかれ、着かざってやってきた。

主催者は惟在であるが、客の接待役は蓮子である。蓮子にしても、今日は宗家、家元としての晴れ姿で客をむかえた。燃えるような緋の袴に唐衣、五衣の色あざやかな正装姿はどんな客よりもうつくしくひきたって見えた。

惟在は直垂、葛袴、烏帽子姿がじつに地に合っている。惟在ごのみの姿なのである。

庭には柳、桜、松、楓によって〈かかり〉がもうけてあり、そのまわりに緋毛氈をしいた見物席がつくられ、見物の客はそこにすわった。

寒中ではあるが、この日は風もなく、小春日にめぐまれた。

白河家の女房、女中が腰巻、小袖姿で客の接待にあたった。

簡単な儀式がおわってから、競技がはじまった。腕におぼえのある上手たちが〈かかり〉の四本の木に二人ずつ八人たち、松の木にたつ上鞠の者から蹴りはじめて、三度ずつあげて次にわたすのである。

競技者はほとんど飛鳥井家か難波家の弟子たちである。みなこの日にそなえて、日ごろ練習をつんでいる。惟在の蹴鞠の仲間もむろんそうだ。

すばらしい技が披露されると、見物席から歓声や拍手がおこる。そうするとつぎの者はそれ以上の歓声や拍手を得ようとして見事な技を見せる。失敗して、失笑を買う場合も時にはある。

伝統のある競技だけに、むつかしい鞠を蹴る者もあれば、とても受けられないような鞠を見事に受ける者もある。卓越した技を持つ者は何人もいる。宮中でおこなわれる蹴鞠の日には、天皇もみずから衣装を着換えて鞠を蹴る。

惟在もはやく鞠を蹴りたくてうずうずしていた。が、今日は主催の立場であるから、最後の競技しかでられないのである。

今日の見物席には、めずらしい人物が客として姿を見せていた。

長野主膳が京都所司代酒井忠義、京都町奉行岡部豊常、小笠原長常の上席にすわって見

物していた。長野はものしずかに見物し、妙技が披露されてもにこりともしなかった。見物席の中でこの一区だけは周囲にくらべて異常な雰囲気であった。日ごろ公家やその家来を検束している立場上、周囲からの冷たい視線にかこまれている。

長野にしてみれば、蹴鞠などにはなんの興味も関心もない。それなのに来賓としてきたのは主催者の夫人が蓮子だからである。

蓮子の顔も見たいし、蓮子の住居や主人にも興味があってきたのである。長野は蓮子に執心していた。自分の権力を最大限に駆使してでもものにしたいとかんがえていた。夫がいるとかいないとかいうことは、長野にとってまったく意識にないのである。

長野は世間から、〈陰の大老〉とか〈京都大老〉などと呼ばれ、京都で絶大の権力をにぎっていると自負している。その立場から、前大納言夫人の蓮子を手に入れるのは容易だとはじめはかんがえていた。けれども最近では容易なことではないとわかってきた。それでも長野の執心はおさまらないのであった。きらわれているとわかっていながら、どうしても蓮子をわが手で征服したい欲求をおさえられなかった。

長野は蹴鞠の競技よりも、接待役の蓮子にばかり気をとられていた。今日の役は蓮子にぴったりのはまり役で、一人いきいきと冴えわたっていた。蓮子の場合、接待役というよりむしろ主人公のような立場、雰囲気になってしまう。蓮子はそれをたのしんでいる様子である。

蓮子は長野にたいしてもうやうやしく振舞った。が、長野の野心はもとより承知の蓮子である。長野の野心をもてあそんでたのしんでいるのが蓮子である。

（そのうち、いつかかならずおれの前にひざまずかせてやるぞ）

長野は心中ひそかに野心の炎を燃やしていた。

昼ごろ、休息の時間になった。

競技する者も見物する者も、みな屋内に入り、広間や座敷で昼餉のもてなしをうけた。

昼餉の後、まだ休息の時間が半刻ばかりあった。

酒井は岡部、小笠原と雑談にふけっている。彼らは競技の面白さに魅かれているようだ。

長野は白河家の屋敷内に興味をいだいて、部屋をでた。

廊下の外には、池と築山を中心にした庭園があり、植込みや石組みの風景も典雅なおもむきを持っている。池の水面に没するがごとく延びた松の枝の風情はこころ憎いばかりである。

長野はその廊下をあるいた。廊下は鉤の手にまがっていて、またまがるとその右手に部屋がつづいている。

人がいないので、長野はいちばん手前の部屋の障子戸をひいた。

床の間があり、雪中の竹と雀をえがいた掛軸がかかっている。そのほかに寒椿を一枝さしただけの花生けがおいてある。

長野はその部屋に入ってゆき、つぎの部屋との境の襖をあけた。

長野はもしかしたら蓮子の部屋がのぞけるかもしれぬという下ごころがあったのだ。ところが、そこは寒々しい部屋である。床の間どころか、なんの飾り気もなく、箪笥などの調度もない。次の間かなにかにつかわれているのであろう。

その奥にもう一部屋ある。長野はひきかえそうとしたが、もしかしたらそこが蓮子の部屋かもしれないとおもった。

（見てみたい、のぞきたい）

という下司なこころにつきうごかされた。

それでその部屋の前まですすんだ。襖に手をかけて引いた。

床の間つきの書院ふうの部屋である。机がひとつおかれ、文庫がある。蓮子の部屋ではないことはあきらかだ。惟在の書斎かもしれぬ。

長野は部屋の中を見まわし、机に近づいていった。広さは六畳ほどの小部屋である。ほかの部屋とはどことなくことなった雰囲気がある。

部屋の二面は壁であり、一方の壁には高窓がついている。長野はなんとなく秘密めいたにおいを嗅いだ。

机の引出しをあけてみた。

そのとき、えもいわれぬ芳香がふわっとただよった。はじめは香を焚いた匂いかとおも

った。

だが、長野はその芳香をどこかで嗅いだ記憶があった。

すぐにおもいだした。今出川通りで麝香猫一味と遭遇したとき、足もとをはしりぬけ薩摩屋敷の塀へ駆けあがった大きな黒猫がこれをおなじ匂いをのこして去った。

（麝香猫……？）

長野は机の中の匂いをもう一度嗅いでみた。

間違いはない。長野は鼻もきくし、記憶力もすぐれている。あの猫の匂いと同じだと長野は判断した。

（どうしたことか？）

長野はかんがえこんだ。が、むすびつくものがない。

机の中というよりは、部屋全体にその匂いがこもっているようだ。

とくことのできぬ謎に、長野はぶつかった。

そのとき、高窓のほうで物音がした。

長野はその方を見た。

高窓は四寸ほどあいており、なんとそこにこちらをうかがう黒い猫の顔が見えた。猫の目が黄金色にひかっている。

あのときの猫だとおもった。

その大猫が尾を下げ、全身の毛を逆立てた。

長野は一瞬、飛びかかってこられるような恐怖をいだいて、身がまえた。

ニャオ

一声のこして、黒猫は高窓から身をひるがえして、屋根へ飛びうつり、そのまま姿を消した。

長野はしばらくその場に凝然と立ちつくしていた。何がなんだかわからなかった。

今出川通りで見た猫がたまたまここにやってきたのか、それともあの猫はこの屋敷に飼われているのか。謎につつまれた猫だ。長野は惑乱におそわれた。

しかし無断で立ち入ったこの部屋にあまり長居はできない。長野はもう一度部屋の中を見まわして、でて行った。

休息の座敷にもどると、酒井、岡部、小笠原はまだ雑談をつづけていた。

「どうなさいました？」

酒井が長野の顔を見るなり言った。長野の顔が平常とかわっていたのだろう。

「どうもいたさぬ。猫じゃ」

長野の言葉の意味は酒井らには通じなかった。

「猫がどういたしました？」

「猫がこの屋敷におった」

「左様でございますか」
「黒い大きな、麝香の匂いをふりまく猫じゃ」
「麝香猫ではございませぬか」
「そうかもしれぬ」
と言いながら、長野は自分ひとりかんがえにふけった。が、かんがえは袋小路につきあたるばかりだ。その袋小路から抜けられなかった。
間もなく休息がおわった。そしてふたたび蹴鞠がはじまった。
長野は見物席にもどった。
蓮子は相かわらずあでやかさと雅やかさをふりまきながら客の接待をしている。
惟在のほうは、ややおどけた様子でたのしそうに客たちに競技者の紹介や説明をしていた。〈蹴鞠大納言〉の渾名にふさわしい惟在の様子である。競技の説明はわかりやすく、競技者の紹介もおもしろい。今日いちばんこの催しをたのしんでいるのは惟在のようだ。
長野は競技のほうはそっちのけで、蓮子と惟在を目で追った。
(前大納言が麝香猫の頭であろうか?)
長野はいったんそうおもってみたが、その推理は現実の惟在とはあまりにかけはなれている。尊攘の志士の味方として幕吏たちと勇敢にたたかう麝香猫と、柔弱を絵にかいたような蹴鞠ぐるいの惟在とはちがいすぎる。

(そんなことはかんがえられぬ)
長野はみずから失笑をおぼえた。
惟在は道化じみた自分をたのしんでいるようだ。その惟在からは、尊皇も、攘夷も、思想的なことは何もかんがえられなかった。一日一日をたのしく、悩みなく過せればよいといった人生観しかうかがえなかった。
惟在と麝香猫とをむすびつけるものはない。しいてあげるとするならば、最前、高窓からのぞいていた大きな黒猫と、机の引出しの麝香の匂いだ。
けれどもあの猫がこの屋敷で飼われているものかどうかはっきりとしない。また公家の屋敷であるから香の匂いがしたとしても、かくべつの不思議はない。
そのとき、当の惟在が長野の前にきた。
「長野さま、本日の蹴鞠のもよおしはいかがにござりまする。ご退屈ではおじゃりませぬか」
惟在はまことに愛想よく、剽軽とさえ見える態度で言葉をかけてきた。屈託も、おもいわずらうことも何もなさそうである。これは天性の性質のようにおもわれた。
長野は緋毛氈の上で姿勢をただした。
「本日、おまねきをいただき大変光栄にござりまする。おもてなしのおこころくばりにいささかの隙もござりませず、おどろくばかりでござります。競技の方々もみな名人、上手

の技の競い合いがまことにお見事で、感嘆のきわみにござりまする」

長野は惟在と正面からむき合って、丁重きわまりない返事をした。いかに長野が絶大な権力をもっているとはいえ、公式の立場では、前大納言の官位にはおよぶべくもなかったのだ。

「それをうかがいまして、麿は大層安堵いたしました。本日、長野さまをおむかえいたしまして、もし粗相があったり、ご退屈をお召しあそばせられては蹴鞠の宗家として面目なき次第とおもうておりました」

惟在はにっこと笑みを浮かべて感謝の意をあらわした。こころの中は童児にひとしき純真無垢を感じさせるものであった。

「今まで鞠を蹴られた方々もさりながら、前大納言様にあらせられては、斯道の家元、第一人者とうけたまわっております。はやくその技をご披露いただきたいと存じております」

長野はことさらへりくだった態度で世辞を口にした。

「それはもとより麿もねがう次第でおじゃります。本日最後の競技に、難波家ご当主とともに鞠を蹴る所存にござります」

惟在は莞爾としてこたえた。

長野ほどの煮ても焼いても食えぬ男でさえ、その善意にあふれた笑顔にはついひきこまれそうになった。

（これは生まれながらの道楽者だ）

と長野はおもった。こんな人物があの麝香猫であろうはずがないと信じた。

「たのしみにいたしております。見事な技をご披露くださりませ」

と長野は挨拶の言葉をむすんだ。

惟在はついで、酒井のいる席へすすんで、これまたあふれるような笑みを浮かべて挨拶におよんだ。

かねてから、長野は自分の推量によって、麝香猫一味は水戸藩か薩摩藩の尊攘志士たちのうちからより抜かれた集団であろうとおもっていた。とくに水戸藩は尊皇思想と攘夷の発祥地ともいうべきところで、質実剛健、尚武を代々藩是としている。しかも藩士たちの尊敬する前藩主斉昭は井伊大老に押しかけ登城をとがめられて、急度慎を命じられて謹慎中である。幕府のこの処遇にたいして、水戸藩士たちは怒りに燃えている。大老暗殺計画さえねられている有様である。長野はこのあたりに麝香猫一味の正体をもとめていた。市中見廻りや探索などによって、麝香猫捕縛の準備もすすめている。

酒井も岡部や小笠原も大体長野とおなじかんがえをもっている。それで今回の弾圧でも、かくべつ水戸藩、薩摩藩の関係者を目の敵にしているのだ。

競技は何度か試合がおわって、とうとうこの日最後の競技となった。

惟在は直垂、葛袴姿で烏帽子の紐をしめ、乾（西北）の位置、松の木の下に立った。

難波家の当主常盛は巽（東南）の位置、柳の木の下である。

計八人が松、楓、柳、桜の位置に場所を占めた。これはいわば、蹴鞠の模範競技というべきものである。

見物席もしんとしずまりかえって、〈かかり〉の八人を見まもった。

惟在が上鞠である。惟在は眉形をした薄皮づくりの鞠を蹴あげ、三度蹴って、楓の下に立つ者へまわした。

楓の下の者が見事にこの鞠をうけたので、見物席から喝采がおこった。

楓から柳へ、さらに桜へと鞠はまわり、松にもどった。これでまた喝采である。さすがに宗家二人と高弟らがきそう競技だけに、今まで以上の妙技が披露された。八人がめまぐるしくうごいて、鞠が〈かかり〉のあいだをまわった。

蹴鞠などは公家たちの軟弱な競技だとかねておもっていた長野は、このかんがえをあらためざるを得なかった。蹴る鞠、受ける鞠、いずれも高低、速度、回転、いろいろな難度があって、とても簡単な競技ではない。鍛練と練磨を必要とする競技である。なまなかなぐうたら者ではとても至芸に達することなどはできない。

惟在はどこにこれほどの敏捷さと力づよさが秘められているかとおもうほどの蹴鞠巧者であった。自由自在に体をうごかして、鞠をあつかい、天衣無縫な競技を演じた。長野は

まるで別人を見るようなおもいで惟在の姿に見とれた。

（すごい……）

と長野は舌をまいた。惟在への認識をあらためねばとおもったほどだ。

これで長野の胸に、ふたたび疑念がおこってきた。

燗酒の屋台

十二月一日、徳川家茂が第十四代の将軍宣下の式典をおこなった。

家茂は井伊大老が推挙していた紀州藩主徳川慶福である。家茂はわずか四歳で紀州五十五万石の藩主となり、二年ほどして水戸斉昭などの推す一橋慶喜の対抗馬として将軍継嗣競争にひきずりだされ、歴史の荒波にもまれてきた。家茂が将軍に推挙されたのは、ほとんど井伊の独断裁決である。

この日、東寺口の近くにある居酒屋米半に、下級公家の姿をした深草と、武家の若党姿の長五郎があらわれた。二人ともくたびれはてた様子で小座敷にあがりこんだ。

「残念やったな」

半兵衛が酒を持ってきて二人に言った。

「力およばずや。とうとう三樹三郎はんをつかまえられてしもうた」

「無念や。今までの苦労がみな水の泡になってしもうたな」

二人は気落ちした声で言い、茶碗にそそいだ酒をあおった。大獄の嵐はなお吹き荒れていた。

昨日、志士中の大物頼三樹三郎が幕吏につかまり、六角獄につながれたのである。

麝香猫一味は月照と西郷、有村をなんとか無事に大坂へおくりだした後は、京都にのこる最後の大物頼三樹三郎の警固をおこない、なんとか京都を脱出させようと懸命の努力をつづけていた。けれども幕府方は月照、西郷らの大物を逃がした反省もあって、徹底的な志士封じこめ作戦をおこなっていた。そのため三樹三郎はじりじりと追いつめられて、ついに昨日、幕吏に捕縛されたのだった。

麝香猫一味は力およばず、三樹三郎をまもりとおすことができなかった。その悔しさが三人の態度にまざまざとあらわれている。

「だんだん京の中もさびしゅうなった」

半兵衛が言うと、

「そのかわり、六角の獄中は志士で大にぎわいや。火でもつけたろか」

長五郎も半分自棄のような態度である。

「壁に耳ありや、声が大きい」

そのとき深草が長五郎をたしなめた。

米半の店内には客の姿は見あたらぬ。けれども小座敷のいちばん隅から人の鼾がきこえる。

長五郎がのびあがって見ると、旅人というよりは乞食同然の破れ衣を身にまとったきた

ない男が自分の腕を枕がわりに寝入っている。
「聞かれたか？」
長五郎は鼾の大きさについこころをゆるしたのである。
「大丈夫やろ。それよりも、もっと大変なしらせがある」
半兵衛はそう言った。
「何や、まさかお頭でもつかまったんとはちゃうやろな」
長五郎がながい顔をさらにのばして言った。
「月照和尚と西郷はんが薩摩の錦江湾に身を投げたそうや」
おもいがけない半兵衛の言葉である。
「海に身を投げた？」
深草がおどろきの声をあげた。
「西郷さんはたすけあげられて息を吹きかえしたそうやが、和尚は駄目だったそうや」
まことにおどろくべきことが半兵衛の口から明かされた。
「薩摩まで行って、どうしてそないことになったんや」
「薩摩藩に裏切られた。薩摩藩は和尚が領内に入ることをこばんだそうや。それで西郷さんは責任を感じて……」
「ほんまか、誰から聞いたのや」

「あの人や」
半兵衛はそうこたえ、小座敷の隅で鼾をかいている乞人然とした男へ眼差をおくった。
深草と長五郎があらためて同時に、その男に見入った。
「あっ」
「お頭……」
深草と長五郎は啞然としたように言った。
半兵衛はうなずいたが、麝香猫はまだ寝入っている。
「さよか、お頭からの情報ならば間違いないやろ」
「お頭の耳に今朝入ったそうや」
「和尚は死んだか。あの豪気な西郷はんが身投げをするとは、よほどのことやったんやろ」
「薩摩はなかなか油断ならん藩やとは聞いとった。せやけど西郷さんほどのお人を裏切るとは」
「おそろしいところやな、薩摩藩……」
三人がそう話しているとき、
「薩摩はそういう藩なのだ」
小座敷の隅から声がかえってきた。その声にも気落ちが感じられる。

尊攘の大藩といわれていても、薩摩藩にも複雑な事情がある。前代、前々代、さらにその前からの藩内抗争の尾をいまだにひきずっている。政権がかわるたびに藩論もかわる。そして騒動がもちあがる。

「あの藩から尊攘の思想はうしなわれましたんか」

深草はふかくうめくように洩らした。

「そう簡単にも言えぬところがある」

そう言って乞食姿の麝香猫は三人のそばにやってきた。頭は蓬髪、身にはボロ、近寄るだけで芳香ならぬ異臭がにおった。これでは誰が見ても麝香猫であるとは見やぶられぬ。

「ともかく和尚には大層不運やった。西郷さんか？　そのまま薩摩にはおれんやろ」

「国を捨てて逃げるしかないやろう」

長五郎と半兵衛は言った。

「おそらく長野主膳から島津久光へ脅迫、恫喝の手紙が送られたことだろう」

麝香猫がつぶやいた。

「きっと長野が手をまわしたにちがいありません」

深草もそうかんがえた。

久光は今の薩摩藩主忠義の実父であり、〈国父〉と尊号され、藩の実権をにぎっている。

「久光のかんがえておることは、よくわからぬ」

麝香猫はそうも言った。

久光が斉彬の衣鉢をついでいるとは、かならずしも言えない。この兄弟は党派をたてて、血で血をあらった間柄である。

「久光は長野の意向をいれたのでしょう」

「経緯はいろいろあろうが、結局そういうことになる」

「薩摩藩が幕府と手をむすんだ？」

「そうとまでは言えない。また藩論がかわるやもしれぬ。そこが薩摩の薩摩たるゆえんだ。しかも最大の雄藩だから始末がわるい。ここを無視するわけにはゆかぬ」

さすがの麝香猫もやや弱音を吐いた。

月照と西郷、有村は長野らの追跡をかわして淀から大坂へ茶船でくだり、そこで麝香猫一行とわかれ、樽廻船にもぐりこんでいったん下関へ逃れた。直接船で薩摩へむかうには藩論が気がかりだったのだ。下関で長州の豪商白石正一郎の屋敷にかくまわれてから、九州へわたった。しばらく薩摩脱藩士北条右門の隠れ家にひそみ、西郷と有村だけが先に帰国したあと、月照は山伏姿の平野国臣につれられて薩摩へむかった。

白石正一郎は長州の支藩清末藩の御用商人で、ひろい活動範囲を持ち、下関という地の利を拠点としてひろく西南諸藩と交易をおこなっており、薩摩藩とも取り引きがあった。しかも国学や和歌をまなぶ熱烈な尊皇家でもあった。

苦難の旅の末、ようやく月照は薩摩に入ったが、心配したとおり藩首脳の反応はつめたかった。月照は日向へ追放ときまった。表面、追放とはいいながら、藩領をでた直後兵児二才（郷士の若者）らによって討ち捨てるのが薩摩の風習である。西郷は月照の宿をおとずれ、有村、平野らをまねいて錦江湾へ船を漕ぎだし、船上で酒宴をもよおした。そして未明近く、西郷は月照を擁して海中にとびこんだ。しばらくの後、二人はひき揚げられたが、月照はすでに水死しており、西郷はほどなく蘇生した。月照は南林寺にほうむられ、西郷は亡命を余儀なくされたというのである。その情報は有村から手紙で僻香猫のもとにもたらされた。

「和尚は死に、西郷さんは国を追われはったのか」

深草はため息をついた。

「尊攘運動がしだいに追いつめられてきた。情勢はきわめて不利におちいっている。帝においても大層なおなげきといわれておる」

僻香猫はくるしげに言った。僻香猫がこのような言葉を手下たちの前で口にしたのははじめてである。

「大獄の嵐はますますつよくなる一方や。僻香猫一味がこの勢いをおさえるしかないやろう」

半兵衛が苦悩の色を浮かべて言った。

「長野、酒井らは意気さかんで、京を荒しまわっとる。もう打つべき手はないんか」

長五郎は無念そうに腕をくんだ。

「一味で六角獄おそうてやろか。獄中には志士たちがわんさといてはる。火いはなってみな逃がしたるんや」

深草は自棄くそで言った。

「六角獄焼き打ちか」

半兵衛がそれに乗りかけた。

「飛んで灯に入る夏の虫だ」

僻香猫が一言のもとにそれを封じた。

六角獄の警備は蟻一匹寄せつけぬほどきびしい。周囲を昼夜となく休みなく番士や警固の面々がまわっている。近づいただけでもただちに誰何され、不審をもたれたら、その場で斬り捨てられることもある。とても焼き打ちなど不可能だ。牢獄焼き打ちというかんがえは面白いが、実行するには無理がある。

「それに所司代では近々、六角獄の志士たちを江戸送りするという噂や」

そう言ったのは半兵衛である。

「六角獄には囚人がおさまりきれんようになったんか」

長五郎がおどろいた。

「そうかもしれん」
深草も言った。
「ちがうだろう。幕府の目的はちがうところにある」
麝香猫だけがかんがえをことにした。
ほかの三人が麝香猫に見入った。
「井伊じきじきに志士たちを糾明し、これをさばくつもりではないか。井伊が好きなように江戸でさばくつもりだ。峻烈なさばきが待っているだろう」
麝香猫が言うと、ほかの三人はみなしばしだまりこんだ。
「井伊ならばやりかねん」
「大勢の志士たちをどうやって江戸まではこぶんや」
「できんことはない。唐丸籠に一人一人おしこんで、警備の人間を仰山つけて江戸へおくるんやろ」
三人がそれぞれ口にした。
「幕府は大変なことをやるんやな」
「幕府はじまっていらいのことや」
「護送の沿道はさぞ大変やろう。野次馬の人垣ができる」
三人はなかばあきれて言った。

「とても一度におくれる人数ではない。何度かに分けておくるつもりだろう」
麝香猫は口を一文字にひきむすんで言った。
「こちらは手も足もだせんのか」
悔しそうに深草はつぶやいた。
「だしても駄目やろう。犠牲を大きゅうするだけや」
「残念や。口に指くわえて唐丸籠見てるだけか」
半兵衛も長五郎も無念きわまりなく言った。
「もうつかまってしまった志士たちはどうすることもできない。まだつかまっていない志士らをまもることがわれらのつとめだ」
と麝香猫自身が言った。乞食の風態風貌をしているが、それは単なる変装にすぎない。変装の下にひかる眸はしずかな怒りと闘志を秘めている。強大な幕府権力に刃むかう自信の片鱗もうかがわれる。それは尊皇思想に弾圧をくわえてくる者への怒りであり、あくことのない戦いへの執念である。
米半の店内はいつもと同様しずかである。東寺口附近のにぎわいをよそに、おおよそこの一軒だけ表面はひっそりとしている。
深草、半兵衛、長五郎は麝香猫の言葉を待った。麝香猫の一味、手下はこの三人のほかに何人もいるが、そうした連中はふだん市井の中でごく普通の暮しをしている。麝香猫が

呼びだしをかけたときだけ、それに応じてあたえられた役目をこなしているのである。そしてすぐにまた元の普通の暮しにもどるので、滅多に幕吏の眼につくこともない。

五条橋口を野菜をつんだ車をひいて番士の目をまどわし、笠間新九郎を京都から脱出させた夫婦者の女房役はお甲という麝香猫の手下であった。以前、米半に麝香猫の言付けをつたえにきた童児も太郎坊という手下である。お甲は町家の女房であり、太郎坊は洛中のある寺の門前に捨てられていた子をそこの和尚がひろってそだてた子供だ。このほか麝香猫の一味には商家の主人もいれば、番頭もいる。彼等はいずれも麝香猫をこころから尊敬し、麝香猫に協力を惜しまないのだ。命も捨てる覚悟の者ばかりである。

「月照和尚の弟があぶない。長野や酒井にねらわれておる」

麝香猫が口をひらいた。

「信海和尚……」

深草がおどろいた。

「そうだ。月照和尚が尊攘運動に没頭しているあいだ信海どのが清水寺の和尚のかわりをやっていた。そして和尚が九州へたってからは信海どのが正式に和尚となった」

「月照和尚にまさるともおとらない尊皇家と聞いとります」

長五郎はこたえた。

「信海和尚は月照どのから尊皇の思想と国学や詩歌をまなんだ。しかし性格のはげしさは

兄以上と言われておる。名ある志士たちの京になき今、信海和尚が尊攘運動の中心人物になってきつつある。幕府もそれを知っている。近々のうちに召し捕りにふみきるものとおもう」

「いつかそうなるどっしゃろ」

「信海和尚を召し捕られれば京における尊攘の砦は総くずれとなり、潰滅する。何としても和尚をまもりとおすか、京から脱出させねばならない。後世に尊攘運動をつたえ、託すにも和尚を召し捕らせてはならないのだ」

麝香猫が熱っぽい眼差を三人にむけて言った。

今日、麝香猫が米半に足をはこんできた目的は深草や半兵衛、長五郎とその策をねることにあった。それで深草と長五郎を呼んだのである。

「月照和尚が水死した今となっては、信海和尚を何としてもおまもりいたしませんと」

まず深草が応じた。深草も下級ながら公家の末端に位置するものである。彼が尊皇思想を奉ずるのは当然である。

「月照和尚が亡くならはったぶん、信海和尚にはたらいてもらうしかありまへん」

「京の都から尊皇がのうなりましたら、京の京たるゆえんがのうなります。尊皇をまもるためにも信海和尚をまもらんとなりまへんな」

半兵衛も長五郎もおなじ意見である。

米半の店内に俄然熱気がこもってきた。外気は寒いが、店内につどう四人のこころは熱く燃えている。

「和尚をまもるには、どうすればよい？」

麝香猫がほかの三人に問いかけた。

しばしの沈黙があった。

「京を脱出させるほかはありまへんやろ」

長五郎が沈黙をやぶって言った。

「そうや、京におるかぎり、いつか召し捕らえられるやろ。清水寺は安全やない。寺をでなあきまへん」

半兵衛も同感の言葉を口にした。

「はたして和尚を脱出させることができるかどうか」

深草は心配が大きいようだ。

「困難や危険はあるだろうが、脱出の方法はあるだろう」

そう言ったのは麝香猫自身である。

「六角獄の志士たちを江戸へおくりだしはじめたら、京の中は騒然たるものになる。唐丸籠の警固で役人たちは手が足りなくなるだろう」

麝香猫はそう読んで言葉をつづけた。

「京がさわぎたてば、つけこむ隙がうまれそうや」

「ひとはたらきできそうな感じや」

「うむ」

ほかの三人の目がかがやきだした。

「和尚自身に京脱出を決意させなければならない。和尚は自分はあくまでも清水寺の住職だから、寺をはなれるつもりはないようだ。寺を逃げだした住職は今までにないと言っていた」

麝香猫はすでに信海に京都脱出をすすめたことがあるのだ。

「いくら和尚でも、背に腹は替えられへんどすやろ」

「そこが普通の人間と和尚のちがうところだ」

「強情言わはっとる場合やありまへんやろ」

「尊皇のためにも和尚に生きていてもらわねばならない。もう一度説得してみよう。志士護送の日取りをまず知ることだ」

「わてらでさぐってみまひょ」

半兵衛がそうこたえた。

「町奉行所の役人に知っとる者がおります。ちょっとあたってみまひょか」

長五郎はすぐ行動にうつすつもりである。

凍てついた堀川通りを、ガラガラと音をたてて屋台の車がとおる。

一昨日降った雪がまだいくらか道路にのこっており、雪かきしたあとはこちこちに固まっている。

屋台の車は三条から北へのぼってゆき、二条城の前をゆっくりとおって、丸太町通りと堀川通りが交差する附近でとまった。この屋台はいつも堀川通りを北から南、南から北へと移動しながら昼から宵まで商売をつづけている。燗酒を売る屋台である。

丸太町堀川で待つほどもなく、四十前後の男が寄ってきて、

「こんな寒い日は燗酒が恋しゅうなるな。一本つけてや」

と声をかけた。

よくくる客である。この屋台の常連だ。

「毎度、おおきに」

屋台の親父は愛想よく言って、燗酒を客についだ。

堀川通りの東側には、筑前藩、因幡藩、中津藩、姫路藩、越前藩などの京都屋敷が建ちならんでおり、その屋敷に奉公する若党や中間、小者などがよく燗酒の屋台に立ち寄って、体をあたためて行く。春から夏、秋は茶や氷などを売る。一年とおしてこの屋台は堀川通りにでている。

「この秋から冬はいそがしかった。例年の二倍のいそがしさや」

客は燗酒をうまそうにかたむけながら親父にはなしかけた。

「そうどすなあ。お町奉行所は大変ないそがしさどした」

親父は相槌をうった。九月からはじまった志士弾圧、大獄のことを言っている。

この客は京都町奉行の同心である。探索や吟味方の同心ではなく、京都の市政や訴訟にたずさわる役職であるが、未曾有の取り締りを展開したために人数の不足をおぎなって、そちらの仕事の手つだいにまわされることもあった。

「春になっても、この騒ぎはおさまらんやろう。お上に楯つく者は一人のこらず召し捕る方針や」

「捕り物さわぎが毎日つづきましたなあ。まだ一段落つきまへんのどすか」

「まだまだや、まだのこっとる者がおる」

「幕府は京の大掃除いたすつもりどすやろ」

親父と客が言葉をかわしているとき、もう一人客がやってきた。武家屋敷の若党らしき姿だ。

「やあ中村はん。おひさしぶりどす」

先客の同心にそう声をかけたのは長五郎である。

「おお政五郎、このところ会わなかったな。しかし、この時期、燗酒にさそわれて屋台に

やってくる客がおおいな」

中村と呼ばれた同心も気さくに応じた。

この二人、かくべつのつながりがあるのではない。屋台がとりもつ客と客との仲である。たまたまおなじ屋台に居合わせて、言葉をかわすようになった。両人とも酒が好きなのだ。おたがいに相手のことをくわしくは知らない。聞こうともしない。屋台に居合わせているあいだだけとりとめない話をかわし、屋台をはなれれば他人となる。屋台にはこういう客同士が何人もいるものだ。

長五郎は燗酒をたのんでから、

「中村はんも屋台と縁が切れんお人のようどすな。ちょっとかわった屋台見つけました。今度ご案内いたしまひょか。そこもうまい酒だしますんや」

とさそってみた。

「そう言われると、こころがうごくが、当分その暇がないんや」

中村はやや残念そうにこたえた。

同心と若党でも、屋台にいるあいだは身分、職種、年齢をはなれた友情が成りたっている。

「そうどすか、大変どすな。やはり志士取り締りのかかわりどすか」

さりげなく長五郎はカマをかけた。

「この秋からもうてんてこ舞いや。役目ちがいでも市中に狩りだされる」

「当分暇はありまへんか」

「長いあいだや」

「この冬いっぱい待ちまひょか」

「駄目や、明後日江戸へたつ。かえってくるのは来年になるやろう」

「江戸へ旅だつんでしたら無理どすな」

「六角獄の囚人を江戸へ護送するんやが、手がたりなくて、わしらも狩りだされることになった」

中村は長五郎に気をゆるしているとみえて、職務上の機密をつい明かした。

「大変どすな。六角の獄には大勢志士たちが入っておりまっしゃろ」

「連中を江戸へ護送するには、大変手がかかる。せやかて、上から命じられたもんはやらならん」

「そうどすか、江戸へ行かはるんどすか」

長五郎は胸中、おおいにうなずくところがあった。

「江戸は生まれてはじめてや。どんなところかわからへん。志士護送いうのも、どうかすると難儀な役や」

「警戒もきびしくせなあきまへんな」

「途中で逃げられでもしたら大変やからな。道中ほかの志士たちに唐丸籠うばわれたら、もっと大変や」

中村は燗酒が入って体があたたまったせいか、役儀のことをぽろぽろと口にした。

長五郎は胸中にんまりとしていた。聞きたいことはほぼ聞きだした。

「唐丸籠は一体なんぼほどでますんや。籠を用意するだけでも大騒ぎどすやろ」

「とても一度にぜんぶおくれへん。何度かにわけて江戸送りすることになるやろう」

「そうどっしゃろな」

長五郎は心中、上機嫌である。知りたいことはほとんど中村がしゃべってくれた。燗酒がうまい。

五臓六腑にしみわたるようである。

「親父、もう一本つけてや」

中村も長五郎も燗酒のお替りだ。

「江戸はようおますな。わてかて行ったことがありまへん。存分にたのしんできとくなはれ」

「お役目で行くんや。そうおもろいことはないやろう」

中村はしばらく屋台にいてからでてゆき、長五郎は四半刻ばかり屋台で時間をすごして、米半へむかった。

東殿町

白河家の屋敷は、寺町御門を入ってすぐのところにある。築地塀をめぐらした立派な屋敷がまえである。

長野主膳は多忙な政務のあいだを縫って、探索や見廻りに精力的にうごきまわった。長野は精神も肉体も見かけよりよほど強靭なのである。何事にもできるだけ陣頭指揮をおこなうのが、長野の流儀である。

長野は尊攘派の公家たちには以前から見張りをつけていたが、近ごろは白河家の屋敷にも見張りをつけていた。長野は惟在につよい疑いをいだきはじめたのである。その疑いははじめは淡いものであったが、しだいに濃厚なものになってきた。

（麝香猫の正体は惟在ではないか？）

という重大な疑いである。

惟在と麝香猫とは、一見しただけではおよそ無縁の存在にかんがえられるが、深くうたがってみると両者を関連づけるものがつぎつぎに闇の中から浮かびあがってくるのだ。

長野もはじめは、

（よもや？）

とおもった。惟在の底ぬけに陽気で屈託のない人柄からは麝香猫を想像することがむつかしい。自分の妻にさえ愛想をつかされかけている男がどうしてあの英雄的な麝香猫の正体であろうか、という疑いは今でもいくらか長野の胸裡にのこっている。

惟在は蹴鞠にあそびくるって大納言の地位まで棒に振った男だ。しかもそれに悔いはなかったようである。堂上の人々からいくらか軽侮の念を持たれている。父の鷹司政通も惟在におおきな失望をいだいているという噂を聞いていた。

だが、惟在が二つの顔と二つのこころを持っているとするならば、これらの矛盾はすぐに氷解する。

（惟在には、表と裏の顔とこころがある）

とおもいついたとき、惟在が麝香猫の正体であるという確信に近づいたのだ。表の顔が蹴鞠ぐるいの惟在で、裏の顔が麝香猫なのである。

父は前関白で、朝廷内におけるもっとも有力な尊攘派である。兄の右大臣輔熙も父の尊攘思想を信奉している。惟在が内心は強烈な尊攘家であったとしても、不審ではない。むしろそのほうが自然である。

しかも惟在は体軀堂々としており、若いころ武芸に身を入れていたとも言われている。現在では滅多に見られぬ御所流剣法の使い手であるとも聞いた。今の暮しぶりがあまりに

遊惰であるために、つい惟在の昔のことを失念していた。

（惟在は本当は、今も昔もかわってないのではないか）

そうかんがえれば、麝香猫の正体はおのずからあきらかになってくる。

惟在は敵ばかりでなく、見事に味方をもあざむいているのだ。父や兄ばかりでなく、妻の蓮子さえも惟在が麝香猫だとは気づいてないだろうと長野はおもった。むろん敵では誰一人として知る者はいない。それに気づいたのは自分がはじめてであろうと長野はおもった。

先月、蹴鞠の日、白河家の屋内の一室で麝香の匂いをかぎ、黒い麝香猫を屋上に見たときから、長野はほぼ確信に達したのである。

しかし残念ながら、証拠となるものが何もない。

確信だけでは惟在を麝香猫だときめつけるわけにはいかない。まして前大納言を召し捕えるわけにはいかないのである。

惟在が麝香猫だとするならば、この人物はよほどのしたたか者だということになる。世間をあざむくことはできても、肉親や妻まであざむきとおすのは、よほどこころに油断も隙もない人物でなければ不可能である。頭のなかに知恵がいっぱいつまっている人物だ。度胸も勇気も並みはずれてなければならない。惟在はそれらの条件をみたしているのだろうと長野はかんがえた。

長野は惟在に会ったことがある。麝香猫にもあったこともある。麝香猫とは太刀をまじえた。

だからと言って、両者に共通する特徴をあげることはむつかしい。しいて言うならば、体軀雄偉な男というくらいである。が、そういう人物は世の中にいくらでもいる。

それでも、長野の脳裡や胸裡のうちで、惟在と麝香猫の人物像は一致しつつある。

長野はどうしてもその証拠がほしかった。麝香猫をとらえることができれば、なおよい。もういい加減に麝香猫をとらえることができなければ、京都の中で長野の権威は失墜する。麝香猫は今や、京都において英雄になっている。庶人は麝香猫の活躍にさかんに拍手をおくっている。長野はどうしても近々のうちに麝香猫をとらえねばならないところにせまられていた。

麝香猫の評判があがればあがるほど、長野の評判はおちる。今京都において、長野と麝香猫はもっとも対照的な人物であった。

長野は、白河家の屋敷にもっともきびしく見張りを命じていた。惟在ばかりでなく、蓮子や白河家の家来、使用人の末にいたるまでに注意を命じた。

屋敷の表門、裏門、通用門を四六時中見張っている。白河家の者はすべて、屋敷の出入りを長野の手の者に見張られている。

白河家の屋敷は東殿町にあり、御所の東南に位置する。附近には唐橋家、植松家、大宮

家などの公家屋敷がある。寺町御門は肥後藩が守備にあたっている。

公家屋敷ばかりがあつまる東殿町にも、空地や空屋敷、火除地、稲荷、竹藪などがあり、そうしたところに見張りはひそんでいる。公家の家来や奉公人、出入り商人などに化けているので、見張り人を見つけだすことはむつかしい。

長野自身もときには、見張りに立つこともある。

季節は厳寒、京都でももっとも寒さのこたえるときである。夜ともなれば、なおもきびしい。その中で夜っぴての見張りは大層難儀だ。

そんな夜も更けた子の刻（午前零時）に近いころ、闇のかなたから車の音が聞えてきた。

牛車の音だ。

長野は東殿町の闇にひそんで、じっと耳をかたむけた。

牛車は御所の方角から東殿町にむかってくる。

（御所からのかえりだろうか）

と長野はおもった。が、それにしても時刻がおそい。

車の音はますます近づいてきた。

東殿町の角をまがった。車の提灯の明りが見えてきた。

（糸毛車だ）

提灯の明りが車の姿をうつしだしている。

車の主は女人ということになる。

長野がひそんでいるのは植松家のとなりにある空地の木の繁みである。そこには文吉もひそんでいる。

「蓮子さまでは？」

文吉がささやいた。

長野もそうではないかとおもった。それで長野のこころがにわかに波だった。

（蓮子が今ごろ、どうして）

とおもったが、宮中にはいろいろ夜の行事もある。

蓮子にたいして長野ははじめからつよい執着がある。しかし長野と蓮子とのあいだの距離はいぜんとしてちぢまっていない。蓮子への執念がつのるあまり、長野は近ごろ憎しみさえおぼえはじめていた。長野は京都にきていらい、蓮子にあしらわれつづけてきた。その屈辱もある。

（蓮子であったら、どうしてやろう）

長野は一瞬おもった。

しかも蓮子は憎むべき麝香猫の妻である可能性がつよい。長野の胸中はさまざまな感情が入りみだれた。

その整理がつく前に、長野は空地の木の繁みから道路へでた。

文吉もそれにつづいた。ほかの手下二人だけが空地にのこった。

長野は糸毛車の前に立ちはだかった。

車がとまった。

「長野主膳さまや。その車に用がある」

文吉が声をかけた。文吉は一介の目明しにすぎないが、彼の背後には京都町奉行所と所司代の権力があり、さらに近ごろでは長野の後楯もある。

引戸があいて、

「また車あらためでおじゃりますか」

蓮子が引戸の奥からうつくしい顔をのぞかせて、やや揶揄するように言った。

「いや、白河蓮子さまのお車と承知でお止めいたした」

長野はいくらか気負いこんで蓮子の前に立った。

「ほう左様でおじゃりますか。何事でござりましょう」

蓮子は微笑さえ浮かべて長野を見かえした。闇の中に浮かんだ蓮子の容顔はいささか謎めいて見えるほど長野のこころをとらえた。

「麝香猫の探索をいたしております。御所の近くにまよいこんだという情報をうけて、このあたりを警備いたしておりました。蓮子さまには今時刻、どこからのおかえりでございますか」

長野は蓮子にいどむような眸をむけて言った。

「麝香猫がこのあたりに逃げこみましたか。できるなら一目見とうございます。どんなお方やら興味がございました。今宵は宮中で歌会おさめがございまして、それが長々とつづき、こんな時刻になったのでおじゃります」

蓮子はすらすらと言った。その言葉に嘘はないようである。宮中では師走に入ったほどよい日に歌会おさめをするのである。蓮子は歌詠みの才媛として知られているだけに、その会にでていたことはうなずける。

「麝香猫をつかまえて、蓮子さまに一目見せてさしあげとうございます。おもいがけぬお人にございましょう」

長野は蓮子の反応をうかがいながら言った。

「長野さまは麝香猫の正体をお知りのようでおじゃりますね。会わせていただきとうございます」

蓮子の顔に反応らしいものはあらわれなかった。

「麝香猫はこの方面に住まっているのやもしれません。それで往来を検分いたしております」

「このさむい時刻に難儀なことでおじゃります。はやくつかまることを祈っております」

「麝香猫は宮廷、皇室の味方です。つかまっては、蓮子さまもさぞおこまりでしょう」

「いいえ、蓮子はこまりません。一人の麝香猫がつかまったといたしましても、すぐにまたあらたな麝香猫が世にあらわれるでおじゃりましょう。この国はそもそも尊皇の国柄ですから、尊皇をほろぼすことはできません」

蓮子は臆することなく長野とわたり合った。

「左様、わが国は一天万乗、大君のしろしめすところにございます。されど公方さまはその大君から政治の大権をゆだねられておりまするぞ」

この一点に、幕府の拠ってたつ論拠はあるのだ。幕府の切り札でもある。

「それでは何故、帝と公方は仲たがいをつづけておるのでございましょう。この国の不幸ではおじゃりませんか」

蓮子の反撃もするどい。

「それは帝、宮廷が幕府にご不満をお持ちだからでございましょう。姦賊がそのあいだに入って、さまざまに帝をまよわせたてまつるから、幕府とのいきちがいが生ずるのではないでしょうか」

「そもそも尊皇とはこの国はじまっていらいの朝廷をうやまい、帝をとうとびたてまつるかんがえからきたものでございます。そのかんがえにはいささかも誤りはなきはずにおじゃります。帝をとうとぶことを非といたすならば、その帝から政治をまかせられた幕府も非と言わざるを得なくなります。幕府があまりに宮廷や公家を圧迫いたすならば、かえっ

て幕府は拠ってたつところをうしなうでおじゃりましょう」

蓮子は遠慮なく幕府や大老の立場を批判した。今まで幕府の権力者にむかってこれほど大胆不敵に尊皇弾圧の非を論じた者はいないであろう。

それでいて蓮子の態度には恐れもなければ、ひるむところもない。蓮子の言うところは、儒学による〈王覇正閏〉と〈大義名分〉の思想をもとにしている。この論をくつがえす説は幕府にはないはずである。

はたして長野の舌鋒はとまった。もともと王覇正閏と大義名分とは幕府の儒学者たちがたてた説なのである。

「さりながら今、朝廷と幕府はおおいなる行き違いの中にあり、不仲の間柄にたっておる。麝香猫や志士なる者が朝廷と幕府とのあいだを遠ざけているのだ」

「左様でおじゃりましょうか」

「幕府はこれまで一貫して、朝廷と帝をとうとんできた。それなればこそ朝廷も幕府もこれまで二百数十年もつつがなくつづいてまいった。麝香猫や志士は奸物だ。奸物たちはたおすほかにはない」

長野は論争は避けて、強引に自分の主張だけ口にした。

「ほほほ」

蓮子は長野の立場を見すかしてわらった。

「麝香猫はまもなく正体をあばかれるだろう。京にひそむ志士たちは一人のこらずつかまえて、獄につなぐ」

「もうあらかた、京に志士はのこっておじゃりません」

「まだ大物小物がひそんでおる」

「左様でおじゃりますか」

「たとえば、月照の弟にして、清水寺の和尚信海じゃ。この和尚が今や京の尊攘運動の中心人物になっておる。信海を、一両日のうちにつかまえる」

長野は幕府の作戦の機密ともいうべきことを敵方に明かした。

「信海さまをとらえるのでございますか」

蓮子の表情がここでひきしまった。そして眸には怒りの色が濃くにじんだ。

「信海は朝廷と幕府とのあいだを割こうとしている人物だ。信海を見逃しておくわけにはいかぬ。やつは不埒な悪謀をたくらんでおる」

「和尚さまはそんなお方ではおじゃりません。京の人々がみな知っております」

「和尚をゆるすのならば、六角の獄につながれておる志士たちすべてをゆるさなければならなくなる」

そう言って長野は牛車の前から一歩さがった。

「そのようなことをいたせば、幕府はますます京の人心をうしなうことでしょう」

蓮子も恐れげもなく言い、車の中に姿をかくした。
引戸がしまった。
牛車はふたたびうごきだし、白河家の屋敷へむかった。

この夜の五更、まだ未明……、
清水山の裏をおおきくまわって成就院へむかう五つの人影があった。
普通、清水寺へむかう道は、東大路から清水道を行く道筋と、五条坂をのぼって妙見堂の前をとおって行く道、清閑寺の裏手から清水山の西の低地を抜けて行く道の三筋である。が、この五人は高倉天皇陵の南をとおり、清水山の東と花山のあいだの低地を抜けて、成就院の裏へむかって行った。
厳寒の未明の時刻は身が凍りつくように寒い。山道も凍ったように固くなっている。その山道を踏んで、五人は黙々と足をはこんだ。むろん提灯などの明りはたずさえていない。
十二月のかすかな月明りだけがたよりである。
先導するのは、ここの地理にもくわしい長五郎である。麝香猫、深草、半兵衛、お甲がそれにつづく。
五人とも鎖帷子を着こみ、鎖入りの手甲、甲掛け、脚絆、草鞋に身をかためている。成

就院の住職信海を警固するためだ。できるならば京都脱出もかんがえている。
麝香猫はこの夜、二刻（約四時間）ほど前、長野が一両日中に信海捕縛に出動するという情報を得たのだった。一両日といえば二日くらい余裕がありそうだが、はやければ今夜中にも出動するということである。それで至急に四人に連絡をとって、信海の警固にむかったのだ。
月明りが五人の緊張した顔を浮かびあがらせている。麝香猫は黒い頭巾をかぶっている。お甲も黒い覆面で顔をかくしているので、女だということはわからない。
麝香猫にその情報をもたらしたのは、蓮子である。
しだいに暁が近づいてきた。
東山の峰々が薄ぼんやりと東の空にようやく姿をあらわしはじめていた。けれども山の道はまだ暗い。足もとも危い。
成就院は近いようでいて、山を大迂回しているので距離は遠い。到着するまでに、まだ時間はかかりそうだ。
一行五人はいそぎ足でひたすら成就院へむかって行った。
麝香猫一味は先々月、全力をあげて成就院の前住職月照を京都からなんとか脱出させることに成功した。けれども月照は西郷、有村とともに薩摩へむかったものの、薩摩藩へ入国することはできなかった。月照は錦江湾で入水してしまった。麝香猫一味はその責任を

つよく感じていた。死地へおくりこんだという悔いがあった。自分たちがもっとべつのところへ逃がしていたら、月照は死ななくてもすんだかもしれないという無念のおもいがあるのだ。

それだけに、今度は信海の警固に万全を期さなければならなかった。月照につづいて信海までもうしなえば、京都における尊攘運動は土台からくずれ去る。いったん崩壊した土台をまたきずくのは至難である。これまでの年月が無駄になる。信海を何としても死守しなければならなかった。

かねてから信海のまわりにつねに危機感はあったが、ついに幕府は召し捕りに踏みきったと言う。

その信海を警固、脱出させてやるのは麝香猫をおいてほかにはない。それで一味は未明の闇をついて、ひたひたと成就院へむかっているのだ。

すでに成就院が捕り方にかこまれている可能性もないではない。一味の心配はそれだけである。

いかに強固な尊皇思想の持主とはいえ、幕吏にかこまれてしまえば、幕府権力にたいして手も足もでない。召し捕られて、獄につながれるしかないのである。

(信海和尚、無事であってくれ)

麝香猫の胸にあるのはこの一事である。無事でさえあってくれれば何とかすることができる。

一行の足はしだいに早くなっていった。幕吏たちよりも一歩でもはやく成就院に到着したいというおもいである。

夜は東山の空から徐々に明けそめてきた。

清水寺参道

半刻（約一時間）ほど前……。

東大路から五条坂をのぼって清水寺をめざす一丁の乗物があった。

乗物は駕籠とちがって、貴人や高官がつかうものである。陸尺と呼ばれる者がかつぐ。

この乗物は先頭に提灯をつけている。まだ五更であるから、五条坂はほぼ暗闇である。月明りはさしているが、坂道をあるくにはこころもとない。

乗物の引戸は半分ほどひらいており、中の主がしきりにあたりを人さがしするように見まわしている。蓮子である。

蓮子の顔には焦りの色が濃く浮かんでいる。必死な様子で周囲を見まわしているのがわかる。

ときにすがるような表情さえうかがうことができる。

「はやく行きやれ。時間はない」

蓮子は陸尺に声をかけるときもある。切羽つまった声である。

「人影は見あたらぬか。内記、よく見てたもれ。麝香猫が成就院をめざしているはず」

蓮子は乗物にしたがう白河家の諸大夫花房内記ともう一人の家来小倉竹之助に息をはずませるように命じた。実際、蓮子自身は死ぬようなおもいにせまられている。ふだんの自信と落着きはなく、めずらしく取りみだしたふうさえ見える。

「麝香猫は本当にこちらにきておるのですか」

花房が問うと、

「本当じゃ」

蓮子は叱りつけるようにこたえた。

「麝香猫をご存じでござりますか」

花房がかさねて聞いた。

「多分、知っておる。麝香猫の命があぶない。一味の命もあぶない。はやくそれを知らせてやらねば。幕府の者たちに取りおさえられる」

焦りたつこころのままに蓮子は言った。

花房や小倉には経緯のよくわからぬところがあるのだ。

ことは蓮子が歌会おさめから屋敷にもどって、惟在に長野の言葉をつたえたことにはじまる。蓮子は今にして、それを悔いているのだ。

長野主膳が一両日のあいだに信海を召し捕らえると言ったことをつたえたとき、惟在はさほどおどろいた顔はしていなかった。かくべつの衝撃もなかったようである。夫は所詮、

世の中のうごきには無頓着なのだろうと蓮子は失望をまじえておもった。蹴鞠大納言と呼ばれている夫には尊皇の大事にも無関心なのだと、気落ちしながらかんがえた。

ところが、それから間もなく、惟在がひそかに屋敷をでて行く気配に蓮子は偶然気付いた。

（今ごろ、何処へ……？）

蓮子は腑におちぬものをおぼえ、部屋の窓をひらいて、外をうかがって見た。

月の光の下に惟在の姿が見えた。惟在は表門、裏門、通用門のいずれにもむかわず、庭の隅から築地塀を軽々と乗りこえて、外へでた。

蓮子は夫の振舞いに息をのんでおどろいた。普段の夫とはまるで別人のような俊敏さと勇敢さを持った人間に見えたのである。今まで夫にこのような行動を見たことはなかった。衝撃的なものを見たようなおもいであった。

月光の中の惟在には勇壮な凛乎とした雰囲気が感じられた。蓮子のこころをつよく打つものがあった。

（夫は何をしにでかけた？）

蓮子にはまったくおもいあたるところがなかった。蓮子のこころに謎が生まれた。今まで夫のことについてこれほど真剣にかんがえたことはなかった。

これまで惟在の行動についてほとんど関心をいだかなかった。夫は夫、自分は自分という暮しをつづけてきたのだった。今夜はじめて夫の行動につよい興味を持った。

夫が急にこんな時刻に外出した原因は、自分が惟在に言った言葉にあるとおもった。長野が信海を一両日中に召し捕ると言ったことである。それ以外の原因はまったくかんがえられなかった。

もう一つの疑問が蓮子の胸に浮かんだ。

（どうして長野は信海召し捕りのことを自分にはなしたのだろうか？）

長野側の立場からすれば、これは重大な作戦上の機密である。他人には洩らしてはならない事柄のはずだ。長野ともあろうしたたかな男がそんな軽はずみなことをするのは不思議である。

（罠だ！）

と気づいたのはその直後だった。戦慄が蓮子の体をはしりぬけた。

蓮子にそれとなく機密を洩らし、それを惟在につたえるのが長野の目的だとわかったのだ。

そこまでわかれば、惟在が長野にとってどのような意味を持つ人物かがおのずから理解される。惟在は長野にとっての強敵であろう。最大の強敵と言えるかもしれぬ。そういうことが蓮子にはわかった。

これで蓮子には麝香猫の正体が読めたのである。

（夫がそんな人物であったとは！）

おもいもよらぬことだった。蓮子はこの発見に興奮をおぼえていた。いまだかつてないはげしい興奮におそわれた。

その衝撃がさめたとき、蓮子は夫に急を知らせなければならないことをさとったのだ。急報が間に合わなければ、麝香猫一味は清水寺成就院に待ちうける長野の指揮する幕吏たちの群れに取りかこまれてしまう。一味は一網打尽にされるだろうと蓮子はおもった。何ともたくみに長野は蓮子に罠をしかけたものだ。蓮子はまんまと長野の意のままにあやつられ、麝香猫のおびきだしに一役買ったことになる。

麝香猫を危機においこんだのは自分だと蓮子はさとったのだった。何というおろかな自分、妻として何と軽はずみだった自分……、と蓮子ははげしく自分を責めた。おろかな自分がかなしかった。自分は夫について何も知らなかったのだ。妻としての何の価値もない自分だった。

夫の蹴鞠ぐるいや、世上への無関心は世の中の目をあざむく偽装だった。しかもその偽装は見事に成功していた。今まで軽んじ、あなどってきた夫が尊攘の英雄麝香猫であったとは……。

蓮子は無知であった自分がはずかしかった。世にこれほどおろかだった妻はいないだろうとかんがえた。夫が尊皇のために命を賭けたはたらきをしていたとき、蓮子は宮中の公

家やそのほかの者たちからちやほやされ、いい気になっていたのだ。少々の美貌と才気におごっていた自分がみじめにおもえ、はずかしかった。

夫はそんな自分に文句一つ言わなかった。軽侮にたいしても耐えてくれた。何と罪ぶかい女だろうかと蓮子はおもった。

その夫ばかりでなく一味の面々まで窮地におとしいれたかもしれない自分がゆるせなかった。それで取るものもとりあえず、花房と小倉をつれ、清水寺へむかったのである。

蓮子は自分の命をかえりみる気はなかった。麝香猫とその一味をたすけだしたい一心であった。

（ご無事でいらしてください。身の危険はわたしが替ってお受けいたしましょう）

蓮子は五条坂をいそぎながら、八百よろずの神にいのった。

妙見堂の前をすぎてしばらく行ったころ、前方の月光の中にうごく人間の影らしきものが黒々と見えた。それも、三つや四つの数ではない。

「止めてくりゃれ」

蓮子は乗物を止めて、おりた。乗物では、敵の目につきやすい。こちらのうごきも不自由である。

そこから蓮子は徒歩になり、花房と小倉とともに提灯の明りもなくすすんで行った。

（敵か、味方か……？）

前方の人影がどちらであるか、まだわからない。
けれども十人以上はいそうな人数からして、麝香猫一味ではなく、長野が指揮する幕吏たち一団のような様子だ。一団は音もなくひたひたと闇の中を清水寺へむかっている。その様子も獲物を追う勢子のような切迫した雰囲気が感じられる。
やはり長野は罠をしかけて、麝香猫がでてくるところを待ち受けようとしているのだ。
長野は麝香猫の正体をとうとう見やぶったのである。
しかもその正体は九分どおり惟在と予想される。蓮子は胸をギュッとしめつけられるような切ない気分になった。
「気づかれてはなりません」
花房が前方の一団に気づかれないよう注意した。
しかし、自分たちより先に長野一団が麝香猫に接近しては、蓮子がここまで足をはこんだ意味がない。自分たちが先に麝香猫に敵の罠を知らせてやらねばならないのだ。
「成就院への近道はないか」
蓮子は花房にたずねた。近道を行くしかないのだ。
清水寺は朝廷の勅願寺であるから、花房は何度も足をはこんでいる。
「五条坂から成就院へ行く道は二つあります。これが一つ。もう一つはやや坂が急になりますが、距離は近いとおもいます」

「花房、そちらの道を行こう。坂が少々急でも、そんなことはかまわぬ」
蓮子は躊躇なく言った。坂道をいそいで足の皮膚がやぶけようと、ころんで足の骨が折れようと、そんなことはかまわないという気持にかりたてられた。
「道はわたしが知っております。そちらへまいりましょう。麝香猫はもう成就院についているか、その近くまで行っているでしょう」
花房は蓮子の胸中をよく知っていた。
三人は道をそれて脇道へむかっていそいだ。
東山の連峰の空がかすかに灰色と薄紫色に明けそめてきた。
やがて脇道にでた。こちらは参道というよりは抜け道といった感じだ。道幅はせまいうえに、石がごろごろしており、木の枝や根もところによっては通行の邪魔をしている。
何とかして長野一団より先に麝香猫一味に合流したい一心で、この脇道をすすんだ。
花房が蓮子の手をとり、小倉がすぐ後ろについてあるいてくれた。
やはり参道を行くよりもだいぶ歩行が難儀である。足が石にぶつかったり、木の根につまずいたりした。けれども気持が張りつめているため、転倒することもなく、なんとか成就院に近づいて行った。
長野一団も、すこしでもはやく到着しようと参道をのぼっているにちがいない。見つかれば、おそいかかってくるだろう。戦いになれば、勝敗はあきらかである。花房と小倉は

斬られ、蓮子はとらえられて長野の虜にされるだろう。

その前に麝香猫に危急を知らせなければならない。そして信海をつれて清水寺を脱出してもらいたいのだ。

蓮子の胸のうちは惟在への慚愧と、麝香猫と信海をたすけたい一念でいっぱいである。五十歩でも百歩でもはやく成就院に着かねばならない。もし途中で麝香猫一味を見つけることができたら僥倖である。

「だいぶ明けてまいりました。見つからぬようにいたさなければ」

花房はたえずそれを心配していた。花房と小倉はあくまでも蓮子をまもらなければならない立場である。

小倉も終始まわりの様子を気づかいながらすすんだ。

長野一団もまちがいなく成就院をめざしてのぼりつめてきている。気のせいか、一団の足音が近くに聞えるような気がした。どうかすると、彼等の呼吸さえつたわってくるような錯覚をおぼえた。

チチッ

蓮子の足もと近くから、寒鳥が眠りをさまされて、急に飛びたった。

蓮子も花房も小倉も、気づかれたのではないかと肝を冷した。

成就院の堂塔はもう暁の大気の中に見えている。

成就院の門が近い。

蓮子は一気に門をめざして駆けだしたい気持であった。

半歩先を行く花房が蓮子をふりかえった。花房も蓮子とおなじ気持なのだ。小倉もおなじであろう。

道が一つまがっている。まがった先で、参道と合流する。

「あっ！」

道をまがったとき、花房がおもわず声をあげた。蓮子の手をにぎっている花房の手がびくっとふるえた。

蓮子もつられて悲鳴をあげかけた。

右手後方の参道から、雲の中から湧きだすようにいくつもの人影があらわれたところだった。

人影は十以上かぞえられた。距離は半丁ばかりはなれている。が、当然むこうからもこちらが見える。

「長野と捕り方だ！」

花房がちいさくさけんだ。

その声と同時に、蓮子ははしりだした。

花房も小倉もはしった。

門をめがけて三人は夢中で駆けた。
門の扉はまだ閉じている。が、脇の潜り戸はあいているはずである。あいていなければ万事休すだ。
後方から幕吏の追ってくるあわただしい気配が聞えた。
蓮子は懸命に駆けた。足も折れよと駆けた。
花房がどんと体当たりするように潜り戸にぶつかった。
蓮子の前にぽっかりと門内の風景がひろがった。
三人は門内にとびこんだ。
門内のいちばん近くに庫裡があり、正面に本堂がある。
蓮子は一瞬、まよった。和尚が朝の仕度をしているとすれば庫裡であり、すでに朝の勤行に入っているとするなら本堂だ。
蓮子はいちばん近い庫裡へむかってはしった。
花房と小倉もそれにつづいた。
庫裡の戸があいており、内部に人影のあるのが感じられた。蓮子は神仏にいのる気持であった。

長野は一団を指揮して参道をはしった。

文吉は〈猿〉の異名どおりすばしこく、長野の前を獣のようにはしった。
成就院の潜りを駆けこんだ三人のうち、女が蓮子であることは勘でわかった。こちらの作戦を蓮子が読んで、急をしらせに駆けつけたのだと見た。
「麝香猫と信海を逃すなっ」
はしりながら長野はさけんだ。
蓮子がここにきているとは、長野の予想外であった。蓮子は夫とはあまりうまくいっていないので、よもや命をかけて危急をしらせに成就院に駆けつけてこようとはおもわなかったのである。
捕り方たちも門へむかって殺到していった。
通常、寺院は町奉行所の管轄外であるが、所司代にはそれを超える権力があり、さらに現在の長野は超法規の権力を有している。寺院も神社も斟酌の必要はなかった。
門内はしんと暁の薄ら闇の中にしずまりかえっている。まだ、あまり人気は感じられない。
（本堂か、庫裡か、それともべつのところか？）
長野も蓮子とおなじようにまよった。
薄ら闇をすかし見ると、本堂のおおきな仏壇に灯がともっている。
そして朗々たる読経の声がひびいてきた。長年きたえこんだ読経の声である。肚の底に

ひびくような声は三年や四年の修行ではだせるはずがない。
（和尚の朝の勤行だ）
と長野はおもった。間に合った、とほっと息をついた。
「本堂へ！」
長野は号令した。
捕り方たちはいっせいに本堂にむかって殺到した。
麝香猫はまだきていないのか、それともどこかにひそんでいるのかと長野はおもった。
「信海和尚、経の途中を失礼いたす。お上の御用だ」
長野はそう声をかけ、本堂の階をあがって行こうとした。
そのとき、庫裡の裏口からいくつもの人影が脱出して成就院の裏門のほうへはしって行くのが見えた。その中の一人はあきらかに坊主頭である。
（信海と麝香猫？）
長野は一瞬まよった。どちらへむかうべきか逡巡した。
「庫裡の裏口へいそげ！　和尚はむこうから逃げたぞっ、文吉、いそげ！」
長野は命じた。
文吉が猿のように一気に階段をとんで、庫裡のほうへむかって疾った。
ほかの捕り方たちもいっせいに階段をはしりおり、文吉の後につづいてはしった。

庫裡をでた一団は成就院の裏門を脱出した。信海と警固の麝香猫一味たちにまちがいない。
本堂で読経している僧侶は逃げる様子がないので、捕り方の一人に見張りを命じて、長野も裏口へむかってはしった。
境内の暁を切り裂くように殺気をはらんだ人影が何人も疾走していった。
それにおどろいて寒鳥が何羽も境内で羽音をたてた。
長野の前を寒鳥が一羽飛びたって、上空へ舞いあがっていった。そして寒鳥の鳴き声があちこちからあがった。
箒を持った小坊主が一人、本堂の裏口からでてきて立ちすくんでいるのが見えた。
長野はそれらに見むきもしないで、成就院の裏口を駆けぬけた。
文吉はすでにそれよりもはやく裏口を駆けぬけて、信海と麝香猫一味を追って疾走していた。
逃げる者と追う者とのはげしい競走がしばらくつづいた。
「逃げても無駄だ！　清水寺は取りかこまれておるぞっ」
はしりながら長野はさけんだ。これは偽りであるが、この威しはしばしば功を奏することがある。その言葉を信じて、本当に脱走を断念してしまう者もいるのだ。
が、信海と麝香猫一味は断念しなかった。一瞬の躊躇もなく、逃走をつづけた。

成就院の裏門は、清水坂にいたる裏参道につうじている。
「清水坂にも捕り方が待っておるぞ！」
長野はもう一度声をあげた。
しかしこれも無駄であった。脱走をあきらめる者はいなかった。
裏門と裏参道のあいだには、杉と雑木の林がある。その中を一目散に逃走していった。
長野らも林の中を突っぱしった。
距離はいくらかちぢまった。相手方には信海や蓮子がいるためかもしれなかった。
林をぬけると、もう裏参道である。
信海や麝香猫一味は裏参道をはしった。
この道はけっしてはしりよくはない。道幅もひろくはないし、うねりくねるような坂道がつづいている。
文吉がぐんぐん距離をちぢめた。文吉は評判のよくない目明しだが、目明しとしての力量は京都町奉行所のなかで抜群である。探索や尋問もうまいが、最大の強みは脚力である。
ついに文吉が後尾にならび、追いついた。
「逃げても無駄だっ、逃げるな！」
文吉の威嚇する声がひびいた。
ほかの捕り方たちも追いついた。

「逃げる者には容赦はしないぞ」
ふたたび文吉がさけんだ。
こんな威嚇の言葉が効果を発揮するはずもないが、先行していた麝香猫一味らしい者たちが、逃走をあきらめた。
しかも抵抗をしなかった。彼らはつぎつぎに捕り方たちにつかまった。
彼らは頭巾をかぶっていたり、覆面をもちいていた。
信海らしい坊主頭もつかまった。全部で五人である。
はげしい抵抗を予想していた長野は妙に気がぬけた。
「頭巾、覆面をとれ」
長野が命ずると、捕り方たちがつぎつぎに頭巾や覆面をはいでいった。
おどろくべきことに、つかまえた連中はみな坊主頭であった。
捕り方たちは呆気にとられた。長野も一瞬、茫然となった。全身から力がぬけていった。
坊主頭が五つならんでいる。
「信海和尚はいるか。麝香猫はいずれだ？」
長野は念のためにたずねた。
文吉やほかの捕り方の二、三人は信海の顔を見知っている。いつか召し捕るときがくるとおもって、事前に和尚の顔をおぼえておいたのだ。

が、その和尚の姿はない。
「和尚はおらん」
文吉が言った。
「しまった、囮だ！」
長野はうめくように言った。
「和尚や麝香猫はべつの道を逃げたんや」
文吉もうめいた。まんまとだまされた。
「お前たち、よくも公儀をあざむいたな。罪はおもいぞ」
長野は悔しまぎれの捨てゼリフを口にしたが、もう手おくれだ。
「わたしたちは、ただ裏の参道をどこまでもはしれと和尚さまに言われましたんや」
坊主たちは情ない顔で言い訳をした。
「返せっ、ひき返せ！」
長野は輩下たちに命じた。こんなことをしているあいだに、本物の信海や麝香猫一味はほかの道をどんどん逃げているにちがいないのだ。
またしても麝香猫にしてやられたという悔しさで長野の胸はいっぱいである。しかも今回は蓮子まで相手にくわわっているので、怒りは一倍だ。
「本堂と庫裡へもどれ！」

長野は命じながら、自分も駆けだした。
本堂で朝の読経をしていた坊主が本物の和尚だったとみるべきなのかもしれぬ。距離があって、見わけられなかった。
一同はふたたび駆けた。自棄くそになって駆けもどっていった。
長野の顔は憤怒にゆがんでいる。何としても今回は麝香猫を信海ともどもとらえなければ気持がおさまらないのだ。京都における最高権力者としての面目は丸つぶれとなる。権威失墜のおそれもあった。これに蓮子がからんでいるとなると憎悪は倍増した。今は蓮子も憎かった。
暁は徐々に払暁へと移行していた。暁の闇はほとんどはらわれ、地上に朝の光がおとずれてきた。
一同は夢中で成就院に駆けもどった。
長野はまっ先に本堂へ駆けあがっていった。
「和尚はおらぬか」
本堂の廊下から長野はさけんだ。
さいぜん勤行中であった和尚の姿は見えなかった。
長野は本堂の中をさがしあるいた。
文吉も本堂の中をさがした。

見張りにのこしておいた捕り方の姿も見えぬ。
長野の気持はあせってきた。
「米八、どこにいる！」
文吉はのこしていった捕り方の名を呼んでさがしまわった。
「いたっ、米八がおりました」
おおきな仏壇の裏のほうから文吉の声が聞えた。
長野は声のしたほうへいそいだ。
ほかの捕り方たちも仏壇の裏へむかった。
仏壇の奥に押しこめられた男がいた。それが米八だった。
米八は猿轡をされ、手足をきびしくしばられていた。
文吉が米八をひきずりだし、手ばやく猿轡や縄をといた。
「麝香猫にしてやられました。やつらわてをしばって、信海和尚ともども逃げて行きよりました」
米八は情ない声でうったえた。
長野らがはじめに本堂に到着したとき、信海も麝香猫たちも蓮子も本堂の中にかくれていたのだった。庫裡から裏門へ脱出していく人影を見て、いそいでそれを追跡したのが重大な誤りだった。麝香猫の策略にのせられたのだ。

「表の参道へむかったにちがいない。半分は表参道を追え。のこりは境内をさがせ！」
長野は捕り方たちに命じた。
捕り方たちは本堂をでて、二手にわかれた。
長野と文吉は表の参道をふたたび追って行った。
長野はあくまでも表の参道を追い、文吉は途中からわかれて蓮子たちがきた脇道を駆けおりていった。
参道と脇道は途中で合流し、五条坂にいたる。五条坂の麓近くで、長野と文吉は合流した。
「どちらにもいなかった。麝香猫と信海め、いちはやく逃げ去ったか」
長野は無念やるかたない気持である。麝香猫、信海、蓮子の三人にさんざん踏みつけにされた気分だ。
文吉も今回はもう断念せざるを得なかった。
長野は一応、輩下たちにあたりを探索させた。が、五条坂の周辺にはあやしい人影は見えなかった。
「引きあげだ」
長野は無念の号令をかけた。これだけの人数を動員して、鼠一匹つかまえられなかった。

禁裡の賊

早朝の光が地上にみちてきたころ、男女一組の人影が丸太町通りから御所の築地塀ぞいに寺町通りへまがった。

御所の周辺はまだしずかである。ほかに人影はない。

蓮子は惟在に手をひかれながら、足をひきずっている。昨夜からこの払暁にかけて、蓮子はおもいもよらぬ活動をした。自分がこれだけのはたらきをしたことが信じられぬおもいであった。

やればやれるものだという驚きと発見があった。足は膝ががくがくするほど疲れているし、足首、足の裏、腰までが痛い。

しかし痛みにもかかわらず、蓮子はそれを苦痛だとは感じなかった。夫の惟在が手をとってくれているのが、何よりもこころ丈夫であった。この夫がついているかぎり何物もこわくないという勇気が湧いた。

恐怖はこころのどこかにあるはずだが、惟在の手のぬくもりを感じることで大きな安らぎにつつまれていた。夫の偉大さ勇敢さ純粋さに蓮子は誇りと尊敬をいだいていた。この人と一緒ならどのような運命にも身をまかせられるとおもった。

もし幕府の手につかまり、獄につながれようともこわくはないし、たとえどんな刑に処せられたとしても無念ではなかった。夫とともにどこへでも行こうという気持である。

このような夫をもったことへの幸せと誇りに蓮子は酔い痴れていた。

今までの自分はおろかであったが、昨夜から今暁にかけて蓮子はあらたな発見をし、あらたな人間にかわったのだ。足はつかれて痛いが、その痛みが幸せの実感になった。腰もひどく重いが、それは自分が旧来とかわった証しであった。

蓮子は今暁、麝香猫一味に身をもって危急をしらせ、囮を裏口から逃がし、自分たちは信海をともなって本堂から脱出したのだった。参道へむかい、蓮子がきた脇道を逆にくだって、一行は途中から清水坂へぬけた。

寺町通りをあるきながら蓮子は足をひきずった。もうどう仕様もないほど両足の痛みがはげしくなっていた。痛みが頭にまでつきぬけた。

惟在に手をひかれても、足が前へすすまなくなった。

「血がながれている」

惟在が蓮子の足を気づかい、血の多さにおどろいた。

「大丈夫です」

蓮子は夫にもたれて言った。

「血止めをしよう」
惟在はそう言い、自分の衣の裏地をひき裂いて、それで手早く蓮子の両方の足に巻いた。
蓮子は惟在のするままにまかせていた。夫のすることには何事にも従順な妻の心境でいることが幸せであった。
「今まで、何も知りませんでした。あなたを無能な夫だとおもっておりました。おゆるしください。愚かなのはわたくしでした」
蓮子は言った。
そのとたん、蓮子の体が宙にふわっと浮いた。惟在が抱きあげたのだ。
「あるくのは無理だ。抱いて行こう」
おもいがけぬ夫の言葉である。
「人目がおじゃります」
蓮子はちょっと抵抗を感じた。
「なに、見る者はおらぬ」
惟在は全然まわりを気にしなかった。信海と花房と小倉はだいぶはなれてついてきている。
蓮子は惟在のひろい懐に軽々と抱かれてこころよかった。今まで蓮子は夫にこのような抱かれ方をしたことがなかった。

というよりも、今まで蓮子と惟在とのあいだには距離がありすぎた。それが一夜にしてまったくなくなった。この世で自分にいちばん近い人になった。
夫を理解するのに今までなんと遠まわりをしてしまったことかとおもった。自分に奢りがあったせいだと反省した。
夫の体のぬくもりが蓮子の全身につたわってくる。
蓮子はこの世に人間として生まれてきた幸せを今感じ、充実感をおぼえた。
夫がこよなくいとおしかった。この人の妻である自分に幸せが感じられた。
惟在は大股で蓮子を抱いてあるいた。寺町通りにまだ人影は見えないが、もし人通りがあったとしても、惟在は平気で蓮子を抱いてあるいたであろう。蓮子もはずかしさがなくなった。
「追手は？」
蓮子はただ一つ気がかりがあった。長野らは囮に気づいて成就院を探索し、なおかつ追跡してきていると見るべきだった。長野は麝香猫と信海をとりにがして切歯扼腕しているはずである。
しかも長野は麝香猫の正体が惟在であることに気づいたはずだ。
「まだ近くまではきていないだろう」
惟在はそう踏んでいた。

「長野は正体がわかったはずです」
「わかってはいても、証しは何もない。昨夜から今暁までのあいだ顔も見られていない。当分、長野は手だしはしてこないだろう」
この推測に惟在は確信があった。いかに今京都で権力をふるう長野であっても、証拠なしには前大納言に手をだすことはできない。白河家に踏みこむことも不可能なのである。
しかし、むろん惟在への警戒と探索はきびしくなろう。それは覚悟の上だ。探索とは証拠さがしのことである。惟在はそれをかいくぐって活動することになる。
「長野はしたたかな男でおじゃります」
蓮子には心配があった。
「こちらにも幕府へのそなえはある。あるからこそ今まで戦ってこれた」
惟在としても、まだ戦いはなかばである。幕府の弾圧がやまぬ今、戦いをやめるわけにはいかなかった。幕府の弾圧はこれから一層はげしくなりそうだ。惟在はそれにむかって戦いをつづけていかなければならない。
「わたくしは今まで何の手助けもできず、かえって邪魔をいたしておりました。お詫びの申し上げようもおじゃりません」
蓮子は抱かれて行きながら言った。惟在は丈高く、大きな体をしているので、抱かれごこちは素晴らしい。どんなことがおこっても、かならずまもってくれるだろうという安堵感がここちよいのだ。

「麿がやむにやまれずやっておること。人を巻きぞえにはしたくない。つかまればきびしい罰が待っておるので」
「わたくし、あなたさまの妻でございます。妻らしいことを今まで一度もいたしておじゃりません」
蓮子は今までの自分が泣きたいくらいかなしかった。
「今日、すばらしいはたらきをいたしてくれたではおじゃらぬか。もし成就院にしらせにきてくれなければ麿も信海和尚も幕吏の手につかまっていたかもしれぬ。命をたすけられた」
惟在は蓮子をなぐさめるように言った。今までこれほど可愛い蓮子を見たことはなかった。
「足手まといにならぬかと心配でおじゃりました。無事にもどれてうれしゅうございます」
「無事にもどれたのは、そなたのお蔭じゃ」
惟在はそう言いながら寺町御門の前に立ち、門をとおった。ここまでくればもう安心である。
惟在は蓮子を屋敷におくりとどけてから、信海とともに禁裡御所へむかった。

「和尚の身柄はしばらく帝がおあずかりになってくださります。ここよりも安全なところはほかにございますまい。世の中が落着くまで、禁裡御所の内においでになっていてください」

惟在の言葉に、信海はおどろき、足をとめた。

「恐れおおくも、帝のおそば近くにかくまわれるなど勿体なきことにございます。帝にご迷惑がかかってはなりませぬ。遠慮させていただきます」

信海は恐縮に身をこわばらせて言った。信海は今暁の出来事で身心ともにくたびれはてているにもかかわらず、頑として惟在の言葉を聞き入れようとしなかった。

尊皇家の立場として信海の言うことは当然であった。

「さりながら、そういたすよりほかに和尚の安全な場所は京都にはおじゃりません。しばらくのあいだ禁裡御所の中におとどまりください。麿、いや、麝香猫からのおねがいです」

月照和尚を薩摩へおくりこんで後悔の念にかられている惟在としては、どうしても信海に危険をくぐりぬけてもらわねばならないのである。

「一介の僧侶が禁裡にかくまわれるなど、わが国の歴史にもかつてない……」

信海はあくまでもこだわった。

「何をおっしゃられますか。和尚は朝廷の勅願寺の住職ではござりませぬか。その住職が禁裡にお入りになられたとしても、何の不思議もおじゃりません。早くなさらねば、長野らが追いついてまいりましょう。みなの努力も水の泡になりかねませぬ」

惟在がそこまで言うと、ようやく信海は決心した。

「まことに恐れおおく、勿体ない。身のちぢむおもいです。惟在卿にもご迷惑をかけます」

「迷惑にはなりませぬ。和尚にはずっと健在でいていただいて、尊攘運動の中心になってもらわねばならないのです。今わが国は重大な岐路にさしかかっています。大老や長野らのなすがままにさせておけば、百年千年の大計をあやまることになります。それをふせぐためにも、尊攘運動をつづけていかなければなりませぬ。兄上の月照和尚もおなじかんがえを持っておられました」

「そのご期待にわたしがこたえられるかどうか……」

「和尚はわれわれの期待にこたえなければならないのです。亡き兄上もそれをおのぞみでしょう」

惟在は信海をつよくはげました。

二人の足は仙洞御所と御花畠のあいだをとおって、禁裡の南門へむかった。

禁裡御所は南にむかって建っている。

信海はおもいがけず、天皇のおわす禁裡に足を踏み入れることになった。

正面中央に御所の正殿というべき紫宸殿の建礼門と周囲をかこむ塀が見える。紫宸殿は九間三面、単層、屋根は入母屋造、檜皮葺の大建築であり、天皇の即位、譲位などの大儀がおこなわれる場所である。前の庭は南庭といい、白砂を一面に敷き、南西東の三方には丹朱の廻廊をめぐらし、南に承明門、東に日華門、西に月華門がある。十八段の階の左右には、左近の桜、右近の橘がある。

信海は正面、門外にがばと跪き、砂利石に顔をこすりつけるばかりにひれ伏して、天皇のおわす方へむかって何度も遥拝した。

遥拝したまましばらく時間がたった。

「和尚さま、さあ」

惟在に声をかけられて、ようやく信海は立った。信海は体の震えがいつまでもとまらなかった。恐れおおいおもいで、なかなか足が前へすすまなかった。

「もったいなきことで……」

信海は惟在にかかえられるようにしてあるいた。

紫宸殿の西北が天皇の日常の御座所である清涼殿である。中殿とも呼ばれる。四方に廂をめぐらし、四方拝、叙位、除目などの行事がおこなわれる。

清涼殿を前方東に拝して、惟在と信海はなおもすすんだ。

紫宸殿の北東には小御所、御学問所、御常御殿、花御所などがつづいて建っており、それらの北に皇后宮御殿がある。

惟在が信海をみちびいていったのは、諸大夫間である。ここは宮中に参進した者がまずひかえるところである。

惟在は御車寄から入り、信海は諸大夫間の入口で待った。御車寄は宮家や公卿、殿上人が昇殿するところである。

諸大夫間のむこうは萩壺と呼ばれる庭であり、さらにその先に清涼殿がある。諸大夫間と清涼殿は渡廊下でつづいている。

惟在は信海を諸大夫間に案内した。

諸大夫間もいくつもの部屋から成る。周囲を縁側がめぐっていて、次の間、ひかえの間、納戸などがある。南にひらけた縁側には朝の光がみちている。

惟在はいちばん奥に位置するひかえの間に信海をみちびいた。

「ここはふだんつかわれていない部屋で、誰も出入りをいたしません。ごゆっくり寛いでいただけるとおもいます」

惟在は父の前関白をつうじて、この部屋を信海のために用意したのである。ひかえの間とはいっても八畳のひろさがあり、床の間もついている。つかわれていない部屋ならば安心もできる。

「禁裡にかくまわれていようとは、長野も思いつかぬでございましょう」

「ここ以外に安全な場所とてござりますまい」

惟在もここならばという安心感があった。

惟在には信海に今後おおいにはたらいてもらいたいという期待がある。尊皇家のおもだった人物はこのたびの幕府の大弾圧で大方召し捕られてしまった。信海だけはなんとしてもまもりとおしたいという悲願があった。今後ふたたび尊攘運動を展開していくうえでの指導者を信海に期待していた。信海以外にそれにふさわしい人物が見当らなかった。

惟在が麝香猫（じゃこうねこ）として尊皇家の京都脱出に手を貸しはじめたのは、近来の朝廷、皇室の疲弊、凋落（ちょうらく）と幕府の弾圧に痛憤をおぼえていたためである。折から尊皇運動に攘夷運動がかさなって、おおくの尊攘家が世に輩出したが、朝廷内部にあっても尊皇を実現するための人材がでなければならぬとかんがえ、みずから大納言の地位を捨ててこの運動に入ったのだった。

父政通（まさみち）も兄輔熙（すけひろ）も麝香猫の正体が惟在だということはまったく気づいていない。肉親に気づかれるということは、外部にもれる第一歩である。父も兄も朝廷の枢要の地位におり、迷惑をかけたくはなかった。それで妻にも内密にしておいたのだが、蓮子には露見した。蓮子は惟在が麝香猫であることに驚きはおぼえたが、衝撃はうけなかったようである。むしろよろこびと感激をおぼえたようだ。

しかし今後も蓮子に迷惑をかけてはならないという自戒はあった。もし自分がつかまれば、蓮子もそれに連座することはあきらかである。それは惟在にはしのびがたいことだった。

信海は何日か諸大夫間ですごした。

はじめは緊張の日々をおくっていたが、何日かでようやく慣れた。ここにさえおれば、衣食住にこと欠くことはなかった。外敵からの脅威もない。

けれども長年僧籍に身をおいた者として、これから将来ずっとここで暮していくことは想像できなかった。いつまでここに居ればよいのかということをかんがえた。世の政情がかわらぬあいだは、ここをでられる日はこない。それをおもうと信海のこころはしずんだ。

しかも、こころは尊皇運動にはやれども、身は幽囚（ゆうしゅう）のごとく一歩も諸大夫間をでることはできない。尊皇についての思索、勉学だけが信海の日課となった。

宮中に参進する者は諸大夫間にまずひかえる。宮家、公卿といえどもここにひかえる。そういうとき、信海は自分のあたえられた部屋にひきこもらざるを得ない。

しかし、たまに信海は部屋をでて参進する者を観察するときがある。いろいろな者が宮中をおとずれる。

政治的な目的をもってくる者もいる。尊攘方といわれる鷹司政通、輔熙父子、近衛忠熙（ただひろ）、三条実万（さねつむ）、一条忠香（ただか）などがくることもあれば、幕府方とみなされる関白九条尚忠がやって

くることもある。ときには諸大夫間で呉越同舟する場合もある。

あるとき、信海は日のあたる縁側にでていて、とつぜん参進した者があって、いそいでひかえの間に引きあげようとした。

そのとき九条尚忠がはやくも家来をつれて、諸大夫間に入ってきたために、廊下で信海とすれちがうことになった。

信海はふかぶかと礼をして行きすぎようとしたが、そのとき尚忠の家来がするどい視線をむけてきた。

（島田左近だ）

とすぐに信海はわかった。

三十歳前後のいかにも隙のない、高慢な感じの男である。関白家の諸大夫にしては下卑たところも感じられる。

この男のために今までおおくの志士や学者、商人が召し捕られて獄につながれた。長野主膳にもっとも尽力しているのが島田左近である。したがって尊攘の志士たちはこの男をもっとも嫌い、にくんでいる。

信海も一瞥しただけで、本能的に島田に嫌悪をおぼえた。

双方はすぐにとおりすぎたが、島田の眸にも一瞬きらっと警戒の色が浮かんだ。

島田が信海を特別に意識したことはたしかである。島田もかくべつ勘のするどい男のようだ。

ひかえの間にもどった信海はいやな感じをおぼえた。島田は九条家の諸大夫でありながら、目明しのような嗅覚をもつ男である。

よもや素姓を見やぶられるはずはないとおもったが、警戒だけはしなければならなかった。よりによって、いやな男に会ってしまったという気がした。

その夜、戌の刻（およそ八時）ごろ、信海は床についた。

寝入ってからしばらくして、妙におちつかぬ気持におそわれて眠りからさめた。昼間の男、島田左近が気になって仕方がないのだ。

島田に自分の正体を見やぶられたような気がした。顔を合わせたのはわずかなあいだだが、島田はとくべつな嗅覚のはたらく男なのだ。

それに島田のような男であるから、かねて信海の面体をあらためるために成就院にきている可能性はある。

（今日、関白と島田は何をしに禁裡をおとずれたのか）

床の中で信海はいろいろとかんがえた。

世上では、今、尊攘派の旗色がひどくわるい。と言うよりも幕府方の大弾圧によって、尊攘派の主だった者は大方召し捕られ、京都、江戸から一掃されようとしている。今後、尊攘派が息を吹きかえすのはいつのことになるのやら想像もつかぬ。六角獄につながれて

いる尊攘派の囚人たちは江戸におくられ、厳重な取りしらべがおこなわれることがきまった。一度江戸におくられた志士たちの大半は、二度と京都にはかえされぬのではないかとおもった。

兄月照のことも、信海の脳裡に浮かんだ。人づてに聞いた月照の死にざまが脳裡をはなれなかった。

信海が尊皇の思想にめざめたのは月照によるところが大きい。月照の死が信海をふるいたたせた。尊皇のために幕府方とたたかうことを決意させたのだ。尊皇のためならば死んでもよいという気持にまでさせた。

信海は今自分に死がせまっているのではないかとおもった。今日、島田とはからずも出会ったのは、死の運命の前兆ではないかという気がした。

床の中でいろいろなおもいが交錯した。頭が冴えてきて、尿意をもよおした。

おきあがって、羽織をまとい、短檠に火をともした。

信海は部屋をでて、厠へむかって廊下をあるきだした。廊下の床は氷を踏むようにつめたい。

長い廊下を一つまがらなければならない。

まがった瞬間、信海はいやな予感をおぼえた。前方に凶悪な魔物か何かがひそんでいるような予感だ。

屋内であるにもかかわらず、風が前方から吹き寄せるのを感じた。

（あぶない！）

信海は瞬間に殺気を感じ、二、三歩さがった。

そのとき、前方から文字どおり魔物のような黒い影が突風のようにおそいかかってきた。魔物の影が短檠の明りの中に浮かびあがった。

（島田左近！）

信海は瞬時に見てとった。

島田は今日、九条尚忠にしたがって諸大夫間からひきあげたかに見せて、そうではなかった。自分一人だけ居のこって、この時刻まで諸大夫間にひそんでいたのだ。いかにも島田らしい策であり、振舞である。

島田は二尺ほどの長さの木刀をかざしていた。真剣をたずさえていないのは、禁裡を血でよごしてはならないという配慮のようだ。

信海は護身のために如意棒をもって成就院をでたが、部屋においてきている。今はまったくの素手である。

信海は仕方なく、素手で身がまえた。が、これでは勝ちめはない。

あっという間に、島田が二間ほどにせまった。

そのとき、自分の背後からふわっと廊下の天井へむかって黒い影が鳥のように飛ぶのが

感じられた。

その影が、なんと、廊下の天井の桟から島田の顔をめがけてものすごい勢いで翔んだ。

ギャア

さけびをあげて島田が顔をおおった。

それは鳥ではなかった。大きな黒い猫で、それが牙をむき、獰猛な唸りを発しながら、するどい手足の爪で島田の顔をひき裂いたようだ。

黒猫は爪でしたたかに島田の顔をひき裂いたのだ。

島田は必死で木刀をふるったが、空を切った。

黒い大きな猫は襲撃になれていた。いったん床にとびおりてから、瞬時の間もあたえずに高く跳躍し、今度は島田の首っ玉をねらっておそいかかった。

島田がもう一度さけびをあげた。首筋から喉笛のあたりを爪でふかく切り裂かれたのだ。

島田はとつぜんの奇襲に動転し、日ごろの落着きと沈着さをすっかりうしなって、猫の攻撃にまったく対応できなかった。

猫は何度も床から飛びあがり、飛びはねて島田へ攻撃をくりかえした。島田の首から上に徹底的にねらいをさだめて攻撃をつづけた。牙で噛み、爪でひき裂く集中攻撃である。

黒猫の黄金色にひかる双つの眸が闇にひかり、唸り声があたりを圧した。

島田は反撃にでようとしたが、盲滅法に木刀を振りまわすだけである。木刀は一度として猫にかすりもしなかった。

信海はそばで見ているだけである。手だしもしなければ、その場から逃げだすこともしなかった。

猫と人間の一方的な闘いはつづいた。

猫は闇の中でも目が見えるようである。人間はそうはいかぬ。黒い大猫は正確に島田の隙をねらって、攻撃をくわえ、飽くことを知らなかった。まるでつかまえた鳥や鼠などの獲物をもてあそぶような残酷さである。

島田は死に物狂いの反撃をこころみてはいるが、なんの効果もなかった。見るも無残な闘いぶりであった。

しかも場所柄、島田は声をあげて助けをもとめることもできぬ。猫はまるでそれを知っているかのように、おもう存分、島田への攻撃を執拗につづけた。

島田はもうへとへとになった。首から上は傷だらけである。喉も何度か、ふかく爪でやられた。

信海は、これは惟在が警固のためにおいていった麝香猫だろうとおもった。麝香猫はふつうの猫よりも体がおおきく、俊敏で、攻撃性のつよい種類である。

島田がようやく機を見て廊下のむこうへ逃げていったために闘いはおわった。

信海は麝香猫にまもられ、命をながらえた。惟在と猫に感謝をしなければならなかった。

島田が逃げ去ると麝香猫はその後は追わず、どこへともなく姿をひそめた。
猫のいなくなった廊下には、かすかに麝香の匂いが闇の中にただよった。
信海はしばし呆然として、その場に立ちつくしていた。

作戦会議

十二月上旬の一日。
京都は午前中からさわぎたった。鷹司家諸大夫小林良典、同家家来兼田伊織、同三国大学、水戸藩士鵜飼吉左衛門、同鵜飼幸吉、儒学者池内大学、絵師宇喜多一蕙、同松庵、近藤茂右衛門ら十一人が六角獄からひきだされ、唐丸籠におしこめられた。唐丸籠というのは重罪人をはこぶための網つきの竹籠である。
十一丁の唐丸籠の行く先は江戸、小伝馬町の牢屋敷である。この日が志士護送の第一陣となった。
一度に十一丁の唐丸籠がならぶというのも異様で壮観な風景であるが、それよりも囚人たちを護送する警備の人数は二百人をこえ、そのもののしさに都の人々は目をみはった。いまだかつて都の人々はこのような光景を目にしたことはなかった。
長い槍を立て、鉄砲をかつぎ、弓をたずさえての大袈裟な警備は見物人の目をそばだてるに十分であった。
この一行は駕籠をつらねて六角通りをすすみ、騒然たる中を三条大橋へむかった。

沿道に大勢の見物人がつめかけた。

「わが国は尊皇の国やいうのに、尊皇の志士がつかまって江戸の牢へはこばれるいうのは、一体どうしたことや」

「江戸の大老も老中もみな、気が触れたんとちゃうか」

「江戸できびしい取りしらべが待っとるそうどっせ」

「えらいことどす」

「江戸への道中、志士たちが行列をおそい、囚人たちを奪いにくるいう噂がある」

「そんなことできへん。このものものしい警備の行列見たら志士たちかて尻ごみしますやろ」

沿道の見物人たちは行列を見て、ひそひそと囁きをかわした。老人も女子供もまじっている。

「唐丸籠おそわれて、囚人うばわれたらお上の恥じや。絶対そんなことないようにきびしく警備してんのや」

「志士たちのほうかて、面子があるやろ。同志たちが籠詰めでおくられるのだまってほうっとくんか」

「仕方ないやろ、こんなきびしい警備やぶるのは無理どっせ」

見物人は長い行列がとおりすぎるまで囁きをやめなかった。

行列は三条大橋をわたり、粟田口へむかった。

志士護送の行列は京都をでていったとは言え、まだ六角獄には志士の囚人たちが大勢充ちている。今日の護送は第一次のものであり、おって第二次、第三次の護送がおこなわれることは世上に知られている。梅田雲浜、頼三樹三郎、有栖川宮家士飯田左馬、青蓮院宮家士伊丹蔵人、同山田勘解由などの大物が後の護送を待っている。

三条大橋の袂で志士護送の行列を見おくる見物人の中に、深草道実と長五郎がまじっていた。

二人は行列がとおる一刻（およそ二時間）も前からここにきており、行列の最後尾がとおりすぎるまで見まもった。深草も長五郎も真剣な眼差で行列を見た。厳重な警備の行列にすこしでも隙があるかどうかをうかがったのである。

「どや、あの行列の隙をつくことができるかどうか。あるとすれば、どこや」

見物人たちが立ち去ってから、小袖袴に草履をつっかけた姿の深草が長五郎にささやいた。

「隙はあると言えばある。どれほど厳重に警備された行列かて、街道はどこも一方道や。行列は縦に長く線のようにつづくだけや」

長五郎はやや間のびした長い顔をむけてこたえた。

「うむ、左様や」

「長くのびきった線の一点を衝けば、何とかなるやろ。麝香猫ならば、きっとそうかんがえる」

長五郎は顎を撫でながら小声で言った。

「唐丸籠の一丁や二丁、無理をして三丁くらいならば、その作戦でどうにかうばうことができるかもしれぬ。しかし十一丁となると、とても無理や」

「なにも十一丁ぜんぶうばわんかてよろしいやろ」

「お頭のかんがえ次第や。それにお頭は、京都の警備が手薄になった隙をついて、信海和尚を京から脱出させようとかんがえておるのやろう」

「両方はできんどすやろ。麝香猫かて人間や。唐丸籠うばうか、信海和尚を逃がすか、どちらか一つになりますやろ」

「そうや、どちらかや」

深草と長五郎のかんがえに大したちがいはなかった。

「お頭はどうおかんがえになる？」

深草は長五郎のかんがえをうながした。

「わてははじめから唐丸籠やおもうとりました。せやけど、今になってみると、そうともかぎらんとおもうてます」

「もうつかまっとる志士十一人と、まだつかまっとらん一人の志士や。どっちをとるか、わからんところや」

「お頭も、長野に麝香猫の正体やと見当つけられとります。今までのように、神出鬼没のはたらきはできまへんどっしゃろ」

「長野は麝香猫の召し捕りを必死にかんがえとるやろ。お頭も尻に火がついとる。油断はできへん」

二人はぶつぶつ囁き合いながら、木屋町通りの居酒屋に昼間から入りこんだ。本当ならば東寺口の半兵衛の店がいいのだが、ここからは少し距離がある。

木屋町は諸藩の京都屋敷がたちならぶ高瀬川筋から近く、屋敷詰めの侍や屋敷奉公の者たち、さらに旅籠も近くにおおいことから、それらの客もあつまってきて歓楽街を形成している。

居酒屋の客たちも、さいぜんの唐丸籠の護送の行列についてかたっている者がおおい。この日、京都中はこの話題でもちきりなのである。

居酒屋でだいぶ時間をつぶしてから、深草と長五郎は東寺口の米半へむかった。

「仰山な警備だったそうやないか」

半兵衛は二人を見ると言った。もう半兵衛の耳にも入っていた。

「京でも前代未聞の警備や。麝香猫がいつどこからでてくるかわからしまへんから、所司代も大層気いつかっとります」

長五郎はおかしそうに言った。
「麝香猫がねらいつけたら、唐丸籠ごと持って行かれる恐れがある。所司代が恐れるのも無理やない」
半兵衛はつぶやくように言った。この時間、店には客がいなかった。
「せやかて、お頭はお屋敷をでられますのやろうか。お屋敷のまわりには大勢見張りがついとりましょ」
「お頭は変装の名人や。どんな警戒もやぶってくるやろう」
今日の申の刻（おおよそ午後四時）までに、一同はここで麝香猫と、おち合う約束になっていた。
だが、申の刻が近づいても、麝香猫は姿を見せなかった。
なおしばらく時がたったが、麝香猫はこない。
もう時刻は申の刻を過ぎた。
長五郎が不安な面持を見せた。
「おそい……」
「きやはらへん」
深草と半兵衛も言った。今まで麝香猫が約束の刻限をたがえたことは一度もなかった。
どれほど警戒厳重なところでも、麝香猫は警戒網をやぶって姿を見せるのが常だった。

深草も困惑の色を見せた。麝香猫は厳重な警戒網のために身うごきができなくなったのだろうか。
だとすれば今後、今までのようなはたらきは期待できなくなる。
「もうしばらく待とうやないか」
長五郎がそう言ったとき、店の奥の居間で物音がした。
「待つにはおよばぬ」
誰もいないとおもっていたはずの居間から男の声が聞こえた。
三人がいっせいに居間のほうをふりむいた。麝香猫の声だ。
「お頭っ」
「いつ？」
半兵衛と長五郎が同時に声をあげた。
なんと、待ちわびている麝香猫が居間の真ん中で長々と寝そべっているではないか。
「丁度申の刻にやってきて、今さっきはばかりを借りたところだ」
惟在はそう言って、悠然とひとつ伸びをした。
この警戒厳重な中、惟在はかくべつの変装もしていないのである。
「恐れ入りました」
深草はあきれて言った。屋敷をでるときだけ変装し、途中で元の姿にもどったものと見

えた。
「ものものしい行列だったそうだな」
惟在はすでにくる途中、情報も聞きこんでいたのだ。
「十一丁の唐丸籠に二百人以上の警備どす」
「これで京都の警備は大層手薄になったな」
惟在は居間から小座敷にやってきて言った。
「二百人以上も江戸をめざして行ったんやから、こっちの警備はどうしても手薄どす」
「そうなるだろう」
それを待っていたかのような麝香猫だ。
「どないしまひょ、お頭」
半兵衛が水をむけた。
「二つに一つだ」
惟在もやはりおなじことを言った。
麝香猫一味の作戦会議が米半ではじまった。
惟在は蹴鞠に興じているときのような暢気な顔はしていない。別人のような引きしまった顔で思案に入った。意志のつよさと聡明さを感じさせる表情だ。
「どちらをとります？」

深草がたずねた。
「確実にやれるほうをえらぶのが本筋だ」
惟在はすぐにこたえた。
「虻蜂とらずになったらこまります。どちらか一方を追って、それに失敗しましたらもっとこまります」
深草が言うと、惟在はうなずいた。
惟在も深草もこのたびの弾圧がもう大詰めにきたとはおもっていない。弾圧はもっときびしくなり、さらなるきびしい展開をするだろうと見ていた。水戸藩か薩摩藩どちらか一藩くらいは見せしめのためにつぶされるほどの激動があるかもしれないとおもった。尊攘派も必死でたたかっているが、幕府とても懸命なのだ。井伊大老や長野なども幕府の存亡を賭けているといってよい。このたびの政争にやぶれれば、井伊、長野らの将来はあり得ないし、生命ながらえることすらも無理だろう。幕府が崩壊の方向へひたはしっていくこともかんがえられる。
「長野は相変らず、京において目をひからしておる」
惟在は言った。
「長野は京をまもりとおすつもりですやろ」
「長野は麝香猫一味が唐丸籠を追って京をでて行ったと、多分かんがえておるだろう」

これは惟在の予測である。

「そうかんがえるのが普通だ。だからそれほどの警備をつけておるんどすやろ」

「信海和尚が御所にかくまわれておることは、ほぼ敵に知られておる。和尚を京から脱出させるほうが大事だ」

惟在が断をくだした。

「和尚をどこへ逃がします?」

月照の例があるので、深草はそれが心配だった。

「薩摩藩は駄目だ。長野ににらまれて、月照和尚を受け入れなかったくらいだから。水戸は江戸に近くてあぶない。そうするとのこるは長州くらいのものであろう。長州には吉田松陰の弟子たちがいる。尊皇の思想を信奉する者がおおい」

惟在が意のうちを明かした。

「たしかに長州藩には尊皇の思想がながれとります。高杉晋作、久坂玄瑞、入江九一らは吉田松陰の思想をうけついでおります。桂小五郎という俊英もいる。薩摩藩よりたよりになるでしょう。長州に逃がすのがよいかもしれまへん」

深草が同意した。

「けれども長州には長井雅楽という難物の家老がおる。この者がでしゃばってでてくるようだと、信海和尚は月照和尚の二の舞をふむ恐れがある」

「又しても死地に逃がすことのないようにしなければなりません」

「けれども、あまりに心配していては、和尚を逃がす地はどこにもなくなってしまう。こそというときには大胆にことをはこばねばならない」

「そうやおもいます」

「長州以外には、今のところかんがえられまへん」

半兵衛、長五郎も意見を言った。

これで作戦はほぼきまった。

長野はずっと京都に居すわっている。

京都は長野の支配下にあると言ってもいい。

長野の命令で召し捕えた志士たちは六角獄にあふれ、その一部は第一陣として江戸へおくられた。江戸ではきびしい取り調べが待っているはずだ。

長野はこれだけにとどまらず、今後朝廷内に手をのばし尊攘派公卿の大物鷹司政通、同輔熙、近衛忠熙、三条実万、一条忠香などに厳罰をくわえんと手ぐすねひいていた。これら諸大臣家の諸大夫らはすでにとらえ、六角の獄につないであるが、そのほかにも長野が摘発をかんがえている者は大勢いる。二条大納言斉敬、近衛忠房、広橋光成らである。

長野のかんがえはほぼ順調にすすんでいた。これだけ大がかりな弾圧を強行すれば、尊

攘派はほぼ完全に息の根をとめることができる。これによって幕府の安泰もたもつことができると信じていた。

かつて京都に尊攘派が横行、跋扈をきわめたが、今はすっかり静かになった。長野は自分がみずから京都に乗りこんだ甲斐はあったとおもっていた。

が、いまだ長野の意にそまないのは麝香猫である。麝香猫をとらえることがまだできない。これが残念のきわみであった。

正体はほぼつかめたが、証拠を見つけることが今もってできなかった。現場をとらえることもできなかった。

世間でも蹴鞠大納言と呼びならわされている人物が、よもや幕府に敵対する賊麝香猫だとはなかなか信じられないとわかっていた。長野自身もはじめは信じられないおもいだった。それだけにうごかしがたい証拠か現場をつかんでおかなければならない。

さらにもう一つ長野が無念なのは、いまだに蓮子を自分の意にしたがえられないことである。〈陰の大老〉とまで呼ばれている自分がたった一人の女、蓮子を意にしたがえられないことが、なんとも忌々しかった。

ややもすると、惟在も蓮子も長野を挑発し、嘲弄するようなところが見えた。今まで何度か長野は麝香猫を追いつめたが、そのたびに絶妙の策に乗せられて逃げられた。

蓮子は宮中一の美女、才媛として長野のこころをとらえたが、頑として意に応じようとしない。長野のこころを欲望の極致にまで高めさせておいて、肩すかしを食わせるのだ。今の長野は蓮子に欲望と同時に憎悪さえ、いだいていた。いつかひっ捕えて、ひどい目にあわせてやりたいとおもっていた。

長野は同夜、輩下たちに惟在と蓮子のすまう白河家の屋敷を見張らせていた。日によっては、長野自身が見張ることもある。

今の時季の屋外での見張りは、寒さで身も凍るようになる。それでも長野は我慢して、見張りをつづけた。どうしてもとらえてやろうという執念が寒さをしのいだのである。

この日も長野は、東殿町の空地にひそんで白河家の屋敷を見張っていた。ここからなら白河家の表門と裏門が見える。もう一つの通用門が見えるところには、輩下を見張らせている。

その昼下り……。

何度も見なれた蓮子の糸毛車が、表門からでてくるのが見えた。

糸毛車の中には当然蓮子が乗っているはずだ。が、もしかしたら、

(女車の中に惟在が乗っているやも……)

と長野はこころをそそられた。今までもそういう憶測を長野はしばしばしていた。

それで長野はまた車あらためをやってみたい気になった。

牛車の中に惟在がいなくても、蓮子が乗っているはずである。今まで何度か蓮子にいい

ようにあしらわれた長野であるが、とつぜん蓮子の顔を見たいという気持にかりたてられた。

どうせなごやかな対面などのぞめるわけもなかったが、それでもこの衝動をおさえることができなかった。あわよくば、というかすかな期待もひそんでいた。

「待たれい」

長野は寺町御門の手前で、糸毛車に声をかけた。

車輪のきしむ音をたてて糸毛車がとまった。

「車のあらためじゃ。拙者、長野主膳でござる」

と長野は名乗った。

(惟在がでるか、蓮子がでるか?)

長野はやや期待をもって見まもった。

やがて引戸がしずかにあいた。

あでやかな衣装がまず見えた。うるわしき白い顔がのぞいた。

蓮子である。

蓮子がおどろきの表情で長野を見た。

「またしても長野さまにおじゃりますか。今度は何用でござりましょう」

蓮子はかるい揶揄(やゆ)をにじませて言った。

「車あらためにござる。糸毛車の中にどんな鼠(ねずみ)がひそんでおるやもしれぬ」

長野はやや意地になって言った。

「ほほほ……」

たのしくてたまらぬような蓮子の笑い声があがった。

「鼠ではおじゃりますまい。大きな猫がひそんでおろうかとおもうたのではおじゃりませんか」

蓮子はいかにも大胆なことを口にしたものである。

長野のほうが一瞬、どきっとした。蓮子にはすべてを見すかされているのである。

「猫でも鼠でものうて、蓮子さまでよろしゅうござりました」

長野は言葉ばかりは丁重である。あくまでも前大納言(さきの)夫人にたいする敬意である。

「長野さま、猫をのぞんでいたのではおじゃりませんか。お顔にそう書いてござります」

蓮子は危険すれすれの言葉を口にした。あたかも長野の反応ぶりをたしかめ、危険とたわむれるかのようだ。

「わたしは猫などより、うつくしい女人が好きでござります」

「悪さをして、猫にひどくひっかかれた仁(じん)もおじゃりますとか」

蓮子はたのしそうに言った。島田左近のことである。

島田は首から上を三十個所も引き裂かれて、二目と見られぬ悲惨な状態になった。とて

も人前にでられぬ顔となって、ずっと屋敷にひきこもっている。
「そんな猫もいつかはつかまる。お上に刃向かう者はいずれ悲惨な運命をむかえるもの。蓮子さま、もし麝香猫に会うことがありましたら、そうさとしてやってくださりませ」
長野もきつい皮肉をこめて言った。
「機会がありましたら、そう言ってやりましょう。けれどもまた引っ掻かれぬようお気をつけなさりませ」
「今度は十分に気をつけることにいたしましょう。ところで前大納言さまは近ごろご壮健におわしますか」
長野はもっとも肝心なところに近づいていった。
「前大納言さまはお達者におじゃります。けれども今は屋敷におわしませぬ」
「お留守にござりますか」
「当分、屋敷にはもどりませぬ」
蓮子の言葉に長野は、はてとおもった。
「前大納言さまには、旅にでもおでになられましたか」
「行き先はしかとは存じませぬが、昨日から旅にでました」
蓮子の言葉がただしいとすれば、昨日は六角獄の囚人の第一陣が江戸へおくられた日である。長野の胸にはぴんとくるものがあった。麝香猫が唐丸籠を奪還にくるという噂が世

間にながれていたからだ。
「左様でござりますか。旅の安全をおいのり申し上げます」
そう言いながら長野の頭はめまぐるしく回転していた。
（麝香猫は唐丸籠を追って京を出た）
と長野は読んだのである。これはただ事でない情報であった。
「長野さまもお元気であるよういのっております」
蓮子はそう言って、車の奥にひっこみ、引戸を閉じた。
長野はその場からいそいで所司代にひきあげた。
そして、
「町奉行を呼べ」
と所司代の役人に命じた。
岡部豊常と小笠原長常が長野のもとにやってきたのは、それから間もなくのことであった。
所司代酒井忠義はすでに長野のもとにいた。
ここで長野を中心にして、唐丸籠を奪還にむかったとされる麝香猫を捕える作戦がこらされた。

長坂口

豪華絢爛たる乗物が、烏丸通りをゆっくりと北へむかって行く。

通常、乗物は一万石以上の士分の具とさだめられている。しかしこの乗物の豪華さはただごとでない。

冬の日ざしを四方八方に黄金色にはねかえしているのは、乗物の外面に漆で図を盛った高蒔絵をほどこしているためである。上部に鳳凰をえがき、下部には唐草文様をあしらい、文様の空間には梨地と螺鈿をもちいている。内部には土佐絵の装飾がおこなわれているそうだ。

今時、京都においてもこれほどの乗物は滅多にお目にかからぬ。この乗物が都大路を行くだけで、通行の者はしばし立ちどまって見とれるのが普通である。

長野主膳が京都にきてからつくらせた乗物がこれである。今では京都でこの乗物を知らぬ者はすくない。京都における権力の象徴とも見られている。

四人の陸尺によってこの乗物はかつがれ、前と後ろに三人の家来、足軽をしたがえている。

この乗物が烏丸通りをのぼって行くと、通行人はみな大路の片側に寄って、乗物がとおりすぎるのを待つ。

「長野さまや」

「鳳凰の文様と蒔絵、螺鈿細工は長野さまのご威光のあらわれどす」

「どこへおでましや。乗物で捕り物いうことはないやろう」

人々はささやき合う。あたかも、下にい、下にいっの声がかけられそうな雰囲気なのである。都の者は長野がみずから指揮して捕り物にむかうことも知っている。

なにしろ、この二百数十年、京都に所司代を上まわる権力者が存在したのは、今回の長野がはじめてである。

乗物は丸太町通り、中立売通り、今出川通りを過ぎてさらにすすんだ。そして途中から新町通りへまがった。

その先には、七口の一つ、長坂口がある。新町通りと鞍馬口通りの交差するところが長坂口である。

長坂口にいたるすこし手前に、日蓮宗妙覚寺がある。天正十年（一五八二）、織田信長が明智光秀におそわれたとき、信長の嫡子信忠はわずかな兵をひきいて妙覚寺に宿泊していた。

本能寺の急変がつたえられたとき、信忠は手兵とともに本能寺へ急行しようとしたが、

妙覚寺も明智勢にかこまれ、火をかけられ、いったん信忠は脱出したが、後に無念の自刃を余儀なくされた。

七口はまだ厳重に封鎖されている。長坂口にも柵と番所がもうけられ、番士たちが警備している。

所司代や町奉行所の与力、同心たちが大勢唐丸籠の警備で江戸へむかったために、七口の警備は以前よりは手薄になっている。が、精いっぱい人数を動員しており、けっして隙のある状態ではない。一人が守備範囲を二倍にひろげているため、かえって隙のない効果的な警備がおこなわれていた。

豪華絢爛の乗物が長坂口に近づくと、柵も番所もさわぎたった。

番士たちは一様に長野の乗物と知っていたからだ。

番所の隊長は稲垣織之助という者である。

「長野さまの乗物がまいりました」

番士にしらされて、稲垣はいちはやく妙覚寺脇にもうけた番所からでてきた。

黄金のまばゆい光をあたりいっぱいにはなって、乗物は近づいた。

稲垣ら番士たちが待つ柵の前に、乗物はきた。

「長野主膳さまにござる」

先触れの家来が番士たちにそう呼ばわった。

あたりはしいんと静まりかえっている。

「長野さま、お役目ご苦労さまにござります」

稲垣は柵の前にひざまずいて、乗物へむかって礼をした。

「お役目、ご苦労さまにござります」

番士たちはみな稲垣をならって、柵の両側にひざまずき、深々と礼をした。

そのとき、乗物の引戸がわずかにひらいた。

「役目、大儀である」

引戸の中から重々しい声がした。

稲垣をはじめ、番士たちは時の権力者の謦咳に接して、おののくばかりにかしこまった。

そして一層ふかく頭をたれた。

番士たちがようやく頭をあげたときには、引戸はすでに閉じられ、乗物はゆるりと柵をでて行った。

その乗物は日に照らされて、後光がさしているようである。きらきらとまばゆいばかりの光である。番士たちはまるで夢を見ているようであった。

「立派なお乗物でござる。蒔絵の鳳凰がお見事でござった」

「巷は尊皇、攘夷とさわいでおるが、あのお乗物を見れば、幕府は安泰ということをしめしておる」

「こころ丈夫なかぎりだ」
番士たちは立ちあがって口々に言った。京都においては、今や長野が所司代にかわって幕府権力の象徴になっていた。
そして黄金にかがやく乗物は西北、蓮台野へとむかった。
長坂口は蓮台野から北へむかい、鷹ヶ峰をへて、長坂、京見峠をこえ、丹波にでる口である。蓮台野は船岡山の西南紙屋川にいたる野で、西の化野、東の鳥辺野とならぶ葬送の地である。
乗物がこの蓮台野にさしかかったとき、むこうから騎馬が二騎やってきた。
その騎馬の主はいずれも京都所司代の与力である。安西為五郎と北田直右衛門である。
安西も北田も長野の乗物を見て馬をとめ、はっと目をそばだてた。
「長野さまの乗物じゃ」
安西はおどろきの目で言った。
「長野さまに間違いない。どうしたことや?」
北田も奇異の表情をあらわした。
二人は洛外の見廻りの帰途である。洛外の見廻りには、どうしても騎馬が効果的であるのだ。
「長野さまは今日は所司代にいらっしゃるか、洛中の見廻りのはず。乗物は所司代の車庫

におさめられておるわけや」
安西は不審きわまりない顔で言った。
「せやけど、あの乗物は長野さまのものに間違いない。あんな乗物にのる者はほかにおらへん」
「そうや、おかしなことや」
「あの車、あらためるわけにもいかん……」
安西と北田がそう言っているあいだに、乗物は鷹ヶ峰のほうへ遠ざかって行った。
「所司代にもどればはっきりする」
「いそげば間に合うかもしれへん」
二人はそう言うと、馬で駆けだした。
洛中めがけ、所司代をめざして疾駆して行った。
千本通りを一気に駆けとおし、所司代に到着した。
「長野さまは、いずこに?」
安西と北田は所司代に駆けこんで聞いた。
「長野さまは市中見廻りや」
朋輩の与力がこたえた。
「馬か、乗物か?」

「馬でられた」
長野は外出するとき、馬にも乗るし、乗物もつかう。
安西と北田は長野の乗物をおさめてある車庫にいそいだ。
所司代で乗物をつかうのは、長野と酒井の二人しかいない。
車庫の戸を安西があわただしくあけた。
「あっ……」
北田がおどろきの声をあげた。
「どうしたことや！」
安西も驚愕した。車庫の中には、酒井の乗物と長野の乗物が二丁ともおさまっているではないか。
安西と北田は長野の乗物に近づいて、しげしげとながめた。蒔絵、漆塗りの乗物は長野のものに間違いない。上部には鳳凰、下部には唐草の文様がえがかれ、文様の空間には梨地、螺鈿の巧緻な細工がほどこされている。これほどの豪華絢爛たる乗物は、京都にも又とはないはずである。
「何者だ、あの乗物に乗っていたのは」
見れば見るほど蓮台野ですれちがった乗物と、ここにある乗物は酷似している。誰が見ても同じものに見えるはずである。そっくり真似てつくりあげたのだ。

「ただ者やない」
二人は驚天動地の心境で、あわてふためいた。
「長野さまの名をかたって、長坂口の柵をくぐりぬけたにちがいない。途方もないやつの仕業や」
安西と北田は期せずして、おなじ人物を胸にえがいていた。
「麝香猫か」
安西のほうが先にその名を口にした。
「ほかにはあるまい」
北田も同意した。
「麝香猫が大物志士を乗物にのせて京脱出をはかったんやろ」
蒼ざめた顔で安西は言った。麝香猫は唐丸籠の志士を奪還にむかうと見せて、京都にのこり、信海を逃がす作戦をとったのである。
「信海か。馬で追えば、追いつくかもしれん」
「長野さまに急報いたさねば。酒井さまにもお知らせしろ」
安西と北田はただちに行動をおこした。
所司代と町奉行所から与力、同心、手代約二十人からなる追跡隊が出発したのは、それから間もなくのことであった。指揮は酒井と岡部豊常がとった。もう一人の町奉行小笠原

長常は町奉行所の与力や同心たちをひきいて唐丸籠の警備のために、昨日京都をでていた。
その前に、長野に急をつたえる使者も所司代をでていった。
追跡隊は洛北蓮台野へむかってあわただしく駆けていった。与力は馬で、同心と手代は徒歩で懸命に駆けた。
「麝香猫めっ、逃がしはせんぞ」
「かならず引っとらえてやる！」
「今度という今度は、息の根を止めてやろう」
与力も同心も手代も、麝香猫に憎悪のかぎりを燃やしていた。今日まで何度となく屈辱を味わわされ、嘲弄されてきた。京都の市民たちはみな麝香猫に味方し、喝采しつづけている。
麝香猫をとらえなければ、彼らの役目はまっとうできぬ。
一行は洛中を駆けぬけ、土埃を舞いあげて蓮台野へむかった。
一行が荒涼とした蓮台野にいたったときには、むろん乗物一行の姿は見えぬ。
「鷹ヶ峰から長坂を越え、京見峠をへて、丹波へむかったのじゃろう」
酒井忠義は野の一角から洛北、洛西の山々をのぞんで言った。
「それにちがいありますまい」
岡部もまよいなく同意した。

長坂口をぬけて蓮台野をとおりすぎた以上、一行の行き先は丹波方面とみるしかなかった。
「行けっ」
酒井が号令をくだし、一行は蓮台野をすすんだ。
野の西をながれるのが紙屋川である。鷹ヶ峰を源流にしており、北野神社の西のあたりで天神川と名を変える。かつて、この川のほとりで禁裡御用の紙をすいた。それが川の名になった。
一行が鷹ヶ峰の近くまできたとき、紙屋川の川原に放置されているとんでもないものが目についた。
「乗物や」
「あれや、わしたちが蓮台野で見たのは」
安西と北田が声をあげた。
一行は放置された乗物のところへいそいだ。
「長野さまの乗物にそっくりや。ほとんど変らん。よくこれほど似せてつくったものや」
「この乗物見たら、長坂口の番士たちがだまってとおしたのも無理はない。疑う者はおらんやろ」
ほかの者たちもおどろき以外の言葉はなかった。これだけの精緻豪華な乗物をつくるの

は、たとえ偽物だとしても、相当な日時と莫大な費用がかかる。
「十分準備をしての企てや」
追跡隊にくわわっている大河原十蔵が、あきれたように言った。
「今度の敵は手ごわいぞ」
文吉が相槌をうった。
このあたりから道は鷹ケ峰と鷲ケ峰にはさまれ、その先は山道となる。乗物が行くには不便であるから、ここで惜しげもなく捨てたのだ。
このとき、南方から騎馬と徒士の一団がこちらに駆けつけてくるのが見えた。
「長野さまや」
大河原が背後をふりむいて言った。
騎馬の先頭を駆けてくるのが長野である。
長野は市中見廻りの出先で急報に接して、にわかにこちらに駆けつけてきたのだった。
長野は川原に捨ててある自分のものそっくりの乗物にしばしながめ入った。
「麝香猫だな」
その名を口にするのも悔しそうに長野は吐き捨てた。
「十中八九それに間違いありませぬ。麝香猫はおそらく信海をともなって京脱出をはかった模様にござります」

酒井がそう口にすると、長野はにがにがしそうにうなずいた。
「今から追えばまだ間に合う」
岡部は力づよく言った。
「いそげば京見峠や杉坂あたりで追いつけるだろう」
「相手はみな徒歩だ、成算は十分ある」
ほかの者たちもみな意気ごんだ。
この道は、杉坂をこえたところで周山街道に合流するか、それとも縁坂峠へむかうか、雲ケ畑へむかうかの三通りがある。だから杉坂をこえるまでに追いつかなければ、追跡が面倒になるのだ。
一行は鷹ケ峰と鷲ケ峰のあいだをすすんだ。
光悦寺を右手にながめて山道を行くと、やがて長坂にかかる。
北山、西山のうつくしい峰々がはるかにつづいている。このあたりは人家もほとんどなく、山道を往来する人影も今は見えない。
みなはひたすら山道を追った。長野一行十数人がくわわったことによって、意気ごみはあがった。
指揮は長野がとった。長野は自分の乗物を偽造された怒りもくわわって、なんとしても麝香猫と信海をとらえねばおさまらない気持にかりたてられていた。

麝香猫が京洛に出没しはじめてもう三ヶ月になる。ここらで麝香猫を召し捕らなければ、京都に君臨する長野としては鼎の軽重を問われる事態になっていた。麝香猫の跳梁ぶりは、遠く江戸の井伊の耳にも入っている。猫一匹に翻弄されていると大老に見られることは、長野の誇りをひどく傷つけるものであった。

一行は長坂をひたすら追った。

春から秋までは鹿や兎、狸などが見られる山道ではあるが、今はそうした動物たちの姿は見えぬ。山の雑木はみな葉をおとし、檜や杉などだけが緑の葉をつけている。雑木が落葉しているだけに、見とおしがいい面もあるのだ。

長坂をこえると、山道はまがりくねって京見峠へ近づいていく。

先を行くはずの麝香猫一行の姿はまだ見えてこぬ。

やがて峠が近づいた。その名のとおり、京都をはるかにのぞむ峠である。

峠に立つと、右が北山、左は西山の諸峰、ふりかえれば眼下に船山や釈迦谷山が見え、はるか彼方に京の町々がひろがって見える。

前方には杉坂の九十九折りがのぞめる。だが、その九十九折りにも麝香猫一行らしき姿は見えぬ。

一行は坂道をすすんだ。川はもうなくなっている。

冬の山鳥の鳴き声が聞えるが、姿は見えない。見えるのは、樹木と空と坂道だけである。

だが、一行の士気はあがるばかりだ。この道を行けば、かならず麝香猫と信海に追いつけるという信念があるのだ。

杉坂の前坂にかかった。その先が上杉坂であり、鬱蒼とした杉木立がどこまでもつづく。この杉小立の中に人間がまぎれこんだなら、容易には見つけられないだろう。

上杉坂にいたるところに道風神社が森閑としたたたずまいの中にある。小野道風をまつる神社であり、この地一帯の産土神である。山の空気は身を切るように冷たい。

そのとき、前方の杉木立の中から、とつぜん人影がばらばらとあらわれた。しかも二十人ばかりの一団である。

一行の足が釘づけになった。

「敵だっ」

「麝香猫や！」

「飛道具をそなえておるぞ」

一行の者たちは口々にさけんだ。

前方にあらわれた一団は身仕度、足ごしらえを十分かためたうえ、弓や鉄砲を所持していた。

もとより、追う一行にも飛道具のそなえはある。が、その数はすくない。

乗物の一団がわずか数人だったので、鉄砲三挺をそなえているに過ぎない。

それにしても、相手方の人数がおおい。いや多すぎる。
どうしてこのような大人数になったのか理解できなかった。麝香猫が神通力をもちいたとしかおもえなかった。まるで地から湧いたようにぞくぞくあらわれたのだ。
距離は半丁ほどの先だ。
「待ち伏せだっ、木立に入れ！」
長野の号令で、追跡してきた一団は山道から杉木立の中に入った。
長野の言ったとおり、これはまさしく待ち伏せであった。
半丁の距離だと、目をこらせば相手方の顔もぼんやり見える。その中に麝香猫もいるはずだ。信海もいるはずである。
長野も酒井も岡部も、なんとか相手方の中に麝香猫と信海の姿を見つけようとした。
「弓と鉄砲の用意を！」
長野が命じた。長野がひきいてきた人数がいるので、数のうえでは追跡側のほうが優位である。長野は見廻り先の番所からも人数をつのって駆けつけてきたのだ。
シュッ
シュッ
不気味な弓弦の音とともに、矢が杉木立の中に飛来した。
相手は腰をすえて幕府の勢とたたかうつもりである。その意志のつよさが弓弦の音にこ

もっている。
ダーン
ダーン
鉄砲の音も炸裂し、しずかな山間にこだました。
「撃てっ、撃ちはなて！」
長野も応戦を号令した。
こちらの杉木立からも弓弦が鳴り、鉄砲の音が炸裂した。
相手方からは倍にちかい数量の矢と弾丸が飛んできた。それが足下をかすめたり、木立の幹や枝にあたるものもあった。
しばらく弓と鉄砲の応酬がつづいた。
相手方は坂の上から撃ちおろし、射おろしてくるので、そのぶんだけ利をしめている。
長野は号令し、叱咤しながら、相手方の中に麝香猫と信海をさがしたが、なかなか見つけられなかった。
長野は約半数の者たちを杉木立の中を縫うように前進させた。
彼らは木立から木立へとじりじりすすんで行った。
長野も酒井も岡部も木立を縫ってすすんだ。
相手方からも木立の中をじりじりとすすんでくる者がある。

木立の中でしだいに距離が接近してきた。
長野は執拗に麝香猫と信海の姿をもとめたが、どうしても見あたらぬ。
一味の者たちをここでたたかわせて追跡を阻止し、麝香猫が信海をまもって杉坂をこえて逃げているのではないかとおもった。時がたてばたつほど麝香猫と信海は遠くまで逃げてしまう。
「すすめっ、すすめっ、前進しろ！」
長野はいらだって号令し、みずからも木立の中を前進した。
ダーン　ダーン
鉄砲の弾丸が身辺を飛びかすめたが、長野はひるまず前進をつづけた。
敵の中に鉄砲の名手がいて、一人、二人……と撃ちたおされる者がでた。
長野の輩下にも鉄砲の達人がいる。その者が鉄砲を撃ちはなつたびに、相手もたおれていった。
距離がさらにちぢまった。
「うわあっ」
「おおっ」
「行け、行け！」
喊声とともに、期せずして双方は突撃を開始し、木立の中ではげしい白兵戦がはじまった。

怒号を発し、眦をつりあげ、体ごとぶつかり合うように双方は激突した。
太刀風がおこり、白刃が唸りをあげ、壮烈に打ち合った。
絶叫があがり、血しぶきがとんだ。
相手方は何がなんでも幕府方の追跡をここではばんで、信海と麝香猫を先へ逃がす作戦のようである。
「敵は無勢だっ、蹴散らせ、斬り伏せよ！」
長野は一時もはやくここを攻めやぶらねばと、突撃を命じた。
号令に応じて、兵は突撃し、前進した。
しかし相手方もひるまずここを死守すべく捨て身でいどんできた。
撃たれ、斬られ、双方にたおれ傷つく者が続出した。双方意地ずくの戦いとなったため、犠牲者がでるのはやむを得なかった。
闘いは四半刻（約三十分）ばかりつづき、ようやく相手方の劣勢が目立ってきた。相手方はじりじりと木立の中を後退しはじめた。
「行け、行けっ、すすめ！」
長野は勢いを得て、果敢に号令をつづけた。
相手方はたおれた仲間を見捨てて、後退した。

所司代と町奉行所の者がたおれた敵をかこみ、素姓をただした。
「長州藩某、首をはねよ」
深傷を負った敵が素姓、身分をあかした。
「長州脱藩某、好きなようにいたせ」
いずれも意外な答がかえってきた。たおれた敵は長州藩ゆかりの者がおおかった。
追手は半刻ほどのうちに、ついに杉坂をこえた。
相手方は下杉坂を過ぎて、とうとう周山街道へ逃げた。
「麝香猫と信海をとらえるのは今ぞっ、追え！」
長野はここぞとばかり、声が嗄れるほどにさけび、みずから馬で追跡の先頭にたった。
輩下の者たちも長野につづいて追跡をはじめた。
長野は九分どおり勝利を信じ、今日中には麝香猫をとらえることができるとおもった。
このころ……
吹田あたりの淀川をくだる三十石船の中に、惟在、信海、蓮子、深草、長五郎の五人の姿があった。惟在は旅絵師に、信海は旅修行の坊主に、蓮子は商人の女房姿に変装している。
彼らは長野が番士たちをつれ去って守りの手薄になった東寺口の番所をぬけだし、伏見の豊後橋から三十石船に乗ったのである。いったん伏見をはなれれば、もう追及の手はのびてこないも同然である。
惟在は長州藩の京都屋敷に前日でむいて、尊皇の志あつき者たちをつのり、協力を依頼したのだ。
この日の夕刻、一行は大坂に到着した。そして天満橋から六百石積みの樽廻船に乗りかえて、一路、下関へとむかった。
海上はいたって波おだやかである。
惟在は画帳と矢立をとりだし、大坂湾岸の風景を写生しつづけた。

解説

縄田一男

読者を魅了する小説というものは、その題名からして、どこか蠱惑的な響きを持っているものである。

この作品『闇の剣士麝香猫』は、平成五年六月、角川書店から書下し刊行された長篇だが、原題を『闇の麝香猫』といい、この題名と、初刊本の帯に附された「コロリ、慧星、麝香猫。このごろ京都にはやるもの――」という惹句の独特のリズムに触れた時、時代小説ファン、それもチャンバラファンは、本書のページを繰るより前に既に胸をときめかしていたのではないだろうか。

それでは、麝香猫とはそも何者？

開国か、尊攘か――物語は、風雲急を告げる安政五年、天候不順が続き不吉の前兆である慧星が現われるに端を発し、長崎から東漸するコロリの猛威が京を席捲しつつある正にその時からはじめられる。

そして自然と疫病に次ぐ第三の猛威として京を襲ったものこそ、近藤茂右衛門捕縛によって開始された大老井伊直弼による尊攘派の大弾圧、安政の大獄に他ならなかった。かくて京都七口が閉鎖されるという異常事態の中で、大老の懐刀、長野主膳が粛清の鉄槌をふるうことになる。

が、そこに現われたのが、闇の麝香猫と名乗る謎の一団――。大獄の嵐が吹き荒れる中、七口を閉鎖されて、京に閉じこめられた志士や学者を次々と脱出させる、神出鬼没の快男児。一味の人数は数人とも十人とも数知れず、京都一円の地理に詳しく、幕府の警備や追跡をものともせず、奇策を用いて包囲網を突破してしまう。しかし、その正体を知る者は誰もいない。

このようにストーリーを紹介していくと、時代小説を読み馴れた方なら、思わず、なるほどとうなずかれるものがあるのではないだろうか。

南原幹雄は「わたしと鞍馬天狗」というエッセイの中で、中学一年生の時、父（時代小説作家の南条三郎）に連れられてはじめて「鞍馬天狗」の映画を観た時のことを次のように記している。その映画とは、昭和二十六年の松竹作品「鞍馬天狗・鞍馬の火祭」（監督・大曾根辰夫）。主演はもちろん、アラカンこと嵐寛寿郎である。

そして導入部からたちまちスクリーンにひきつけられ、魅入られてしまった。ハラハラ、ワクワク、ドキドキ……、感動とスリルの連続だった。映画は幕末の京都を舞台に

した勤皇佐幕のチャンバラ劇だ。（中略）ストーリーのほどはさだかではなかった。ともかく映像と雰囲気に酔い痴れたのだ。雨あがりの京洛の夜を謡曲をうたいながら黒い頭巾、着流しの天狗が一人ゆく。とつじょ背後からおそってくる白刃。とっさに天狗は雨傘でうける。雨傘が切りさかれ、そこからのぞく天狗の顔。偽天狗は般若の面をかぶっていた。爽快な剣戟場面がそこからはじまっていた。／全篇興奮しながら見おわった。そして完全に鞍馬天狗に魅入られた。ばかりでなく、チャンバラ映画のとりこになった。

そして南原幹雄は映画好きがこうじて、早稲田大学卒業後、日活に入社。企画部に籍を置くことになる。作者が映画人として活躍していた時期は、石原裕次郎、小林旭の全盛期にはじまり、高橋英樹の任侠映画や渡哲也のニュー・アクションを経てロマン・ポルノの製作に至るという、日本映画の全盛期から衰退期に当たっている。

その中で作者は、日活の旧作時代劇――鞍馬天狗でいえば、「角兵衛獅子」「江戸日記」「龍攘虎搏」「薩摩の密使」のビデオ化に関与。そうしているうちに、今一人の剣戟の雄、阪東妻三郎主演の「闇の影法師」と出会うことになる。バンツマに関しては先のエッセイの中でも、その主演作「稲妻草紙」に触れ、「白い着流しの阪妻が長い石段の上で大勢の刺客を相手に大殺陣をくりひろげるラストシーンが今でも眼の裏にあざやかだ」と記され、アラカンを別格にすれば、作者にとってはバンツマと裕次郎がベストであるという。

そして「闇の影法師」（監督稲垣浩　日活　昭13）は、そのバンツマによる鞍馬天狗のバリエーションでつくられた快作。幕末のとある港町を舞台に、昼はしがない煙草売り、が、夜ともなると勤皇派の志士を救ける〝闇の影法師〟こと県左馬之介の活躍を描いたもの、バンツマの台詞まわしには独特のエロキューションがあり、覆面姿で現われて「闇の影法師だ――」という時、その「影」の一言に何ともいえぬアクセントがある。

それがまたファンには耐らぬ魅力なのだが、南原幹雄は、この作品のビデオ化にも関与しており、本書『闇の剣士麝香猫』は、いってみれば、作者自身の原体験――少年期から青春時代において自分の胸をときめかせてくれた映画や小説に対する熱いオマージュとして書かれた作品といえるのではないだろうか。

そして今一つ時代小説ファンが再確認をしなくてはならないのは、近年、故隆慶一郎（池田一郎）や池宮彰一郎（池上金男）といった書き手が映画界から小説の世界へ転じて斯界に活況を招来したのはよく知られるところである。が、伝奇ロマンの夢がほとんどついえたかに見えた昭和五十年代、そうした人たちの先陣を切って、類まれな物語性とダイナミズムに裏打ちされた快作を次々と放って読者を獲得していった書き手が南原幹雄だったのである。

そして、南原作品にしばしば見られる映画的なスケールの拡がりや映像的手法による場面処理の仕方、更には台詞の妙味等は、先に記した本書誕生のいきさつからも明らかなよ

うに、この作品では、一際、顕著である、といえるのではないだろうか。

例えば開巻、梅田雲浜が長野主膳に向って「召し捕られた志士は誰だ?」と問うと、しばし間をおいた長野が「梅田雲浜」と答えて、一瞬、紙幅から殺気がたちのぼる思いがする箇所などは、正しく映画の一場面。あるいは麝香猫が有村俊斎にいう「有村さん、まことに申しわけない。わたしの正体は誰にも知られたくないのです。はやく正体を明かせる日がくることをねがっています」という言葉などは、鞍馬天狗や前述の〝闇の影法師〟のそれに置き替えても一向に差し支えないものであろう。

私が先に時代小説を読み馴れた方ならなるほどとうなずかれる、と記したのは、こうした自身の敬愛する先行作品を巧みに換骨奪胎しつつ、時代小説ファンの勘どころをくすぐるストーリーを作っていく作者の小説作法のことをいったのである。

そして、ここからは麝香猫の正体を明かすので、ぜひ、本文を先に読んでいただきたいのだが、本書のもう一つの読みどころは、京都の美しい自然や名所旧跡をバックにした脱出劇のスリルもさることながら、前関白鷹司政通の末子惟在＝実は麝香猫とその美貌の妻蓮子との愛の物語として描かれている、という点ではないだろうか。

青春時代までは詩歌、文学に加えて武道にまで精進したものの、三十を前にして突如として、優雅、怠惰な遊びにうつつをぬかし、ために大納言にまで進んだ官職を棒にふってしまった蹴鞠大納言惟在。しかし、そのもう一つの顔は!?

が、ここまで読み進んだ時、私はまたしても、南原幹雄にしてやられた、との思いを強くした。美貌の妻が、美男子ながらも手荒なことが嫌いで女々しく見えると半ば愛想をつかしていた夫が、実はフランス革命のさ中、断頭台に消えていくはずの貴族たちを英国に脱出させていた秘密結社の首魁だった——これは一説に「鞍馬天狗」に影響を与えたといわれるバロネス・オルツイの『紅はこべ』のメイン・ストーリーなのである。

このように本書『闇の剣士 麝香猫』は、内外のチャンバラ小説、映画に精通した人が読めば読むほど味が出てくる快作であり、南原幹雄にしても、これほど自らの遊びごころを楽しく開陳させた作品は、従来、なかったのではあるまいか。これまで小説や銀幕に活躍した幾多のヒーローに思いをはせながら、ページを繰る手にも思わず力が入る、愉快な逸品といえよう。

本書は平成五年六月、小社より刊行された
『闇の麝香猫』を文庫化したものです。

闇の剣士麝香猫

南原幹雄

角川文庫　10042

平成八年六月二十五日　初版発行

発行者——角川歷彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部（〇三）三二三八—八四五一
営業部（〇三）三二三八—八五二一
〒一〇二　振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八
印刷所——新興印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

な 10-28　ISBN4-04-163328-1　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫ベストセラー

遠く空は晴れても　北方謙三
ハードボイルドの系譜を塗り替える孤峰の大長編小説。新シリーズ。

血の抗争　大藪春彦
果てしなく続く争いの中で、男たちは感情を捨てた——。

アスファルトの虎（タイガー）PART XIII　大藪春彦
光と闇の諧謔曲（スケルツォ）
日本人ドライバー高見沢優。初参戦総合優勝という快挙なるか!?

波の虹　黒岩重吾
人間の深淵を鋭く抉り、男と女の憎悪と哀感を描いた傑作短編集。

黄土の奔流　生島治郎
男の意地と夢を懸けて、難敵待ち受ける大揚子江を遡る——。

遙かなる烽火　柘植久慶
夢か。幻か。若き考古学者が遺跡を追う。国際冒険アクション!!

京都・浜名湖殺人事件 山村美紗

浜名湖畔に美人レポーターの死体が…。沢木麻沙子の推理が冴える。

夏は、愛と殺人の季節 西村京太郎

謎を残す二年前の交通事故。十津川警部、追跡の果てには!?

軽井沢の霧のなかで 内田康夫

四人の女性が避暑地で体験する危険なロマネスク・ミステリー。

美しき薔薇色の殺人 吉村達也

薔薇に傷つけられた死者の右手の真相は？「三色の悲劇」第一弾！

哀しき檸檬色の密室 吉村達也

密室に転がった百個の檸檬と死体の関係は？「三色の悲劇」第二弾！

妖しき瑠璃色の魔術 吉村達也

最終頁に秘められた衝撃の真相！「三色の悲劇」シリーズ最終作。

角川文庫ベストセラー

インペリアル 赤川次郎

ピアニストの母が残した言葉の謎は？ピアノの響きにのせて贈るミステリ。

殺人を呼んだ本 赤川次郎

一冊の「本」にまつわる人々の思いが巻き起こす様々な事件。連作小説集。

捜査線上のアリア 森村誠一

流行作家のMには鉄壁のアリバイが！文壇の内幕を抉る社会派推理。

完全犯罪の使者 森村誠一

不倫相手の女の絞殺死体。事件のかげであざ笑う真犯人。本格推理。

赤かぶ検事奮戦記36 光源氏「隠れ遊びの里」殺人事件 和久峻三

『源氏物語』に似た恋模様が絡んで人が死ぬ…京の秋の奇怪な事件!?

辞任のとき 清水一行

大企業の社長に抜擢された男の心の軌跡…文庫オリジナル五編収録。

歌枕殺人事件
内田康夫

古歌に封印された謎を手操って名探偵浅見光彦が連続殺人に挑む！

赤線物語
清水一行

背景は昭和30年代の風俗——嬌声と笑いに満ちた性の巷の人間喜劇。

男の真剣勝負
津本陽

今最も求められるリーダーとは？現代に甦える16人の英雄の情熱！

アスファルトの虎（タイガー）PART XIV
伝説への終曲
大藪春彦

野望の男に、明日はあるのか!? 大藪文学の金字塔、ここに完結!!

最後のドン
飯干晃一

塗り変えられる暴力団地図を描き人間心理を抉る、迫真の力作！

五左衛門坂の敵討
中村彰彦

時代の大波の陰に秘められた、志ある男たちの凄絶な生きざま。

迷子の花嫁
赤川次郎

結婚式を明日に控えた小夜子が目を覚ますと見知らぬ男の死体が！

赤かぶ検事奮戦記37 奥日光殺人事件
和久峻三

美貌の妻は犯人か？死んだ筈の夫の目撃者も現れ、謎は深まる…

西銀座殺人物語
吉村達也

美人ママに惚れ込んだ社長の運命は？笑いと恐怖のミステリー集！

「さよなら」
吉元由美

愛する彼（あのひと）と不安定な恋に身をゆだねる奈央。切なく透明な恋愛（ラブ・ストーリー）小説。

ブルーもしくはブルー
山本文緒

性格の違う二人の蒼子が入れ替わったら……切ないファンタジー。

鬼神の血脈
榊原史保美

文楽界の異端児・鬼若をめぐる呪われた一族の悲劇とは!?伝奇ロマン。

牛乳時代 らも咄（ばなし）
中島らも
奇想天外痛快無比、らも節が冴える珍作落語の毒演会でございます。

スタジアムで会おう
山際淳司
劇場（スタジアム）では、様々なドラマが生まれ去っていく。感動と興奮の物語（ノンフィクション）。

はみ出し銀行マンの乱闘日記
横田濱夫
支店長の愛人融資枠、天下り大蔵省OBの生態など超過激内部告発。

平凡王
高橋源一郎
日常と超常がパラレルする平凡を究めた著者の超非凡なエッセイ集。

俺には地球が止まってみえるぜ
三代目魚武濱田成夫
名作『はちにい』『虎の糞』『おうよ。』など、新作を大収録！ 第4詩集。

がんばれ!! 日本人
不思議の国ニッポン Vol.21
ポール・ボネ
経済一流の自負もバブルにのまれ、意気消沈の日本人に贈る応援歌。

角川文庫最新刊

セロ弾きのゴーシュ
宮沢賢治
賢治が生前に発表した代表作の数々に、表題作を加えた名作集。

銀河鉄道の夜
宮沢賢治
最大にして最高傑作の表題作ほか、名作・代表作を集める。

インドラの網
宮沢賢治
夢と神秘にあふれた幻想的作品、また〝西域異聞〟を収める。

ビジテリアン大祭
宮沢賢治
生きとし生けるもの全てに対する慈しみと祈りに満ちた作品集。

紺青の鈴
髙橋　治
九谷焼陶工の道を歩む彩子は愛ゆえの苦しみのなかで成長してゆく。

第三版 **俳句歳時記** 春の部 夏の部
角川書店＝編
季語・解説を一新し、例句を大幅に入れかえた、待望の改訂新版！

角川文庫最新刊

Xファイル〜グラウンド・ゼロ
クリス・カーター&ケヴィン・J・アンダーソン　南山　宏訳
不可解な核事故事件に二人のFBI捜査官が挑む！シリーズ第三弾。

ゲット・ショーティ
エルモア・レナード　高見　浩訳
巨匠が描く、最高にクールな悪党たちのハリウッド・ドリーム。

プロント
エルモア・レナード　高見　浩訳
悪行から足を洗うことにしたハリーだが……。本物のハードボイルド。

鮮血の音符
フランソワ・ジョリ　長島良三訳
BGMはジャズ。《組織》の殺人を巡るフレンチ・ハードボイルド。

気象予報士(上)(下)
S・セイヤー　浅羽莢子訳
異常気象とともに発生する無差別連続殺人。S・キング絶賛。

求婚する男
ルース・レンデル　羽田詩津子訳
昔の恋人を取り戻そうとする男の狂気を描く、傑作心理サスペンス。